令曰、「上駿者、下駑者、操於淺而縱於深、其歩卒迭相提挈、或溺者、授弧援之。」令畢而濟。不亡一人。忠綱呼曰、「我藤原秀郷六世之孫也。盍來決死。」兼綱笑曰、「汝以名族、乃爲平氏所驅役邪。」對曰、「平氏奉詔討亂賊。安得不從也。」乃大戰、終射殺兼綱。我軍悉渡、擊大破源氏兵。賴政及子仲綱等皆死。王南出走、中流矢薨。南都僧兵至木津川、聞之引去。重衡等凱旋、獻首闕下。清盛賞忠綱。

訓讀 清盛、子の重衡等を遣はし、二萬騎に將として、追ひて宇治河に擊たしむ。王、平等院に入り、橋を斷ちて軍す。僧徒善く鬪ふ。我が將平盛清、請うて兵を分ち、河内より進み、敵の前路を遮る。下野の人足利忠綱、進んで曰く、「我が家嘗て秩父氏と、利根川を夾みて相挑むに、未だ嘗て流を亂つて戰を決せずんばあらず。今日の利は速戰に在り。何ぞ猶豫を爲さん」と。乃ち手下三百騎を以て先づ渡る。令を下して曰く、「駿の者を上にし、駑の者を下にし、淺きに操りて、深きに縱ち、其の歩卒は迭に相提挈し、溺るゝものあらば、弧を授けて之を援けよ」と。令し畢つて渡る。一人を亡はず。忠綱呼んで曰く、「我は藤原秀郷六世の孫なり。盍ぞ來つて死を決せざる」と。兼綱笑ひて曰く、「汝、名族を以て、乃ち平氏の驅役する所と爲るか」と。對へて曰く、「平氏詔を奉じて亂賊を討つ。安んぞ從はざるを得んや」と。乃ち大に戰ひ、終に兼綱を射殺す。我が軍悉く渡り、擊つて大に源氏の兵を破る。賴政及び子の仲綱等皆死す。王、南に出で走り、流矢に中つて薨ず。南都の僧兵木津川に至り、之を聞いて引き去る。重衡等凱旋し、首を闕下に獻ず。清盛、忠綱を賞す。

通釋 清盛は倅の重衡をやり、二萬餘騎に將として追ひつめ、之を宇治河で討たせた。以仁王は平等院に入つて、其處を本據となし、宇治橋を切り落して陣取つた。以仁王の側の僧兵どもはよく鬪つた。平氏の隊將平盛清は願ひ出て、兵を分けて河内から進んで、敵が南都へ向ふ道を遮り邪魔した。下野國の住人足利忠綱が進んで曰ふには「我が家は、以前秩父氏と利根河を夾んで挑み合つたことが有るが、いつも河を渡つて勝負を決けてゐた。今日の場合に於ても、當方の利とする所は早く戰ふことである。ぐづ〳〵して、手間取つてゐては駄目である」と。そこで手下の三百騎を引きつれ、先發となつて渡つた。其の時、命令を下して曰ふには「善い馬に乘る者は上手の方から、やくざな馬に乘る者は下手の方から進み、淺い處では手綱を確かりと操り、深い處では手綱を放し、歩兵等は互に手を取り合つて援け、若しも溺れさうな者がゐたら、弓末を差し出してやつて、摑まらせて援けてやれ」と。かく命令を下してから河を渡つた。それで、一人も失ふことはなかつた。忠綱は岸に上り、大聲で呼んで曰ふには「藤原秀郷六世の孫である。何ぜ來て命の取り遣りをしないか」と。兼綱が笑つて曰ふには「お前は名家の出であり乍ら、それでゐて平氏にこき使はれてゐるのか(意氣地なしめが)」と。忠綱がそれに對へて曰ふにて「平氏は天子の詔を受けて亂賊を討つてゐるのである。どうして從はない譯に行かうか」と。そこで大に戰ひ、とう〳〵忠綱は兼綱を射殺した。平氏の軍は、悉く河を渡つて大に源氏の兵を擊ち破つた。賴政と其の子の仲綱等は皆死んで終つた。以仁王は南の方へ逃げられたが、流れ矢に中つて薨ぜられた。南都の僧兵は木津川まで進出してゐたが、以仁王以下陣歿せられたと聞いて引き去つた。重衡等は凱旋して、賴

政等の首を朝廷へ獻上した。清盛は忠綱の功を褒めて賞を與へた。

語釋 宇治河（山城）○平等院（宇治橋の南。）○前路（奈良へ進む路。）○秩父氏（平良兼の子孫。其の名不詳。）○利根河（常陸、下總の界。）○上駿者云々（駿馬が流れを遡つて駿くして呉れるから下も手の驚馬は樂になる。深い處で手綱を堅く操ると馬が自由を失つて溺れる。だから深い處では縱つのである。）○提撃（手を取り合ふこと。）○凱旋（凱は兵樂、旋は旗を反へすこと。凱歌を奏して還ること。）

清盛常愛福原、又築島其南、以便漕運、終欲遷都焉。六月、遂決意、趣帝・三宮・百官徙焉。奉帝于賴盛第、遂徙之己第、使兵守法皇。議建宮城。地狹不可建。乃權造焉。物議囂然。

訓讀 清盛常に福原を愛し、又島を其の南に築き、以て漕運に便にし、終に都を遷さんと欲す。六月、遂に意を決し、帝、三宮、百官を趣して徙る。帝を賴盛の第に奉じ、遂に之を己が第に徙し、兵をして法皇を守らしむ。宮城を建てんと議ず。地狹くして建つ可からず。乃ち權に造る。物議囂然たり。

通釋 清盛は常に福原の地を愛し、又島を其の南に築いて、舟の運漕に都合よくし、結局は此處へ都を遷したいと思つてゐた。六月とう〳〵決心して、天皇と三宮、百官をせき立てて、徙つて終つた。天皇を賴盛の屋敷にお留め申したが、遂に之を自分の屋敷に徙し參らせ、一方兵士をして、法皇を守らしめた。天子の御所を建てる相談をした。併し福原の地は、迚も狹くて建てられない。そこで一時的なものをかりに造つた。世間では、隨分喧しく取沙汰した。

語釋 築島（島は經島、波をさける爲めに築かる。）○三宮（この三宮は、建禮門院、後白河法皇、高倉上皇をさす。）

八月、源賴朝奉以仁王令、擧兵伊豆。相模人大庭景親擊走之。武藏人畠山重忠、又擊破其黨三浦氏。景親急騎報捷、且曰、「賴朝走死」。已而東人交來告、「賴朝未死、兵復振。清盛大怒曰、「東國奴輩、皆彼父祖家人。而我流彼於東國。是使彼胥以滅我家也。何異借盜鑰乎」。切齒久之、曰「向使吾不聽池尼請、彼惡得保首領。忘恩規利、敢敵我子孫。其能免神明之罰邪」。重忠父重能、與弟有重在福原。進而言曰、「東人獨北條時政與賴朝婚。其或附之。其他豈肯黨流人。君勿爲意」。平氏子弟、人人奮願東伐。

訓讀 八月、源賴朝、以仁王の令を奉じて、兵を伊豆に擧ぐ。相模の人大庭景親擊つて之を走らす。武藏の人畠山重忠、又其の黨三浦氏を擊破す。景親急騎捷を報じ、且つ曰く、「賴朝未だ死せず、兵復振ふ」と。清盛大に怒つて曰く、「東國の奴輩は、皆彼が父祖の家人なり。而るに我れ彼を東國に流す。是れ彼をして胥ひ以ゐて我が家を滅さしむるなり。何ぞ盜に鑰を借すに異ならんや」と。切齒すること之を久しうして、曰く、「向きに吾をして池尼の請を聽かざらしめば、彼れ惡んぞ首領を保つを得ん。恩を忘れ、利を規り、敢て我が子孫に敵す。其れ能く神明の罰を免れんや」と。重忠の父重能、弟有重と福原に在り。進んで言つて曰く、「東人獨り北條時政、賴朝と婚す。其れ或は之に附かん。其の他は豈に敢て流人に黨せんや。君意と爲すこと勿れ」と。平氏の子弟、人人奮つて東伐を願ふ。

通釈　八月、源頼朝は以仁王の令旨を奉じて兵を伊豆に擧げた。相模の人大庭景親がそれを擊つて走らせた。武蔵の人畠山重忠は、又頼朝の徒黨である三浦氏を擊ち破つた。景親は早打ちで、勝つた報らせをして、且つ曰ふには「頼朝は逃げて死んだ」と。その内に關東の人が入れ代りやつて來て告げて曰ふのに「頼朝は、まだ死なないで其の勢が復び盛んになつてゐる」と。清盛は大層怒つて曰ふのに「關東の奴等は、皆頼朝の父祖の家來である。それと知りつつ予は頼朝を東國に流した。これはつまり彼等をして一團となつて予の家を亡ぼさせるように仕向けた形だ。考へて見れば恰度盜賊に鑰を貸した樣なものであつた」と。殘念がつて、長い間齒をくひしばつて居つたが、又曰ふには「あの時、予がもし池の尼の願ひ出を聞かなかつたら、頼朝は命を全うすることは到底出來なかつたのだ。それであるのに、その恩を忘れて、己の利を計り、我が子孫に對して敢て抵抗するのである。此の恩知らずがどうして神樣の罰を免れることが出來ようぞ」と。畠山重忠の父重能は其の弟の有重と一緒に福原に居つた。進んで、言ふのには「關東の人々の中ではただ北條時政だけが、頼朝と婚姻を結んで居るだけです。ですから彼は或は頼朝に附くかも知れません。其の外の者がどうして流し者などに味方しませうや。御心配なされますな」と。平氏の一族の者が多く奮ひ起つて關東征伐に出かけたいと願ひ出た。

語釋　父祖（爲義義朝等をさす。）　○胥以（相率ゐて、つになる。）　○保二首領一（首を落されない。で維持する。）　○流人（流し者、頼朝をさす。）

清盛輩入、見二上皇一曰、「陛下妙齡、蓋未レ及レ知耳。往時有二爲義・義朝者一、敢行二凶逆一、欲レ敵二法皇一。臣以二謀略一誅二夷之一。而義朝少子、有二頼朝者一。此竪子、獲二之伊吹岳麓一。當レ斬。臣繼母爲請レ宥レ之。臣卽召見之。曰、十三歲。短身涅齒、有レ問輒答、不レ知。臣憫二其幼稚一、且自謂與源氏非レ有二宿怨一、特以二君命一焉爾。遂宥之。今聞、其在二配所一、敢謀不良。臣不レ堪二悔恨一。請得宣旨一討之。」上皇曰、「稟二法皇一。」答曰、「主上幼、陛下親父。決在二聖斷一。何直稟二法皇一。爲二陛下一莫乃庇二源氏一乎。」上皇哂曰、「猶爲二此言一邪。」卽賜二宣旨一。因問二大將一、可レ屬レ誰。曰、「臣嫡孫維盛可。」卽命二維盛一、以二右近衞中將一爲二追討使一、而忠度翼レ之。用二高祖正盛伐一源義親一故事一、賜二驛鈴一、將二五千騎一、發二福原一。以二齋藤實盛諳一東事一、以爲二鄕導一、行收レ兵、至二駿河一。

訓讀　清盛輩して入り、上皇に見えて曰く、「陛下は妙齡、蓋し未だ知るに及ばざるのみ。往時爲義、義朝なる者有り。敢て凶逆を行ひ、法皇に敵せんと欲す。臣、謀略を以て之を誅夷せり。而して義朝の少子に頼朝なる者有り。此の竪子は、之を伊吹岳の麓に獲たり。斬に當る。臣の繼母爲めに之を宥さんことを請ふ。臣、卽ち之を召見す。曰く、十三歲なりと。短身涅齒、問ふこと有れば、輒ち知らずと答ふ。臣、其の幼稚なるを憫み、且つ自ら謂ふに、源氏と宿怨有るに非ず。特に君命を以て爾りと。遂に之を宥す。今其の配所に在つて、敢て不良を謀ると聞く。臣、悔恨に堪へず。請ふ、宣旨を得て之を討たん」と。上皇曰く、「法皇に稟せよ」と。答へて曰く、「主上は幼にして、陛下は親父なり。決、聖斷に在り。何ぞ直に法皇に稟するを爲さんや。陛下乃ち源氏を庇ふ莫からんか」と。上皇哂つて曰く、「猶ほ此の言を爲すか」と。卽ち宣旨を賜ふ。因つて大將は誰に屬す可きかと問

ふ。曰く、「臣の嫡孫維盛可なり」と。卽ち維盛に命じ、右近衞中將を以て追討使と爲し、而して忠度之を襲く。高祖正盛、源義親を伐つの故事を用ゐ、驛鈴を賜ひ、五千騎に將として、福原を發す。齋藤實盛、東事を暗んずるを以て、鄕導と爲し、行々兵を收めて駿河に至る。

通釋 清盛は、手車に乘つて宮中へ參入し、上皇に拜謁していふには「陛下はまだ御若くぬらせられまするから御存知にもなりますまい。むかし、爲義、義朝といふものが居りました。兇惡な叛逆を致しまして、法皇に手向ひをしようとしました。私は謀で以て、之を誅して終ひました。元來斬罪に行ふべきでありました。所が私の繼母が座いました。この小僧は、伊吹山の麓で召し取りました。この小僧の爲めに命乞ひを致しました。私は早速之を呼び寄せてどんな小僧か會つて見ました。年は十三だと申して居りました。丈は低く、齒は黑く染め訊問致しますると何事も知らない〳〵と答へました。私も、その年の幼いのを可哀さうに思ひ、それに考へて見ますと何も源氏に對して古い怨がある譯ではなく、唯だ君の御命令で源氏と鬪をしただけのことであります。こんな幼ない小兒を殺しても致方ないので、とう〳〵命を助けて遣はしました。所が聞けば今この者が流された土地で良からぬ企をして居るといふことで御座います。私は殘念に堪へません。何卒宣旨を戴いて、天子の命で之を討ち度い所存で御座います」と。上皇は仰せらるるに「朕にはよく分らぬから、法皇に申上げて見よ」と。清盛答へて曰ふのに「主上は、まだ誠に御幼少で、陛下は主上の御父君であらせられるので御座います。之を御決め下さるのは陛下の御裁斷に待つより外御座いません。直接法皇に申上げるにも及はないことであります。陛下がその樣に仰せられるのは、或は源氏をお庇ひなされるのは御座いませんか」と。上皇は晒つて仰せられるに「まだ、左樣な事を申し居るか疑ひ深い事ぢや」と。卽座に、宣旨を下された。そこで陛下は「大將は誰に申付くべきか」とお尋ねなされた。清盛は曰ふのに「それには、私の世嗣の孫である維盛が宜しう御座います」と。早速維盛に命じて、右近衞中將を本官として、今度の追討使となし、別に忠度が之を輔佐することとなつた。高祖の正盛が源義親を討つた時の前例を用ひ、驛鈴を下され、五千騎に將となつて福原を出發した。別に齋藤實盛が關東の事情に詳しいので案內役となし、行く行く、兵士をかりあつめて、駿河の國に至つた。

語釋 上皇（高倉上皇。）○妙齡（年の若いこと。此の時實算二十歲。平治の亂の時には高倉天皇はまだお生れになつてゐなかつた。）○法皇（後白河法皇。）○伊吹岳（近江美濃の界。）○涅齒（おぐろをつけて齒の黑いこと。）○不良（謀叛）○主上幼（御歲三）○高祖（五世の祖。）○故事（上に見ゆ。）

實盛曰「宜急踰足柄、收武藏相模兵。藤原忠清曰「今我兵皆京畿新募。以此深入、未見其可。」維盛從之。實盛乃辭而西。維盛曰「無實盛、吾寧不能戰乎。」以忠清爲先鋒、進軍于富士河。當此時、畠山重忠以下皆附賴朝、以二十萬騎至河東、使使者來貽書。多譏言。忠清勸維盛、斬其使者、相持未戰。我軍夜聞水禽起、相驚以爲敵大至也。人馬相踏藉而走。維盛怒、欲留戰。忠清固諫。乃西歸。平明、源氏軍乃知之、令一將來追。伊藤某殿戰而死。維盛歸至近江。清盛弗許其入京師。曰「汝奉王命討亂賊、不交兵

而歸。何面目來見我乎。軍卽不利、盍横尸原野。」因欲流維盛到忠清。衆救解之而止。

訓讀 實盛曰く、「宜しく急に足柄を踰えて、武藏相摸の兵を收むべし」と。藤原忠清曰く、「今、我が兵は皆京畿の新募なり。此を以て深く入るは、未だ其の可なるを見ず」と。維盛之に從ふ。實盛乃ち辭して西す。維盛曰く、「實盛無きも、吾れ寧に戰ふこと能はざらんや」と。忠清を以て先鋒と爲し、進んで富士河に軍す。此の時に當り畠山重忠以下皆賴朝に附き、二十萬騎を以て河東に至り、使者をして來り書を貽らしむ。謾言多し。忠清、維盛に勸めて其の使者を斬らしめ、相持して未だ戰はず。我が軍、夜、水禽の起るを聞き、相驚き、以爲へらく敵大に至れるなりと。人馬相踏藉して走る。維盛怒り、留り戰はんと欲す。忠清固く諫む。乃ち西歸す。平明源氏の軍乃ち之を知り、一將をして來り追はしむ。伊藤某殿戰して死す。維盛歸つて、近江に至る。清盛其の京師に入るを許さず。曰く、「汝、王命を奉じて亂賊を討ち、兵を交へずして歸る。何の面目ありて來つて我を見るか。軍卽し利あらずんば、盍ぞ尸を原野に横へざる」と。因つて維盛を流し、忠清を到ねんと欲す。衆、之を救解して止む。

通譯 實盛が曰ふのに「急に足柄山を越えて、武藏相摸の兵士を集めて味方にして置いた方が宜いでせう」と。藤原忠清が曰ふのに「今我が兵は、皆京都近くから新に募集したものばかりである。そんな兵士をつれて深く敵地(武藏相摸)に入るのは如何考へて見ても善いことはない」と。維盛は其の說に從つた。實盛は、自分の言が用ひられないので辭職して西の方京都へ還つて終つた。維盛が曰ふには「實盛が居なくたつて戰の出來ないこともあるまい」と。忠清を先鋒とし、進んで、富士河の河邊に陣取つた。丁度この時、畠山重忠以下の者も皆賴朝

について、賴朝は、結局二十萬騎を率ゐて、富士河の東に至り、使者を遣つて書面を平家方へ送り届けさせた。その文中に無禮な言葉が多かつた。忠清は維盛に勸めて、其の使者を斬殺さしめ、互に睨み合ひ、まだ、戰爭といふ所まで行かなかつた。夜になつて、平家の軍では水鳥が飛び立つ羽音を聞いて吃驚し、これはテッキリ敵が大擧してやつて來たものと思ひ込んで　慌てゝ人や馬が互に踏み合つて逃げ出した。維盛は怒つて、ふみ留まつて戰はうとした。忠清は固くそれを諫めた。そこで致方なく西へ、京都へ歸つて行つた。夜があけて源氏の軍では平氏が逃げたことを知つて一人の大將を遣つて追つかけさせた。伊藤某が殿してそれと戰つて死んだ。維盛は歸つて近江まで來た。清盛は怒つて維盛が京都に入ることを許さなかつた。曰ふには「お前は天子の御命令を承けて謀叛人を討ちに行き乍ら一度の戰爭もしないで歸り失せた。どの面下げて我に會ひに來たのか。戰が若し都合よく行かなければ何故尸を原野に横へて、討死をせなんだか」と。そこで、維盛を流し、忠清を首斬りに處せようとした。多勢の人が辯護に力め、やつとそのことは止めになつた。

語釋 新募(新たに募集した兵士。)　○踏藉(互に踏み合ふ。)　○一將(飯田家義。)　○殿(軍後を殿といふ。)　○伊藤某(武者次郎。)　○不レ交レ兵(兵は武器。)

先是、源義仲起兵于信濃。義仲幼孤。齋藤實盛取育之、已而屬之木曾人中原兼遠。於是、宗盛召兼遠、命亟縛義仲來獻。兼遠效誓書還、逐義仲。

訓讀 是より先き、源義仲兵を信濃に起す。義仲は幼にして孤なり。齋藤實盛取つて之を育し、已にして之を木曾の人中原兼遠に屬す。是に於て、宗盛、兼遠を召し、命じて亟に義仲を縛し來り獻ぜしむ。兼遠誓書を

效して還り、義仲を逐ふ。

通釋 これより以前に源義仲が兵を信濃に起した。義仲は幼少の頃から孤であつた。齋藤實盛が引き取つて世話をし育ててゐたが、その内に譯あつて之を木曾の人中原兼遠に預けたのである。義仲が兵を擧げたので宗盛は兼遠を召し寄せ、早く義仲を縛つてつれて來るように命じた。兼遠は平家に背かぬといふ誓の一札を入れて國に還り、義仲を逐ひ遣つた。

語釋 幼孤（父の義賢は姪源義平の爲めに大藏谷で殺された。）

是月、上皇再幸嚴島。清盛從焉。因要上皇作書、誓不右源氏。既還、造宮于夢野、以奉法皇。自清盛遷都、上下苦之。山徒亦數請復舊都。清盛會諸公卿、問兩都孰便、公卿皆希其旨曰、「福原便。」獨左大辨藤原長方曰、「平安便。」清盛作色而入。衆爲長方危之。已而清盛卽奉三宮以下復都平安。衆大悅。時十一月也。或問長方曰、「子何以能忤相國」答曰、「使無悔心、何問於人。我因而導之耳。」清盛素重長方。先是長方建議於朝曰、「亂人得志、是天意人心所致。宜復政於法皇、召還基房・師長等。改過遷善、庶幾免焉。」清盛稍從其言。

訓讀 是の月、上皇再び嚴島に幸し、清盛從ふ。因つて上皇の書を作りて、源氏を右けざるを誓ふことを要む。既に還り、宮を夢野に造り、以て法皇を奉ず。清盛都を遷してより、上下之を苦しむ。山徒も亦數舊都に復せんことを請ふ。清盛諸公卿を會し、兩都孰れが便なるかを問ふ。公卿皆其の旨を希うて曰く、「福原便なり」と。獨り左大辨藤原長方曰く、「平安便なり」と。清盛色を作して入る。衆、長方の爲に之を危ぶむ。已にして清盛卽ち三宮以下を奉じて、都を平安に復す。衆大に悅ぶ。時に十一月なり。或ひと長方に問うて曰く、「子、何を以つて能く相國に忤ふ」と。答へて曰く、「悔心無からしめば、何ぞ人に問はん。我れ因つて之を導くのみ」と。清盛素より長方を重んず。是より先き、長方、朝に建議して曰く、「亂人志を得るは、是れ天意人心の致す所なり。宜しく政を法皇に復し、基房、師長等を召還すべし。過を改め善に遷らば、庶幾はくは免れん」と。清盛稍其の言に從ふ。

通釋 この月、高倉上皇は、再び嚴島へ行幸に相成り、清盛はそれに扈從した。そこで清盛は上皇が一札をお入れになつて、源氏を決して助けないといふことをお誓ひなされるやうに强要した。お還りになつてから、宮殿を夢野に造り、其處へ法皇をお入れ申した。清盛が都を福原に遷してからは、朝廷の者も人民も之に苦しんだ。比叡山の僧徒も亦度々舊の京都に還へることを願ひ出た。そこで清盛は、諸公卿を集めて、京都と福原とどつちが便利かといふことを尋ねた。すると、公卿は、清盛の氣に入らうと思つて「福原の方が便利だ」と曰つた。ただ左大辨藤原長方は「平安城の方が便利だ」といつた。清盛は顏色を變へて、内に入つた。多くの人々は長方が酷い目に合ふだらうと其の身の上を心配してゐた。その内に間もなく清盛は三宮以下をおつれ申して都を平安に

もどした。皆大層悦んだ。それは十一月のことであつた。或る人が長方に問うて曰ふのに「貴公は何故に清盛の意に逆つたのか」と。答へて曰ふには「清盛殿は後悔してゐればこそ皆の者に尋ねたので、後悔してゐなかつたら、どうして態々人に問ふものか。私はそこを利用して誘つて上げただけのことである」と。清盛は、平素、長方を尊敬して居た。これより以前長方は朝廷に建議していふには「謀叛人が志を得るのは、畢竟天の御思召と人の心とがもとになつて居ります。今の内に政を法皇にお還し申し、前に流した基房や師長等を召還した方が宜いでせう。さういふ風に自分の過を改め、善に遷つて行つたならば、或は一家滅亡の災禍を免れることが出來るでありませう」と。清盛は、やや此の言葉に從ふ樣になつて來た。

語釋 右(助け)る。)○夢野(攝津湊川の西北。)○希二其旨一(氣に入らんとすること。)○左大辨(太政大臣に屬し、中務、治部、式部、民部を管し、宮中を糾判するを掌る。左右大中小の段階がある。)○作レ色(顏色を變へること。)○亂人(頼朝、義仲をさす。)

平氏家多レ怪。清盛嘗獨坐。見二階下有二數百人頭一。合爲二一大頭一。瞋眼視二清盛一。清盛亦瞋レ眼視レ之。人頭漸縮小而滅。占者曰「爲義・義朝等鬼也」。又有レ鼠。巢二厩馬尾一。占者曰「小侵レ大。子犯レ午。爲二源逼一平之兆一。」復都之月。近江源氏兵起。翌月。遣二知盛・資盛等一。將二兵擊夷レ之。初園城寺黨二賴政一。得二重讎一。益怨二平氏一。至レ是。與二山徒一皆應二近江源氏一。乃遣二清房一。攻二園城寺一。燒夷之。殺二僧八百人一。又聞二南都叛一。遣二妹尾兼康一。赴攻。僧徒逆擊敗レ之。又造二木丸一。呼爲二淨海頭一。蹴擊之。清盛積怒。是月。遣二重衡一。率二兵數千騎一。擊レ之。燒二東大・興福二寺一。殺二僧數百人一。而諸道源氏益興。

訓讀 平氏の家、怪多し。清盛嘗て獨り坐す。階下に數百の人頭有るを見る。合して一大頭と爲り、眼を瞋らして清盛を視る。清盛も亦眼を瞋らして之を視る。人頭漸く縮小して滅す。占者曰く、「爲義、義朝等の鬼なり」と。又鼠有り。厩馬の尾に巢くふ。占者曰く、「小、大を侵し、子、午を犯す。源、平に逼る兆と爲す」と。都を復するの月、近江源氏の兵起る。翌月、知盛、資盛等を遣はし、兵に將として擊つて之を夷げしむ。初め園城寺、賴政に黨して重讎を得たり。益平氏を怨む。是に至つて、山徒と皆近江源氏に應ず。乃ち清房を遣はし、園城寺を攻めしめ、之を燒夷し、僧八百人を殺す。又南都叛くと聞き、妹尾兼康を遣はし赴き攻めしむ。僧徒逆へ擊つて之を敗る。又木丸を造り、呼んで淨海の頭と爲し、之を蹴擊す。清盛積怒す。是の月、重衡を遣はし、兵數千騎を率ゐて之を擊たしめ、東大、興福の二寺を燒き、僧數百人を殺す。而して諸道の源氏益興る。

通釋 その頃、平氏の家に奇怪な事件が多かつた。清盛がある時一人で坐つて居た。階の下に數百の人の頭のあるのを見た。それが、合して、一つの大きな頭となつて、眼を怒らして凝乎と清盛を見詰めた。清盛も亦眼をむいて怒り之を見つめた。その内にその人頭はだんだん小さく縮まつて消えて終つた。占ひ者が曰ふのに、「これは爲義・義朝等の亡靈である」と。又鼠が厩の馬の尻尾に巢を作つたりした。占ひ者がいふには「小さい者が大きいものを犯し、子(鼠)が、午(馬)を犯したのである。これは、源氏が平氏に逼る前兆である」と。福原から京都へ都を復した月に、近江源氏の兵が起つた。その翌月、知盛、資盛等を遣つて兵を率ゐ擊つて之を平らげさせ

た。はじめ園城寺は、賴政に味方した爲めに、重いお咎めを受けた。それからは益平氏を怨んだ。近江源氏が起つたので園城寺は比叡山の僧徒とともに、皆近江源氏に與みした。そこで清盛は清房を遣はして園城寺を攻めさせ、之を燒き拂ひ、僧侶八百人を殺した。又奈良の東大寺・興福寺の僧徒も叛いたと聞いて、妹尾兼康を遣はし行いて攻めさせた。僧徒は之を迎へ擊つて打ち敗つた。又彼等僧徒は木の鞠を拵らへ、これは淨海の頭だといつて蹴つたり、なぐつたりした。清盛は重ね〳〵のことに大層怒つた。この月、重衡を遣はし、兵數千騎を率ゐて之を擊たせ、東大・興福の二寺を燒き拂ひ、僧數百人を殺した。しかし諸道の源氏は、益興つて來た。

詰譯 鬼（人間の亡靈。）○子犯ル午（子は北方陰、午は南方陽、北兵卽ち義仲の兵が南方京都を犯すの兆である。）○近江源氏（近江にゐた佐々木、柏木、山本の諸族。）

養和元年正月、上皇病崩。清盛益悔悟復政於法皇。法皇不聽。固請而聽。乃獻美濃・讃岐爲御邑。詔以宗盛總管近畿。二月、斬河內人源義基。聞源行家擧兵至美濃、遣知盛・通盛・清經・忠度等伐之。敵據板倉壘。我兵遽出其後、縱火攻拔之、走行家。清盛又令南海兵控扼東兵、而徵糧于北陸・西海。西海菊池氏・緒方氏、皆應源氏。肥後守平貞能請往定之。法皇令院廳官從貞能。已而知盛在洲股、病作、置戍而還。源氏益振。宗盛乃欲親將大軍東伐。法皇許之、命統諸武官、以官符徵兵、刻日而發。衆曰「此行必夷源氏。」以二十七日發行。

訓譯 養和元年正月、上皇病んで崩ず。清盛益悔悟し、政を法皇に復へす。法皇聽さず。固く請うて聽さる。乃ち美濃・讃岐を獻じて御邑となす。詔して宗盛を以て近畿を總管せしむ。二月、河內の人源義基を斬る。源行家、兵を擧げて美濃に至ると聞き、知盛、通盛、清經、忠度等を遣はし之を伐たしむ。敵、板倉の壘に據る。我が兵遽つて其の後に出で、火を縱ち、攻めて之を拔き、行家を走らす。清盛又南海の兵をして東兵を控扼せしめ、而して糧を北陸、西海に徵す。西海の菊池氏、緒方氏皆源氏に應ず。肥後守平貞能往いて之を定めんと請ふ。法皇院の廳官をして貞能に從はしむ。已にして知盛、洲股に在りて、病作り、戍を置いて還る。源氏益振ふ。宗盛乃ち親から大軍に將として東伐せんと欲す。法皇之を許し、命じて諸々の武官を統べ、官符を以て兵を徵し、日を刻して發せしむ。衆曰く「此の行必ず源氏を夷げん」と。二十七日を以て行を發す。

通譯 安德天皇の養和元年正月に高倉上皇が御病氣で崩ぜられた。清盛は益々前非を後悔して政治を法皇にお返ししようとした。法皇はお許しにならなかつた。たつてお願申したので許された。そこで、美濃と讃岐とを獻じて、法皇の御料地とした。法皇は詔して、宗盛に畿內地方を總て支配せしめられた。二月に河內の人源義基を斬つた。又源行家が兵を擧げて美濃へやつて來たと聞いて、知盛・通盛・清經・忠度等を遣はして之を征伐せしめた。敵は板倉の壘に立て籠つた。我が平氏の兵はぐるり廻つて敵の後に出で、火をかけ、攻めて行家を走らせた。清盛は又南海の兵をして、關東の兵の西上するのをくひ止めさせ、一方兵糧を北陸西海から徵發した。所が西海道の菊池氏や、緒方氏は、皆源氏に附いてゐた。肥後守平貞能は、自身、其の地に出かけて之を平定し度いと申出た。法皇は院の廳官をして、貞能に隨いて西下せしめられた。その內に知盛は、尾張の洲股で病氣が

發り、守備兵を置いて都へ還つた。源氏の勢は益々盛んとなつた。そこで宗盛は親ら大軍に將となつて東方を征伐しようと思つた。法皇は之をお許しになり、命じて、宗盛に諸々の武官を統轄せしめられ、又太政官の官符で兵士を徵集することにし、日限をきめて出發せしめられることとなつた。皆の者が曰ふのに「今度の軍には必ず源氏を討ち平げるのである」と。二十七日に出發することゝなつた。

語釋 源義基（頼信の子孫。）○源行家（爲義の第十子。）○板倉（美濃。）○控扼（要害な地でせき止めること。）○菊池氏（肥後にあり名は惟能。）○院廳官（法皇の宮中の役人）○洲股（美濃。）○官符（太政官から發行した割符。）

先發一日、清盛疾作、宗盛止行。車馬集於六波羅。清盛病煩熱、浴於冷水。水輒沸。叫號聲徹門外。閏二月、疾大篤。舉族擁枕、問所欲言。清盛大息曰「生者必死。何獨我。我自平治年間、建功王室、專制天下、位極人臣、爲帝者外祖。復何所遺憾。所遺憾者、未睹源頼朝頭而死。吾死之後、毋以供佛爲。毋以誦經爲。特斬頼朝頭懸我墓前。我子孫・臣隷、咸服我言、勿敢或怠」病七日薨。歳六十四。遺表法皇事必與宗盛議。

訓讀 發するに先きだつこと一日、清盛疾作り。宗盛行を止む。車馬六波羅に集る。清盛、煩熱を病み、冷水に浴す。水輒ち沸く。叫號の聲、門外に徹す。閏二月、疾大に篤し。擧族枕を擁し、言はんと欲する所を問ふ。清盛大息して曰く「生者は必ず死す。何ぞ獨り我のみならんや。我れ平治年間より、功を王室に建て、天下を專制し、位人臣を極め、帝者の外祖と爲る。復何ぞ遺憾とする所あらん。遺憾とする所の者は、未だ源頼朝の頭を睹ずして死することなり。吾れ死するの後、佛に供するを以て爲す毋れ。經を誦するを以て爲す毋れ。特だ頼朝の頭を斬つて我が墓前に懸けよ。我が子孫、臣隷、咸く我が言に服し、敢て怠ることある勿れ」と。病むこと七日にして薨ず。歳六十四。法皇に遺表ずらく、事必ず宗盛と議せよと。

通釋 出發に先立つこと一日、即ち二十六日に清盛の病氣が發つたので、宗盛は出陣を見合はせた。見舞の車馬が六波羅の清盛の屋敷に集つた。清盛は熱病に罹り、冷や水を浴びた。水は忽ち沸いて熱くなつた。彼が苦しんで叫めき號ぶ聲は、門の外まで聞えた。閏の二月になつてからは、病氣が一層重つて來た。一族の者共は皆集まつて、清盛の枕元を取り圍み、何か言ひ度いことは無いかと問ふた。清盛は大きな溜め息をして曰ふのに「生ある者は誰だつて死ぬるのである。何も儂ばかりが死ぬる譯ではない。が儂は考へて見ると平治年間から、皇室に手柄を立て、天下の政治を思ふままに切り廻し、從一位太政大臣といふ人臣として此の上ない所まで陞り、それ計りか天子樣の母方の祖父にまでなつた。この上外に何の心殘りに思ふ所があらうぞ。ただ殘念なのは、源頼朝の首を睹ないで死ぬることだけだ。儂が死んだ後は、佛に供養するにも及ばない、お經など讀んで呉れなくともいい。ただ頼朝の首を斬つて、儂の墓の前に懸けて貰らひ度い。儂の子孫や家來どもは、皆この今の言を忘れず、怠るやうなことがあつてはならぬぞ」と。かくて病氣に罹つて七日目に死んだ。その時歳六十四であつた。法皇に對しては、別に書置の上書をして、今後のことは總べて宗盛と御相談下さるやうにと認めてあつた。

語釋 徹（聲の響が門外まで通る。）○外祖（母方の祖父。清盛は安德天皇の御母德子の父である。）○服（服膺すること。心につけて忘れぬやうにする。）○病七日薨（清盛の病氣は二月から閏二月に跨てゐる。七日で死んだといへ

（ば發病は二月の末であつたことになる。）

清盛既薨。宗盛奉還法皇於法住寺殿、奏曰「臣不肖、不能救父過、以至於今。今後、將唯聖旨是仰。」法皇乃會公卿、議調兵食、遣重衡・維盛・通盛・忠度等、入美濃。併其戍兵、與源行家・源義圓夾水而戰、斬義圓、破行家虜行家子行賴、追行家、至參河而還。

訓讀 清盛既に薨す。宗盛、法皇を法住寺殿に奉還し、奏して曰く、「臣不肖にして、父の過を救ふこと能はず、以て今に至れり。今より後、將に唯だ聖旨を是れ仰がんとす」と。法皇乃ち公卿を會し、兵食を調するを議し、重衡・維盛・通盛・忠度等を遣はし、美濃に入らしむ。其の戍兵を併はせ、源行家・源義圓と水を夾んで戰ひ、義圓を斬り、行家を破り、行家の子行賴を虜にし、行家を追ひ、三河に至つて還れり。

通釋 清盛は早や死んで終つた。宗盛は、法皇をもとの御所であつた法住寺殿にお還へし申し、その上で申上げて曰ふには「私は誠に愚かな者で、父の過失を救ひ直ほすことも出來ず、今日に立ち至りました。今後は何事によらず、皆只管陛下の御思召通りに致さうと思ひます」と。そこで法皇は公卿をお集めになつて、兵士や糧食を調發することを相談致され、又重衡・維盛・通盛・忠度等を遣はし、美濃へ行かしめられた。重衡等は美濃の守備兵を一緒にして、源行家・源義圓と洲股川を中にして戰ひ、義圓を討ち取り行家を打ち破り、行家の倅の行賴を生捕りにし、行家を追つかけ、三河の國まで行つて引きかへした。

語釋 奉二還法皇一（此の時法皇は賴盛の屋敷にねられた。）

賴朝數遺書於賴盛、謝其舊恩、又間上書曰「臣非敢爲亂。乃靖亂耳。陛下尙不棄平氏、則請兩講和、二姓竝仕、如往昔事。其忠其否、簡在陛下。」法皇以書示宗盛。宗盛答曰「臣父臨終、命臣等曰、必與賴朝決死。語猶在耳。臣不能和矣。」於是請敕陸奥藤原秀衡、擊賴朝、敕越後城資長、擊義仲。資長平維茂七世孫也。六月、資長與弟長茂收兵、南擊義仲。不利還。八月、除資長越後守、秀衡陸奥守、趣伐源氏。資長復發、疾作卒。九月、宗盛遣從弟通盛・經正、東與源氏戰于越前。敗績、經正走入若狹。通盛退保敦賀城、召經正。未至、義仲兵來攻。乃解兵西還。壽永元年九月、城長茂復南伐義仲。復不利還。是月、宗盛任內大臣、賜隨身兵仗。具騶從拜賀。二年二月、叙從一位。

訓讀 賴朝、數書を賴盛に遺り、其の舊恩を謝し、又間に上書して曰く、「臣は、敢て亂を爲すに非ず。乃ち亂を靖んずるのみ。陛下、尙ほ、平氏を棄てざれば、則ち請ふ兩ながら講和し、二姓竝び仕ふること、往昔の事の如くせん。其の忠其の否、簡ぶこと陛下に在り」と。法皇、書を以て宗盛に示す。宗盛答へて曰く、「臣の父、終に臨み、臣等に命じて曰く、必ず賴朝と死を決せよと。語、猶ほ耳に在り。臣、和する能はず」と。是に於て、請うて陸奥の藤原秀衡に敕して賴朝を擊たしめ、越後の城資長に敕して義仲を擊たしむ。資長は平維茂七世の

孫なり。六月、資長、弟長茂と兵を收め、南、義仲を擊つ。利あらずして還る。八月、資長を越後守に、秀衡を陸奥守に除し、趣して源氏を伐たしむ。資長復發し、疾作りて卒す。九月、宗盛、從弟通盛、經正を遣はし、東、源氏と越前に戰はしむ。敗績し、經正走つて若狹に入る。通盛退いて敦賀城を保ち、經正を召す。未だ至らざるに、義仲の兵來り攻む。乃ち兵を解いて西に還る。壽永元年、九月、城長茂復南、義仲を伐つ。復利あらずして還る。是の月、宗盛内大臣に任ぜられ、隨身兵仗を賜はる。趨從を具へて拜賀す。二年二月、從一位に叙せらる。

通釋 頼朝は、度々禮狀を頼盛の所へ送つて、昔の恩を謝し、又内々に法皇に上書していふには「私は決して亂をしようといふのでは御座いません。反對に亂を取り鎭めやうとしてゐるに過ぎないので御座います。陛下が依然として平氏をお見棄てでないのならば、何卒源平兩家で和睦をして、昔のやうに源平二氏相並んでお仕へ申し度いと存じます。その忠と不忠とは陛下御自身お見分けなされ、お擇びなされませ」と。法皇、この書を宗盛にお見せになつた。宗盛はお答へしていふには「私の父が臨終の際に私どもに申付けましたには、必ず共に頼朝と死を決して戰へとのことでした。その言葉はまだ耳に殘つて居りまする。私には和睦することは出來ません」と。そこで宗盛はお願ひ申して、陸奥の藤原秀衡に詔して、頼朝を討たせ、越後の城資長に詔して、義仲を討たせることにして貰らつた。資長は平惟茂七世の孫である。六月、資長は、弟の長茂と一緒に兵を召集して南の方、義仲を擊つた。うまく行かなくて還つた。八月、資長を越後守に秀衡を陸奥守に任命し、督促して、源氏を伐たせた。資長は又出陣したが、病氣が發つて死んで終つた。九月、宗盛は、從弟の通盛・經正を遣はし、東の方源氏と越前で戰はせた。負けて經正は若狹に逃げ込んだ。通盛は、退却して、敦賀城を押し守り、經正を呼び寄せた。まだ來ない中に、義仲の兵が攻めて來た。迚も叶はぬと見たから、兵を解散して西へ還つて行つた。安德天皇の壽永元年九月、城長茂は再び南の方義仲を伐つた。二度失敗に終つて還つた。この月、宗盛は内大臣に任ぜられ隨身兵仗を賜はつた。馬やお供を揃へ、參内して御禮を言上した。二年二月には、從一位に叙せられた。

語釋 舊恩（頼盛の母池ノ尼に助けられた恩。）○其忠其否（源平二氏のどちらが忠で、どちらが不忠か。）○東（越前は京都からすれば東。）○敦賀城（越前。）○騶從（騶は馬の供、從は人の供。）○拜賀（昇進の禮をすること。）

四月、以維盛・通盛・忠度等爲追討使、將山陽・山陰・西海諸國、及參河以東・若狹以南、徵兵十萬餘人、入北陸道、將夷義仲、然後及頼朝也。齋藤實盛在遣中、謂大庭景尙曰、「平替源興、盍降木曾。」景尙曰、「東人無不知吾輩姓名。以興衰變節、若人言何。」實盛曰、「吾徒以試子耳。」入見宗盛曰、「越前臣鄉也。古曰、衣錦歸鄉。臣受君恩久矣。今老矣。唯有一死以報君。君盍賜錦直垂。臣衣以歸、死有餘榮。」宗盛憫之、如其言。

訓讀 四月、維盛、通盛、忠度等を以て追討使と爲し、山陽、山陰、西海の諸國、及び參河以東、若狹以南の徵兵十萬餘人に將として、北陸道に入り、將に義仲を夷げ、然る後、頼朝に及ばんとす。齋藤實盛、遣中に在り。

大庭景尚に謂つて曰く、「平替れ源興る。盍ぞ木曾に降らざる」と。景尚曰く「東人吾が輩の姓名を知らざるはなし。興衰を以て節を變ぜば、人言をいかんせん」と。實盛曰く、「吾れ徒だ以て子を試みしのみ」と。入りて宗盛に見えて曰く、「越前は臣の鄉なり。古に曰く、錦を衣て鄉に歸ると。臣、君恩を受くること久し。今老いたり。唯だ一死以て君に報ゆる有るのみ。君、盍ぞ錦の直垂を賜はらざる。臣衣て以て歸らば、死すとも餘榮有り」と。宗盛之を憫み、其の言の如くす。

通釋 四月、維盛・通盛・忠度等を追討使として、山陽・山陰・西海の諸國及び參河以東、若狹以南の國々から徵發した兵十萬餘人に將となし、北陸道に攻め入り、先づ義仲を平げて置いて、それから賴朝をも葬つて終はうとした。齋藤實盛もその派遣された人數の中に在つた。實盛は大庭景尚に向つて曰ふには「平氏が衰へて、源氏が勃興する時が來た。なぜ貴公は木曾に降參しないのか」と。景尚が曰ふのに「關東の人は大抵自分等の名前を知つてゐる。主家の盛衰で變節しては人の謗を如何しませうぞ」と。實盛が曰ふのに「實は一寸、貴公の心をひいて見ただけの話さ」と。實盛は內に入つて宗盛に會つて曰ふには「越前は、私の故鄉であります。古語に錦を衣て故鄉に歸ると申します。私は久しい間君の御恩を受けました。しかしもう悉つかり年老つて終ひました。この上は唯だ命を棄てて御恩報じをするばかりで御座います。如何で御座いませう、錦の直垂を戴かして下さいませんでせうか。私は、その錦を衣て、國に歸りますれば死んでも身の譽れになります」と。宗盛それを不憫に思つて、その言葉通りにしてやつた。

語釋 木曾（義仲。）○錦直垂（錦で作つた鎧直垂。大將の用ふるもの。）○餘榮（死に榮え。）

義仲聞我軍向越前、遣將守燧城。城據山帶谿、最爲要地。我軍阻谿水、不能近。城將有齊明者、爲書約之矢、以射我軍、曰「源氏築堤貯水。君決東山趾、立 涸矣。臣爲內應焉。」我軍從之、立 拔其城、連戰皆捷、追至三條野。敵將齋藤光平出戰。實盛曰、「與我同姓。寧死於我。」與鬪斬之。我軍長驅定越前、進入加賀。源氏兵退據安宅渡。平盛俊令子盛綱試水、還奉曰「可亂矣。」盛俊以兵五千先渡。大軍從之、遂拔林富樫二城據之。降將齊明進言曰、「義仲在越後。越後越中之界、有寒原之險。君宜急扼此。毋使敵踰焉。」乃遣盛俊赴之。至般若野、敵已踰寒原。盛俊與戰、不利退。

訓讀 義仲我が軍越前に向ふと聞き、將を遣はして燧城を守らしむ。城は、山に據り谿を帶び、最も要地たり。我が軍谿水に阻てられ、近づく能はず。城將に齊明なる者あり。書を爲り、之を矢に約し以て、我が軍に射て曰く、「源氏、堤を築き水を貯ふ。君、東山の趾を決せば、立ちどころに其の城を拔き、連戰皆捷ち、追うて三條野に至る。敵將齋藤光平出でて戰ふ。實盛曰く、「我と同姓なり。寧ろ我に死せよ」と。與に鬪ひて之を斬る。我が軍長驅して越前を定め、進んで加賀に入る。源氏の兵退いて安宅の渡に據る。平盛俊、子盛綱をして水を試みしむ。還り報じて曰く、「亂るべし」と。盛俊、兵五千を以て先づ渡る。大軍之に從ひ、遂に林、富樫の二城を拔き、之に據る。降將齊明言を進めて曰く、「義仲

越後に在り。越後、越中の界に、寒原の險有り。君宜しく急に此を扼すべし。敵をして踰えしむる毋れ」と。乃ち盛俊を遣はし、之に赴かしむ。般若野に至れば、敵已に寒原を踰ゆ。盛俊與に戰ひ、利あらずして退く。

通釋 義仲は、平氏の軍勢が越前に向つたと聞いて、大將を遣つて燧城を守らせた。この城は山に據つて居り、又谷をめぐらし、最も要害な場所であつたのである。平氏の軍は、谷川の爲めに遮ぎられ、城に近づくことが出來ない。城中に齊明といふ隊將が居つた。彼は平家に心をよせてゐたので、手紙を書いて矢に結び付け、それを射て平家の陣へ送つたが、それには「源氏は堤防を築いて、水をためてゐる。君が若し東山の麓の堤防を切り落したならば谷川の水は卽坐に乾いて終ふでせう。私は中から君の方へ裏切を致しませう」と。書いてあつた。平氏の方ではこの申出に從つて、直ぐ其の城を攻め落し、連戰連勝で、源氏の兵を追つかけて、三條野までやつて來た。敵の大將齋藤光平が出でて戰つた。齋藤實盛が曰ふには「貴殿は我と同姓である。これも何かの緣と申すもの、いつその事拙者の手に討死しろよ」と。ともに討ち合つて、これを斬つた。平氏の軍勢は長追ひをして越前を平定し、進んで加賀へ攻め入つた。源氏の兵は退却して、安宅の渡に立て籠つた。平盛俊は倅の盛綱をして、水の淺深を知る爲めに瀨ぶみをさせた。還つて報告をして曰ふに「充分渡られます」と。盛俊は兵五千人を引きつれて、眞先に渡つた。大軍が、之に從つて、皆河を渡り、とう〳〵林・富樫の二城を攻め落して、之に立て籠つた。降參した大將の齊明が意見を進めて曰ふには「義仲は、越後と越中の界に寒原といふ險しい所があります。君には急に此處をくひ止める算段をなされたが宜い。敵にここを踰えさせてはなりません」と。そこで盛俊を遣つて寒原へ行かせた。般若野に着いた頃敵は一足先に、寒原を踰えてゐた。盛俊は之と戰つたが、うまく行かないで退却した。

語釋 燧城（越前。）○齊明（越前平泉寺の長吏。）○三條野（越前。）○安宅渡（加賀。）○林、富樫（皆加賀。）○般若野（越中。）○阨（くひ止める。）

維盛乃以七萬騎軍砥並山。忠度以三萬騎軍志雄山。義仲以五萬騎至、令行家攻忠度、而自當維盛。維盛恃險不備。義仲乘夜來襲。維盛大敗走。義仲乘勝追之。參河守知度清盛、七子也。與五十餘騎、大呼冒敵陣。馬仆而徒。敵有岡田親義、奈擊知度。知度舉刀斫其冑。冑墮。因斬其首。親義、子重義踵至。我騎遮鬪。知度自屠而死。敵益進。右兵衞佐爲盛、賴盛、次子也。亦爲樋口兼光所殺。

訓義 維盛乃ち七萬騎を以て砥並山に軍す。忠度三萬騎を以て志雄山に軍す。義仲五萬騎を以て至り、行家を攻めしめ、而して自ら維盛に當る。維盛險を恃んで備へず。義仲夜に乘じ來り襲ふ。維盛大に敗れ走る。義仲勝に乘じて之を追ふ。參河守知度は、清盛の七子なり。五十餘騎と、大に呼んで敵陣を冒す。馬仆れて徒す。敵に岡田親義あり、來つて知度を擊つ。知度刀を擧げて其の冑を斫る。冑墜つ。因つて其の頭を斬る。親義の子重義踵いで至る。我が騎遮り鬪ふ。知度自ら屠つて死す。敵益進む。右兵衞佐爲盛は、賴盛の次子なり。亦樋口兼光の殺す所となる。

通釋 そこで、維盛は七萬騎を引きつれて砥並山に陣取つた。忠度は、三萬騎を引きつれて、志雄山に陣取つ

た。義仲は、五萬騎を率ゐてやつて來て、行家に忠度を攻めさせ、自身は維盛に向つてかかつた。維盛は、砥並山の險阻を恃みにして、油斷をしてゐた。義仲は夜の暗いのにつけ込んで來襲した。維盛は大に敗れて逃げた。義仲は勝つた勢に乘じて之を追つかけた。參河守知度は、清盛の第七子であつた。この人は五十餘騎と大聲に呼ばはり乍ら敵陣目蒐けて突き進んだ。馬が仆れたので徒歩になつた。敵中に岡田親義といふものがゐて、出て來て、知度を擊つた。知度は刀を振り上げて親義の冑を切つた。冑が落ちた。そこで、親義の首を討ち取つた。親義の倅重義が續いて向つて來た。平氏の騎兵が邪魔立てして鬪つた。併し知度は自分で腹を切つて死んで終つた。源氏の兵は、益進んで來た。右兵衛佐爲盛は賴盛の第二子である。これも亦樋口兼光の爲めに殺された。

語釋 砥並山（越中。）○志雄山（加賀能登の界。）

維盛退保佐良岳。當此時、忠度與盛俊擊破行家。而聞維盛敗、引兵與之合、退據安宅渡。忽有鞍馬十匹、濟水而至。畠山重能在前軍、視之曰、「敵近矣。」乃與三百騎、登篠原岳、瞰之。馳使中軍、告曰、「源氏之兵、悉濟。臣將先進。請賜後繼。」義仲召樋口兼光、指岳頂、問曰、「汝知彼一隊之將爲誰。」曰、「畠山重能也。臣數遊武藏、記其旗章矣。」義仲曰、「此可與鬪者。」遣兼光與鬪。殺傷相當。

訓讀 維盛退いて佐良岳を保つ。此の時に當り、忠度、盛俊と行家を擊破す。而して維盛の敗を聞き、兵を引いて之と合し、退いて安宅渡に據る。忽ち鞍馬十匹有り、水を濟つて至る。畠山重能、前軍に在り、之を視て曰く「敵近づけり」と。乃ち三百騎と篠原岳に登り、之を瞰る。使を中軍に馳せ、告げて曰く、「源氏の兵、悉く濟れり。臣、將に先づ進まんとす。請ふ、後繼を賜はれ」と。義仲、樋口兼光を召し、岳頂を指さし、問うて曰く、「汝、彼の一隊の將は誰なるかを知るや」と。曰く、「畠山重能なり。臣、數武藏に遊び、其の旗章を記す」と。義仲曰く、「此れ與に鬪ふ可き者」と。兼光を遣はし與に鬪はしむ。殺傷相當る。

通釋 維盛は退いて佐良岳を守つてゐた。この時、忠度の方では、盛俊と力を合はせて行家を擊ち破つた。併し維盛の敗軍を聞いて、兵を引き連れ。維盛と一緒になり、退いて、安宅の渡に立て籠つた。すると忽ち鞍を置いた馬が十匹河を渡つてやつて來た。畠山重能は、前軍にゐたが、之を見て曰ふに「敵が近づいて來たぞ」と。そこで、三百騎と一緒に篠原岳に登つて見下して見た。そこで使を本隊へ走らせていふには「源氏の兵は皆河を渡つて終ひました。私は眞つ先に進んでぶつつかりませう。後詰の兵をお願ひ致します」と。源氏方では、義仲が樋口兼光を召し寄せ、篠原岳の山頂を指して問うていふのに「其の方は、あの山の一隊の大將は誰か知つてゐるか」と。兼光が曰ふのに「あれは畠山重能で御座います。私は、度々武藏へ參りましたので、その旗記しを覺えて居ります」と。義仲は曰ふに「これなら共に鬪つても宜い男だ」と。兼光を遣つて、ともに鬪はせた。討死怪我人は互角であつた。

語釋 佐良岳（加賀。）○鞍馬十匹（義仲が水の淺深を測べた時放つた馬。）○篠原岳（加賀。）

維盛等乃進當義仲、戰且退、至成合、返擊大戰。大庭景尙自呼而鬪。義仲曰、「名士也。」

麾騎逆之。景尙斬十三騎、被創自殺。衆悉退。實盛獨留戰。敵將手塚光盛呼問其名。實盛曰、「汝斬我首、獻木曾公。公知我也」。進薄光盛。光盛從騎遮之。實盛攫騎、將殺之。光盛救之、三人相搏、墜馬。

訓讀　維盛等、乃ち進んで義仲に當り、戰ひ且つ退き、成合に至り、返り擊つて大に戰ふ。大庭景尙自ら呼んで鬪ふ。義仲曰く「名士なり」と。騎を麾いて之を逆ふ。景尙十三騎を斬り、創を被つて自殺す。衆悉く退く。實盛獨り留り戰ふ。敵將手塚光盛呼んで其の名を問ふ。實盛曰く、「汝我が首を斬り、木曾公に獻ぜよ。公は我を知れり」と。進んで光盛に薄る。光盛の從騎之を遮る。實盛、騎を攫み、將に之を殺さんとす。光盛之を救ひ、三人相搏ち、馬より墜つ。

通釋　そこで維盛等は進んで義仲にぶつつかり、戰つては退却して成合迄行つたが、そこで又引き返へして擊つてかかり、大に戰つた。平家方の大庭景尙が自ら名乘りを上げて鬪つた。義仲が曰ふのに「大庭景尙といへば名高い武士だ。ソレッ」と部下の騎を指揮して、景尙を逆へ擊たせた。景尙は大に奮鬪して、源氏の十三騎を斬り、自分も傷を負うて自殺した。かくて、平家の軍勢は皆退却したに、獨り齋藤實盛だけは、踏み止まつて戰つた。源氏方の手塚光盛といふ者が、大音聲に、實盛の名を尋ねた。實盛は曰ふのに「名前は申さぬが、貴樣はこの儂の首を斬つて、木曾公へ獻上しろ。公はよく御存知で居られるぞ。」と。さう曰つて、進んで光盛に迫つて來た。光盛のお供の騎士が、之を邪魔立てしたので、實盛が怒つて、その騎士を引つ掴んで殺さうとした。光盛は之を援けようとする、其處で三人の組打ちが始まつて、皆馬から轉がり落ちた。

語釋　渡頭（渡し場。）○成合（越前に在る。）○名士（名のある士。）

光盛遂刺實盛、獻頭於義仲、告其狀曰、「單騎衣錦。其語東音。」義仲曰、「莫乃實盛乎。」召兼光視之。兼光曰、「是也。」義仲曰、「吾知實盛年高。今其髮黑者何。」對曰、「實盛嘗與臣言於東國。曰、白頭從軍、吾將涅我髮。否則難以伍壯者矣。蓋踐其言也。」乃洗其頭。頭髮皆白。義仲泣曰、「吾幼孤。爲此老所鞠育。使其來歸、將父事之。乃重恩就死、可不謂義乎。」收尸葬之。義仲復追我軍。平盛綱、藤原景高等十餘人死之。

訓讀　光盛遂に實盛を刺し、頭を義仲に獻じ、其の狀を告げて曰く、「單騎錦を衣る。其の語は東音なり」と。義仲曰く、「乃ち實盛なる莫からんか」と。兼光を召して之を視しむ。兼光曰く、「是れなり」と。義仲曰く「吾れ實盛の年高きを知る。今其の髮黑きは何ぞや」と。對へて曰く「實盛嘗て臣と東國に言ふ。曰く、白頭にて軍に從ふには、吾れ將に我が髮を涅せんとす。否ずんば則ち以て壯者に伍し難しと。蓋し其の言を踐むなり」と。乃ち其の頭を洗ふ。頭髮皆白し。義仲泣いて曰く、「吾れ幼にして孤なり。此の老の鞠育する所と爲る。其をして來り歸せしめば、將に之に父事せんとす。乃ち恩を重んじ死に就く、義と謂はざるべけんや」と。尸を收めて之を葬る。義仲、復我が軍を追ふ。平盛綱、藤原景高等十餘人之に死せり。

通釋　とう〳〵光盛は、實盛を刺し殺し、誰れとも分らぬが、兎も角、その首を義仲に獻上して、その時の有様を逐一告げて曰ふのに「ただ一騎で、錦の直垂を著込んで居りました。その言葉は平氏に似合はず、關東訛で御座いました」と。義仲が曰ふのに「それぢやア、實盛では無いだらうか」と。兼光を呼んで、首實檢をさせた。兼光が曰ふのに「慥しかに實盛です」と。義仲は「自分は實盛は大分年を老つてゐると承知してゐた。今見受ける所、其の髪の毛の黑いのは、何うしたことだらう」と訝かつた。すると兼光が對へて曰ふのに「實盛が、以前、東國にゐた頃、私に話したことが御座います。それは、老年になつて戰場へ出る時には、自分は白髪を墨で黑く染めようと思ふ。さうでもしなければ、迚も血氣壯んな若い人々の仲間入りは出來難いと申しました。多分、其の言葉通りにしたので御座いませう」と。そこで其の頭を洗つて見ると、果してそれは白髪であつた。これを見てゐた義仲は、サメ〴〵泣いて曰ふには「自分は二歳の時に孤兒となつた。その時此の老人に養ひ育てられ、大層世話になつたのである。若しこの老人が、自分の方へ來り附いて呉れたら、自分は父として尊び事へただらうに殘念なことをした。此の老人が平家から受けた恩を重んじて、討死したのは、誠に義理堅いと謂はなければなるまい」と。實盛の尸骸を取り收めて、手厚く之を葬つてやつた。義仲は、また平家の軍を追つかけた。平盛綱藤原景高等十餘人が討死した。

語釋　年高（この時實盛七十三歳。）○鞠育（鞠は養ふこと。）○父事（父として尊び事へること。）

我諸將敗歸。法皇會議。藤原長方引漢和匈奴故事、請遣使赦諸源罪。不聽。平氏遣書山徒誘之。山徒不從。七月、平貞能既定西海、以降將菊池高直・原田種直以下兵千騎、糧十萬石、至平氏咸喜、欲用禦東北。美濃人來告曰、「義仲已至近江矣。」於是、資盛・知盛・重衡與貞能等守宇治・勢多、遣賴盛繼之。又賴盛辭不往、强遣之。已而源行綱等、四窺京師、山徒亦黨義仲。宗盛乃召還諸將、遣貞能擊行綱于攝津。知盛以五百騎次粟津、與義仲前軍戰、不利退。義仲進軍叡山。

訓讀　我が諸將敗れ歸る。法皇會議す。藤原長方、漢、匈奴に和するの故事を引き、使を遣はし諸源の罪を赦さしめんと請ふ。聽されず。平氏、書を山徒に遣り之を誘ふ。山徒從はず。七月、平貞能既に西海を定め、降將菊池高直、原田種直以下の兵千騎、糧十萬石を以て至れり。平氏咸喜び、用ひて東北を禦がんと欲す。美濃の人、來り告げて曰く、「義仲已に近江に至れり」と。是に於て、資盛、知盛、重衡は貞能等と宇治、勢多を守る。賴盛を遣はして之に繼がしむ。又賴盛辭して往かず。强ひて之を遣はす。已にして源行綱等、京師を四窺し、山徒も亦義仲に黨す。宗盛乃ち諸將を召還し、貞能を遣はし行綱を攝津に擊たしむ。知盛五百騎を以て粟津に次し、義仲の前軍と戰ひ、利あらずして退く。義仲進んで叡山に軍せり。

通釋　平家の大將共は皆負けて京都に歸つた。法皇は會議をお開きになつた。藤原長方は昔漢が匈奴と和睦した古る事を例に取つて、今の場合もそれを學んで、使を遣はし、諸〻の源氏の罪をお赦しになさるやうに願つた。

けれども、法皇はお聽き入れにならなかつた。平氏は、書面を叡山の僧徒に送つて味方に引き入れようと誘うた。けれども、山徒は從はなかつた。七月、平貞能は既に西海が平定したので、降參した大將菊池高直・原田種直以下の兵千騎糧十萬石を引き具して京都に來た。平氏の人々は皆喜んで、之を用ひて、東北方面を防がうと思つた。所が美濃の人がやつて來て、告げて曰ふには「義仲は早や近江までやつて來ました」と。そこで、資盛・知盛・重衡は、貞能等と一緒に、宇治勢多を守ることにした。又頼盛を遣はして、後續せしめた。又頼盛は辭退して、往かなかつた。しかし無理に強ひて行かせた。その内に源行綱等は、四方から京都を狙ひだすし、叡山の僧徒も亦義仲に組して終つた。そこで、宗盛は、諸將を呼び戻し、別に貞能を遣つて、行綱を攝津で擊たせた。知盛は、五百騎を率ゐて粟津に陣し、義仲の前軍と戰つたが、敗けて退却した。義仲は進んで比叡山に陣取つた。

語釋 漢和二匈奴二（漢高祖、白登にて匈奴の爲めに圍まれ、陳平の秘計にて免かれた。この時家人の子を公主と稱して單于に妻はして和睦した。）○勢多（近江。）○頼盛辭（類朝に屬く心があるから辭した。）○次（三日以上を次といふ。一宿は舍、二宿は信といふ。）○粟津（近江。）

宗盛大二召族人一、議曰「兵寡。我欲奉帝及法皇、奔西國一以圖再舉、何如。」知盛進曰「不可。我祖桓武實肇此都。後降爲武臣、於今八世、未嘗退避。寧決戰于此、刀折矢盡而後已。」教盛・經盛等皆以爲然。宗盛不聽。使人造法皇。法皇不在。宗盛大失意。乃奉帝及皇太后・皇弟惟明、收劍璽、縱火諸第、率其子右衞門督清宗・其弟中納言知盛・右中將重衡・淡路守清房・其二弟維俊・良衡・故基盛・子盛・薩摩守忠度・經盛・子皇后宮亮經正・若狹守經俊・教盛・子越前守通盛・能登守教經・從五位下業盛・知盛・子武藏守知章・經俊・從五位下業盛・知盛・子武藏守知章・經俊・弟教盛・清房・二弟維俊・良衡・故基盛・子左馬頭行盛等、及攝政藤原基通・大納言平時忠而西。

訓讀 宗盛大に族人を召し、議して曰く、「兵寡し。我れ帝及び法皇を奉じ、西國に奔り以て再擧を圖らんと欲す。何如ん」と。知盛進んで曰く、「不可なり。我が祖桓武、實に此の都を肇む。後降つて武臣と爲り、今に於て八世、未だ嘗て退避せず。寧ろ此に決戰し、刀折れ矢盡きて後已まん」と。教盛・經盛等、皆以て然りと爲す。宗盛聽かず。人をして法皇に造らしむ。法皇在らず。宗盛大に意を失ふ。乃ち帝及び皇太后、皇弟惟明を奉じ、劍璽を收め、火を諸第に縱ち、其の子右衞門督清宗、其の弟中納言知盛・右中將重衡・淡路守清房・其の義弟式部丞清定・丹波守清邦・其の叔父參議經盛・中納言教盛・薩摩守忠度・經盛の子皇后宮亮經正・若狹守經俊・教盛の子越前守通盛・能登守教經、從五位下業盛・知盛の子武藏守知章・經俊の弟教盛・清房の二弟惟俊・良衡・故の基盛の子左馬頭行盛等、及び攝政藤原基通、大納言平時忠を率ゐて西す。

通釋 宗盛は、大に一族の者を集めて相談していふには「今や我が軍には兵士が少いので如何ともし難い。自分は天皇及び法皇をお伴れ申して一旦西國へ落ち延び、そこで再度の旗揚げを圖らうと思ふが、どんなものであらう」と。知盛が曰ふのに「いけません。わが祖先の桓武天皇が、實にこの京都をはじめられたのであります。

その後子孫の者が降つて、武臣となり、今日で八代であるが、まだ一度として敵を恐がつて避けて逃げたことはありません。そんなことよりむしろここで勝負の決まる迄戰ひ、刀が折れ矢がなくなるに至つて止むばかりであります」と。敎盛、經盛等は皆それに贊成した。しかし宗盛は聽き入れなかつた。宗盛は法皇の御所へお迎へに人をやつた。併し法皇は御不在であつた。宗盛は非常に失望した。そこで宗盛は天皇及び皇太后皇弟惟明を奉じ、三種の神器を取り收め、諸々の屋敷に火をかけ、倅の右衞門督清宗、弟の中納言知盛、右中將重衡、淡路守清房、其の義弟式部丞清定、丹波守清邦、其の叔父に當る參議經盛、中納言敎盛、薩摩守忠度、その外經盛の子の皇后宮亮經正、若狹守經俊、敎盛の子越前守通盛、能登守敎經、從五位下業盛、知盛の子の武藏守知章、經俊の弟敦盛、清房の二弟維俊、良衡、故の基盛の子の左馬頭行盛等及び攝政藤原基通、大納言平時忠等を引き連れて西國へ出立した。

語釋 帝（安德天皇。）○法皇（後白河法皇。）○八世（高望—國香—貞盛—維衡—正盛—忠盛—清盛。正盛は維衡の曾孫なれば實は十世である。）○法皇不レ在（比叡山へ避けられた。）○劍璽（三種の神器を略していふ。）○右衞門督（右衞門府の長官。）○式部丞（式部少輔の次官。）○皇后亮（大夫の次官、中宮職の仕事をする。）

權大納言賴盛、從而後、比レ及ニ鳥羽一、撤ニ赤幟一、而東、倚ニ法皇一伏匿。基通亦還走。平盛嗣欲レ追レ之。宗盛曰、「舍レ之。吾無所レ用ニ此不義人一也。」因問曰、「小松中將何如。」曰、「未レ來。」宗盛曰、「亦賴盛比耶。」乃召ニ畠山重能兄弟一曰、「汝子弟在ニ武藏一。汝盍レ東。」二人對曰、「臣等蒙ニ平氏恩一、二十一年于此。見レ危而遁、不レ忍レ爲也。」宗盛曰、「父子相慕、無ニ貴賤一也。父在レ西、子在レ東、以相殘滅吾心。憫レ之。汝宜レ亟去從ニ賴朝一。」二人泣辭而東。

訓讀 權大納言賴盛、從ひて後れ、鳥羽に及ぶ比、赤幟を撤して東し、法皇に倚りて伏匿す。基通も亦還り走る。平盛嗣之を追はんと欲す。宗盛曰く、「之を舍けよ。吾れ此の不義の人を用ふる所無きなり」と。因つて問うて曰く、「小松中將は如何ん」と。曰く、「未だ來らず」と。宗盛曰く、「亦賴盛の比か」と。乃ち畠山重能兄弟を召して曰く、「汝の子弟、武藏に在り。汝盍ぞ東せざる」と。二人對へて曰く、「臣等、平氏の恩を蒙ること、此に二十年なり。危きを見て遁るるは、爲すに忍びざるなり」と。宗盛曰く、「父子相慕ふは、貴賤と無く一なり。父西に在り、子東に在り、以て相殘滅するは、吾れ心に之を憫む。汝宜しく亟に去つて賴朝に從ふべし」と。二人泣辭して東す。

通釋 權大納言賴盛も一緒に從いて行つたが、後れ鳥羽に來た頃思返して、平家の赤旗をはづして東へ還り、法皇にたよつて匿れて居た。基通も、亦逃げ還つた。平盛嗣が之を追つかけようとした。すると宗盛が曰ふのに「棄てて置け。あんな義理を知らない者には、用はない」と。そこで尋ねて曰ふには「小松中將維盛はどうしたか」と。盛嗣は答へて曰ふに「まだ參られません」と。宗盛が曰ふのに「これも賴盛と同類なのか」と。そこで畠山重能の兄弟を呼び寄せていふには「お前達の子弟は武藏に居るそうぢや。お前達は何故關東へ行かないのか」と。二人が對へて曰ふには「私共が平家の御恩を受けましたことは二十年にもなります。今御家の運命が危いのを見て、逃げ出すといふことは到底爲すに忍びません」と。宗盛は曰ふのに「親子が慕ひ合ふのは人情で、身分の高下に由らず皆同一である。しかるに親のお前達は西平家方に居つて、子は東の源氏方に居り、互に殺し合

ふといふのは、いかにも不憫である。お前達は速く此處を去つて賴朝に從つたら宜からう」と。二人は泣きながら暇乞して、東の方へ去つた。

語釋 鳥羽（山城、京都の南。）○子弟（重忠等をさす。）

宗盛等至二關戶一、顧見二數百騎一、至二則維盛也。率二其弟右中將資盛・左中將清經・左少將有盛・侍從忠房・備中守師盛一來。衆大喜。維盛曰、「吾遣二妻孥一而來。皆啼哭牽レ我。吾是以後」。宗盛曰、「衆皆挈レ家。子何獨否」。答曰、「挈レ焉而行、終可レ庇乎」。衆相顧悽然。

訓讀 宗盛等關戶に至り、顧みて數百騎の至るを見るに、則ち維盛なり。其の弟右中將資盛、左中將清經、左少將有盛、侍從忠房、備中守師盛を率ゐて來る。衆大に喜ぶ。維盛曰く、「吾れ妻孥を遣して來る。皆啼哭して我を牽く。吾れ是を以て後れたり」と。宗盛曰く、「衆皆家を挈ふ。子何ぞ獨り否らざる」と。答へて曰く「焉を挈へて行くも、終に庇ふ可けんや」と。衆相顧みて悽然たり。

通釋 宗盛等は關戶まで來たとき、ふり回ると、數百騎の兵が此方へ來るのを見たが、それは維盛であつた。その弟の右中將資盛、左中將清經、左少將有盛、侍從忠房、備中守師盛などを率ゐてやつて來た。皆非常に喜んだ。維盛が曰ふのに「私は妻子を殘し置いて來ました。皆が泣き叫んで私を牽き止めました。そこで遲れて終ひました」と。宗盛が曰ふのに「いづれも皆家族を連れて來てゐる。貴公だけは何故さうしなかつたのか」と。維盛は答へて「つれて來たところで結局庇ひきれるものでもありません」と。皆は互に顏を見合せて悲しんだ。

語釋 關戶（攝。）○悽然（愁ひ悲む貌。）

經正幼仕二仁和寺法親王一、貺二其所レ愛琵琶一。雖レ征行、未レ嘗不レ携。是日、齋返、謁レ王曰、「臣等事已至レ此、願得二一叙別一而行」。因卽席、彈二數曲一。王及左右皆垂レ涙。經正曰、「臣嘗欲守二此賜一以傳二子孫一。今行且死亡。不レ忍レ并二寶器一滅沒之」。乃奉二還琵琶一而去。

訓讀 經正、幼より仁和寺法親王に仕へ、其の愛する所の琵琶を貺はる。征行と雖も、未だ嘗て携へずんばあらず。是の日、齋し返し、王に謁して曰く、「臣等、事已に此に至る。願はくは、一たび別を敍して行くことを得ん」と。因つて席に卽き、數曲を彈ず。王及び左右皆涙を垂る。經正曰く「臣嘗に此の賜を守り、以て子孫に傳へんと欲す。今行かば且に死亡せんとす。寶器を并はせて之を滅沒するに忍びず」と。乃ち琵琶を奉還して去れり。

通釋 經正は幼い頃から、仁和寺の法親王に仕へてゐたが、親王の愛せられた琵琶を拜領した。戰爭に行く時でも、之を離したことはなかつた。都落ちの日に、これを持參してお返し申し、法親王に御目通りをして曰ふのに「私ども、萬事此くの如き有樣になつて終ひました。何卒一たび御別れを敍べて行きたいと存じます」と。そこで座について數曲を彈いた。法親王及び左右の近臣どもは皆涙を流した。經正が曰ふのに「私は、いつもこの賜物を大切に守り、子孫にまでも傳へようと思つてゐました。けれども私がこれから、出かければ、死んで終ふことでありませう。この大切な寶物をムザ〳〵一緒に亡するには忍びません」と。そこで琵琶を返上して

立ちのいた。

語釋 法親王（出家した後親王の宣下があると法親王といふ。）○數曲（輪臺、青海波、蘇合香、萬壽樂等。）

忠度亦自淀河還、詣其和歌師藤原俊成、夜叩門通刺請面謁。俊成微啓門見之。忠度曰、「自兵興、不得數於君門。今當遠別。聞、君奉勅有所撰輯。臣幸得收一章焉、死且不朽」。乃出其歌集於鎧縫。俊成泣而受之。行盛師俊成、子定家。亦遺其集留別焉。俊成定家、後竝撰集、收二人所作云。

訓讀 忠度も淀河より還り、其の和歌の師藤原俊成に詣り、夜、門を叩き刺を通じ、面謁せんと請ふ。俊成微しく門を啓いて之を見る。忠度曰く、「兵興りしより、君の門に數〻するを得ず。今當に遠別すべし。聞く。君、勅を奉じて撰輯する所ありと。臣幸に一章を收めらるるを得ば、死すとも且つ朽ちず」と。乃ち其の歌集を鎧縫より出だす。俊成泣いて之を受く。行盛は俊成の子定家を師とす。亦其の集を遺りて留別せり。俊成、定家、後並に撰集し、二人の作る所を收むといふ。

通釋 忠度も、亦淀河から一寸引き還し、和歌の師匠であつた藤原俊成の家に往き、夜、門をたたいて、名刺を差し出して面會を申込んだ。俊成は一寸門の戸を明けて對面をした。忠度が曰ふのに「戰が始まつてからは、御無沙汰となり、御宅へ度々參上することも出來ませなんだ。今度遠方へ行くことになりお別れすることになりました。承はれば、貴方は、勅を承けて歌集を撰び輯めておいでなさるさうであります。私の歌を一首でも其の中に入れて下さることが出來ますれば、私は死んでも、後世に名が殘つて朽ちないことと存じます」と。そこで、歌稿を鎧のひき合せから取り出した。俊成は、泣き乍らこれを受け取つた。行盛は俊成の子の定家を師匠としてゐた。これもその歌稿を送つて別れの印とした。俊成も定家も、後年撰集を編輯したが、その時、二人の歌を其の中へ入れたといふことである。

語釋 淀河（攝津、河内の境。）○撰輯（俊成の撰輯したのは千載集。）○定家（新勅撰和歌集を撰ぶ。）○二人所作（忠度のは讀人知らずとして、さゞ波やしがの都はあれにしを、むかしながらの山櫻かな。一首を載せた、行盛のは、流れても名だにもとまれ行く水の、あはれはかなき身は消えぬとも。）

於是、舉族奉輿而西。會平貞能自攝津還。下馬跪曰「諸公欲何之」。宗盛告故。貞能大諫其不可。不聽。貞能獨東入京師、則諸第皆燼矣。乃夜詣重盛墓、白曰「君豫知有今日爾。然願以冥護圖恢復」。旦日、發墓、收其骨而西、追至福原。

訓讀 是に於て、舉族、輿を奉じて西す。會平貞能、攝津より還る。馬より下り、跪いて曰く、「諸公何くにか之かんと欲する」と。宗盛故を告ぐ。貞能大に其の不可を諫む。聽かず。貞能獨り東して、京師に入れば、則ち諸第皆燼せり。乃ち夜重盛の墓に詣で、白して曰く、「君、豫め今日有るを知れり。然れども、願はくは冥護を以て恢復を圖れ」と。旦日、墓を發き、其の骨を收めて西し、追うて福原に至る。

通釋 かくて平家の一族は天子を奉じて西へ落ち延びた。丁度、その時平貞能が行綱を征伐して、摂津から還つて來た。貞能は馬から下り、跪いて曰ふのに「皆様は何處へ御出でなされますか」と。宗盛は、其の譯を話した。貞能は都落ちをしては可けないと大に諫めた。しかし宗盛は聽かなかつた。貞能はひとりで東して、京都に入つて見ると、平氏の屋敷は皆灰になつて終つて居た。そこで、夜、重盛の墓に參詣して、申していふには「君は、前以て今日のやうなことになるのを知つて居られました。しかし何卒亡き魂の御加護で、平家をもう一度取り回すように御圖り下さい」と。その翌日、墓を掘りかへし、重盛の骨を取つて、又西に赴き、平家の落武者を追うて福原に至つた。

語釋 冥護（幽冥の靈の加護。）

宗盛等方會將士、議曰、「我家不足惜、如帝王神器何。」皆泣而對曰、「臣等世受君恩。不以隆替易志。窮海極天、唯君所適。鳥獸且記恩。況於人乎。」宗盛喜、乃相率拜清盛墓、張樂於墓前、徹夜。天明、燒其宮殿諸第、航赴西海。法皇敕奪平族百八十餘人官爵、沒其邑、分賜之義仲等、乃立高倉帝第四子卽位。平氏聞之、悔其不取去也。

訓讀 宗盛等方に將士を會し、議して曰く、「我が家は惜むに足らざれども、帝王神器を如何にせん」と。皆泣いて對へて曰く、「臣等世〻君恩を受く。隆替を以て志を易へず。海を窮め、天を極むるも、唯だ君の適く所のままなり。鳥獸すら且つ恩を記す。況や人に於てをや」と。宗盛喜び、乃ち相率ゐて清盛の墓を拜し、樂を墓前に張り、夜を徹す。天明、其の宮殿諸第を燒き、航して西海に赴く。法皇敕して平族百八十餘人の官爵を奪ひ、其の邑を沒し、之を義仲等に分ち賜ひ、乃ち高倉帝の第四子を立てて位に卽かしむ。平氏之を聞き、其の取り去らざりしを悔ゆ。

通釋 宗盛等は、此の時、將士を集めて、相談して曰ふには「わが平家は、亡んでも、惜しくはないが、天子並びに三種の神器を如何致したものであらう」と。皆泣いて之に對へて曰ふには「私等は、代々君の御恩を受けて居ります。御家が衰へたからとて志を變へることは致しません。海のあらんかぎり、天のはてまでも、唯だ君の御出でなされる處には、どこ〳〵までもついて參ります。鳥や獸でさへも、恩を忘れません。まして、人間が恩を忘れてよいものですか」と。宗盛は喜び、そこで皆とつれ立つて清盛の墓に參詣し、墓前で音樂を奏し、夜を明かした。夜明けに、福原の御所や諸〻の邸宅を燒きすてて舟に乘つて、西海道へ落ちた。法皇は詔して、平家の一族百八十餘人の官職や位階をお取り上げになり、又その領地をも沒收せられ、之を義仲等に分ち下され、それから、高倉帝の第四の皇子を立てて天子の御位にお卽かせなされた。平氏は之を聞いて、その皇子をおつれ申さなかつたことを殘念に思つた。

語釋 隆替（盛衰。）○高倉帝第四子（諱尊成。後鳥羽天皇。）

遂奉帝、建行在所於豐後。豐後國司藤原頼輔之子頼經、與州人緒方維義、傳院宣

收西海兵、使來告曰「公等不宜止此」。時忠讓之曰「正統天子在此。若胡爲者」。維義不對、以三萬騎來攻。乃遣貞能・高直・種直等拒之。敗還。乃奔箱崎、遂徙山鹿。聞菊池・原田諸族皆叛、則又徙柳浦、祈于宇佐宮。聞維義來、終航海而遁。清經自度終不可免、夜上舵樓、看月吹笛、投海死。時長門國爲知盛所管。其目代紀通資、獻船百餘艘。以徙讃岐屋島。阿波豪傑田口成能以千騎來附、且爲徇四國、諭以順逆。多來屬者。因建屋島爲行宮、遂徇山陽道。

訓讀 遂に帝を奉じ、行在所を豐後に建つ。豐後の國司藤原頼輔の子頼經、州人緒方維義と院宣を傳へて西海の兵を收め、使をして來り告げしめて曰く、「公等宜しく此に止まるべからず」と。時忠之を讓めて曰く、「正統の天子、此に在ます。若胡爲者ぞ」と。維義對へず、三萬騎を以て來り攻む。乃ち貞能、高直、種直等を遣はして之を拒がしむ。敗れ還る。乃ち箱崎に奔り、遂に山鹿に徙る。菊池、原田の諸族、皆叛くと聞き、則ち又柳浦に徙り、宇佐の宮に祈る。維義來ると聞き、終に海に航して遁る。清經自ら終に免る可からざるを度り、夜舵樓に上り、月を看て笛を吹き、海に投じて死せり。時に長門の國は知盛の管する所たり。其の目代紀通資、船百餘艘を獻ず。以て讃岐の屋島に徙る。阿波の豪傑田口成能、千騎を以て來り附き、且つ爲めに四國を徇へ、諭すに順逆を以てす。來り屬する者多し。因つて屋島に建てて行宮と爲し、遂に山陽道を徇ふ。

通釋 とう〳〵安德天皇をおつれ申し、行在所を豐後に建てた。豐後の國司藤原頼輔の子頼經は其の國の人緒方維義と一緒に法皇の詔を諸方へ傳へて、西海道の兵士を味方に附けて置き、それから使を寄越して、曰はしめるのには「公等は、此の地に止まつてゐてはならぬ」と。平時忠は之を責めて曰ふには「筋目の正しい天子が此處に御出なされるのである。其の方は如何なる無禮者ぞ」と。維義之には返事もせず、三萬騎を率ゐて攻め來つた。そこで平家では貞能、高直、種直等を遣はして、之を拒がせた。負けて還つて來た。そこで平家の者は箱崎へ逃げて遂に山鹿に徙つた。菊池、原田等の諸豪族も皆叛いたと聞いたので、又柳浦に移り宇佐の八幡宮に、武運長久を祈つた。維義が又攻めて來ると聞いて、終に船に乘つて海へ遁れ出た。清經は、結局死を免れないと觀念し、夜、船やかたに登り、月を見ながら笛を吹き、それを名殘りに海に身を投げて死んだ。當時、長門の國は、知盛が支配してゐた。その目代の紀通資が、船百餘艘を獻じた。それで讃岐の屋島に移つた。阿波の豪傑田口成能が千騎を率ゐて味方となり、又平氏の爲めに四國を觸れ廻り、順逆の道理を說いて諭した。それが爲めに來つて平氏に屬くものが多かつた。そこで屋島に宮を建てて假りの御所となし、遂に山陽道をも平家につくよう觸れ廻つた。

語釋 正統天子（三種神器を帶ばれてゐるから。）○胡爲者（如何なる者ぞ。）○箱崎（筑前。）○山鹿（肥後。）○柳浦（豐前。）○宇佐宮（豐前、應神天皇を祀る。）○舵樓（舟のやかた。）

閏十月、源義仲遣足利義清・高梨高信・海野幸廣來犯、而身繼之。重衡・通盛・敎經、以

三百餘艘ヲ逆ヘ擊之ニ據ル水島城ニ源氏以テ千餘艘ヲ負ヒ陸ヲ。敎經出ル城東北ノ門ニ挑ム敵ヲ。敵以テ五千騎ヲ來攻ム。敎經佯ル走ル。重衡・通盛將ニ舟師ヲ、自ル島西南ノ縱ニ左右ノ翼ヲ遶ル之ヲ。敎經豫メ連ル舟布ル板ヲ、以テ便ニ進退ス、親ラ射殺ス高信ヲ。北兵不ル習ハ水戰ニ。屬日蝕晦冥ナリ。我兵乘ル之ニ。北兵遂ニ大敗走。追擊斬ル義清・幸廣ヲ。獲ル首千二百級。

訓讀 閏十月、源義仲、足利義清、高梨高信、海野幸廣を遣はして、來り犯さしめ、而して身ら之に繼ぐ。重衡、通盛、敎經、三百餘艘を以て之を逆へ擊ち、水島城に據る。源氏千餘艘を以て陸を負ふ。敎經、城の東北の門より出でて敵を挑む。敵、五千騎を以て來り攻む。敎經佯り走る。重衡、通盛、舟師を將ゐて、島の西南より左右の翼を縱ち、之を遶る。敎經、豫め舟を連ね板を布き、以て進退に便にし、親ら高信を射殺す。北兵、水戰に習はず。屬々日蝕晦冥なり。我が兵之に乘ず。北兵遂に大に敗走す。追擊して、義清、幸廣を斬る。首を獲ること千二百級。

通釋 閏十月、源義仲は、足利義清・高梨高信、海野幸廣を遣はし、來つて平氏を攻めさせ、自分もそれに繼いで進んだ。重衡、通盛、敎經は、三百餘艘を率ゐて、迎へ擊ち、水島城に立て籠つた。源氏は千餘艘で陸を背後にして備へた。敎經は城の東北の門から出て、戰を爲かけた。敵は五千騎を率ゐて攻めて來た。敎經は負けたふりをして逃げた。重衡、通盛は海軍を率ゐて、島の西南から島の翼のやうに左右に分れて敵を取り卷いた。敎盛は、前以て、舟と舟とをつなぎ合せて、其の上に板を布いて置き、戰の駈け引きに都合よくし、自ら敵將高梨高信を射殺した。北國の兵士は、水上の戰爭は慣れて居らぬ。それに丁度、日蝕で、暗くなつた。平氏の兵は之に乘じて攻め立てた。義仲の兵は、遂に大敗をして逃げた。平氏は之を追擊して、義清、幸廣を斬り殺した。平氏は敵の首を得ること千二百で、大勝を博した。

語釋 水島（備中の海中にある島。）○負ル陸（陸を背にする。）○日蝕（日月の虧ぐを蝕といふ。）

初メ篠原之戰、妹尾兼康、爲ル敵將倉光成澄ノ所ト虜ニスル。因仕ヘテ成澄ニ見ル親信ヲ。今井兼平謂ツテ義仲ニ曰ク「彼瞻視異ル常ナルニ。不ル若カ殺ス之ヲ」。義仲不ル聽カ。兼康從容トシテ說ク成澄ニ、以テ其ノ鄕妹尾地ノ肥美ノ狀ヲ。成澄乃チ請ヒ義仲ニ往キ收メ之ヲ。兼康爲リ鄕導ヲ、先ヅ往キ會シ其ノ子宗康以下千餘人ヲ、掩ヒ殺シ成澄ヲ、據ル板倉ノ寨ニ。義仲將ル赴ク備中ニ。聞キ而怒リ、令ス今井兼平來ル擊ツ兼康ヲ。兼康戰ヒ且ツ走リ、欲ル赴ク屋島ニ。宗康體肥エ不ル能ハ行ク。兼康棄ル之ヲ走リ、行里許、復ル還リ視ル之ヲ。追兵薄ル至ル。乃チ刃シテ宗康ヲ而死ス。義仲將ニ遂ニ攻メ屋島ヲ。聞キ賴朝來リ討ツ己ヲ、則チ東ニ還ル。十一月、敎盛・敎經・重衡等、與ル源ノ行家ト戰ヒ室山ニ、大ニ破ル之ヲ。山陽南海ノ十餘州、多シ來リ屬スル者。

訓讀 初め篠原の戰に妹尾兼康、敵將倉光成澄の虜にする所と爲る。因つて成澄に仕へて、親信せらる。今井兼平、義仲に謂つて曰く、「彼の瞻視常に異なる。之を殺すに若かず」と。義仲聽かず。兼康從容として成澄に

說くに、其の鄉妹尾の地の肥美の狀を以てす。成澄乃ち義仲に請ひ、往いて之を收めんとす。兼康、鄉導と爲り、先づ往き、其の子宗康以下千餘人を會し、成澄を掩殺し、板倉の寨に據る。義仲、將に備中に赴かんとす。聞いて怒り、今井兼平をして、來つて兼康を擊たしむ。兼康戰ひ且つ走り、屋島に赴かんと欲す。宗康體肥え、行くこと能はず。兼康之を棄てて走り、行くこと里許、復還つて之を視る。追兵薄り至る。乃ち宗康を刃して死せり。義仲、將に遂に屋島を攻めんとす。賴朝來り、己を討つと聞き、則ち東に還る。十一月、敎盛、敎經、重衡等、源行家と室山に戰ひ、大に之を破る。山陽、南海の十餘州、來り屬する者多し。

通釋 はじめ、篠原の戰で平家の家來妹尾兼康は、敵將倉光成澄に擒にせられた。そこで其の儘成澄に仕へて家來となり、親まれ信用せられて居た。今井兼平が義仲に向つて曰ふには「兼康の目付は並々でありませぬ。今の內に殺した方が宜いです」と。義仲は、之を聽き入れなかつた。兼康は落ち着いた態度で、成澄に向ひ、自分の鄉里の妹尾といふ土地がよく肥えてゐる有樣を說いた。そこで成澄は迂つかり慾を起し、義仲に願つて其の土地を取りに行くこととなつた。兼康は、その道案內となり、一と足先きに往つてその倅の宗康以下千餘人を集め、成澄が來るとそれを瞞し討ちに攻め殺し、板倉の寨に立て籠つた。義仲は、其の時備中へ行かうとしてゐた。之を聞いて怒り、今井兼平に命じて、兼康を擊たせた。兼康は戰つては逃げして、屋島に行かうと思つた。所が倅の宗康は身體が肥滿してゐて、ついて行くことが出來ぬ。兼康は之を打ち捨てて走つたが、一里ばかり行くと親子の情で復た樣子を見に戻つて來た。その內に、追兵が追ひ迫つて來た。そこで止むなく宗康を殺して、自分も死んだ。義仲は更に進んで屋島を攻めようとした。所が賴朝が自分を討ちに來ると聞いたので東、京都へ引き

返した。十一月、敎盛、敎經、重衡等は、源行家と室山で戰ひ、大に之を破つた。山陽道、南海道の十餘國から來て屬く者が多かつた。

語釋 瞻視（目附き。）○妹尾（備中。）○掩殺（四方から包圍して殺すこと。）○板倉寨（備中。）○室山（播磨。）

當是時、義仲縱兵暴掠京師、亦以事怨望法皇、謂將士曰「汝與其敵、凡人、寧敵王者。」遂擧兵反、焚法住寺殿、矢及乘輿。遂幽帝于閑院、法皇于五條宮。公卿皆裸跣遁。義仲乃謂將士曰「爲帝爲院、唯吾所欲。爲公爲卿、唯汝所請。」乃奪公卿以下四十九人官爵、以其妻兄藤原師家爲攝政。京師苦其暴、乃思平氏也。

訓讀 是の時に當り、義仲、兵を縱つて京師を暴掠し、亦事を以て法皇を怨望し、將士に謂つて曰く、「汝其の凡人に敵せんよりは、寧ろ王者に敵せよ」と。遂に兵を擧げて反し、法住寺殿を焚き、矢、乘輿に及ぶ。遂に帝を閑院に、法皇を五條の宮に幽す。公卿皆裸跣にて遁る。義仲乃ち將士に謂つて曰く、「帝と爲り院と爲る、唯だ吾が欲する所のまま。公と爲り卿と爲る、唯だ汝の請ふ所のまま」と。乃ち公卿以下四十九人の官爵を奪ひ、其の妻の兄藤原師家を以て攝政となす。京師其の暴に苦しみ、乃ち平氏を思ふ。

通釋 この時に當り、義仲は配下の兵を放ち遣り、京都の市中で亂暴を働かせ、掠奪を行はせ、そして自分も事を以て後白河法皇を怨んでゐて、配下の將士に向つて曰ふのに「お前等はただの普通の人間共に敵對したつて

始まらないから、それよりはいつその事に天子に敵對しろ」と。とうゝ、彼は兵を擧げて謀叛をし、法皇の御所の法住寺殿を燒き拂ひ、畏れ多い事乍ら、其の時矢が法皇の御車にまで中つた。それ計りか遂に後鳥羽天皇を閑院の宮に押し籠め奉り、法皇を五條の宮に押し籠め奉つた。お公卿衆は慌てて、裸體や跣足で遁げ出した。そこで義仲は部下の將士に向つて「斯うなつたからは、帝となるのも、院となるのも、唯だ自分の欲するがままだ。公となるのも、卿となるのも、お前等の希ふがままに許し遣はすぞ」と大それた事を言ひ放つた。そこで公卿以下四十九人の官爵を奪ひ取り、自分の妻の兄である藤原師家を攝政とした。京都の人々は彼の亂暴にはホト閉口して、却つてもとの平氏の方がよかつたと、平氏を懷かしいものに思つた。

語釋 怨望（法王が賴朝に心を向けられたのを怨んでゐたのである。）○法住寺殿（法皇の御所。）○閑院（もと藤原氏の第宅、後、高倉帝の時に皇居とされた。）

義仲既二與賴朝一有レ隙。恐二其來討一。欲レ與二平氏一爲從。貽二書屋島一。言二其意一。宗盛欲レ許レ之。知盛曰「義仲使二我至一此極一。我乃與レ之和。恐賴朝之笑レ我也。公宜答曰。天子在焉。汝免レ冑弛レ弓。自來乞降。吾則許レ之」。宗盛從レ之。

訓讀 義仲既に賴朝と隙あり。其の來り伐つを恐れ、平氏と從を爲さんと欲し、書を屋島に貽りて、其の意を言ふ。宗盛之を許さんと欲す。知盛曰く「義仲、我をして此の極に至らしむ。我乃ち之と和せば、賴朝の我を笑ふを恐るるなり。公宜しく答へて曰ふべし、天子焉に在ます。汝冑を免き弓を弛べ、自ら來りて降を乞はば、吾れ則ち之を許さん」と、宗盛之に從ふ。

通釋 義仲は、この時には最早や賴朝と仲が惡くなつてゐた。義仲は賴朝が討ちに來るのを心配して、平氏と聯合しようと思ひ、手紙を屋島にやつて、その希望を述べた。宗盛はそれを承諾しようと思つた。所が知盛は不承知で曰ふのに「義仲が我々をこんな酷い目に遇はしたのであります。それだのに之と和睦することになると、嘲かし賴朝が我をあざ笑ふことでせう。斯ういふ風に返事をしてお遣んなさい。此方には、正統の天子が御出になる。汝が冑をぬぎ、弓の弦をはづして、自身出頭して降參を願ひ出るなら、許して遣はさう」と。宗盛は知盛の言ふ通りにした。

語釋 爲レ從（從は合從、縱に聯合すること。）

明年、以二山陽既一定、奉二帝一復二福原一。因城焉。負レ山臨レ海。集二兵守一之。二月、教盛以二五百騎一屯二備中ノ下道一。會讃岐ノ廳衆二千騎、叛應二源氏一。乘レ船過二下道一。仰射二我營一。教盛怒曰、此輩嘗秣二我馬一。飲二我馬一者。今敢亡狀如レ此。飛レ舸追レ之。聽衆走二淡路一。倚二源義嗣・源義久一。教盛攻而鏖レ之。并殺二義嗣・義久一。遂攻二河野通信一。通信遁走二安藝一。與二緒方維義一合。東入二備前一。據二今木城一。教經赴攻。一晝夜拔レ之。宗盛奏レ帝。進二教盛正二位大納言一。辭不レ拜。

訓讀 明年、山陽既に定まるを以て、帝を奉じ、福原を復し、因つて城く。山を負ひ、海に臨む。兵を集めて之を守る。二月、教盛、五百騎を以て備中の下道に屯す。會讃岐の廳衆二千騎、叛いて源氏に應じ、船に乘つ

て下道を過ぎ、仰いで我が營を射る。敎盛怒つて曰く、「此の輩嘗て我が馬に秣かひ、我が馬に飲かふ者、今敢て亡狀此くの如し」と。舸を飛ばして之を追ふ。廳衆淡路に走り、源義嗣、源義久に倚る。敎盛攻めて之を鏖にし、幷はせて義嗣、義久を殺し、遂に河野通信を伊豫に攻む。通信遁れて安藝に走り、緒方維義と合し、東、備前に入り、今木城に據る。敎經赴き攻め、一晝夜にして之を拔く。宗盛、帝に奏し、敎盛を正二位大納言に進めたれども、辭して拜せず。

通釋 その翌年山陽道がすでに、平定したので、安德天皇をお伴れ申して福原へ歸り、そこで城を築いた。山を後にし、海を前にしてゐる。兵士を集めて其處を守つた。二月、敎盛は、五百騎を引きつれ備中の下道に屯した。丁度讃岐の國府の兵士二千騎が、平氏に叛いて、源氏に屬き、船に乘つて、下道を通りかかり、仰いで我が平氏の兵營を射つた。敎盛は怒つて曰ふのに「こいつ等は以前、我等の馬に秣を食はせたり、我等の馬に水を飲ませたりした手合であるのに、このやうに射つてかかるとは誠に不作法千萬な奴等だ」と。早舟を飛ばせて、之を追つかけた。すると、彼等は淡路へ逃げ込み、源義嗣、源義久に倚つた。敎盛は之を攻めて皆殺にし、義嗣、義久も一緒に殺し、更に進んで河野通信を伊豫に攻めた。通信は逃げて、安藝に走り、緒方維義と一緒になり、東の方備前に入り、今木城に立て籠つた。敎經は其の地に行つて、之を攻め、一晝夜で攻め落した。宗盛は、天皇に奏上して敎經を正二位大納言に進めたが、辭退して、拜命しなかつた。

語釋 廳衆（國府所屬の兵。）○舸（輕舟。）

是時、賴朝、二弟範賴・義經、討義仲殺之、終以院宣大舉來攻。關東ノ將士悉從之、刻期會戰。知盛・重衡拒東門、貞能等拒西門。而資盛・有盛・師盛等、以兵七千守北山。義經以萬騎夜襲之。我兵大敗走。資盛愧之、獨奔屋島。宗盛令諸將代之。皆憚往。敎經請當之、卽夜、與通盛・盛俊往守北山。範賴至東門、土肥實平等至西門。藤原景淸等力拒西門。敵不能入。重衡・知盛又擊東門、敵卻之。已而義經自間道來襲、縱火。城卒陷。

訓讀 是の時、賴朝の二弟範賴・義經、義仲を討つて之を殺し、終に院宣を以て、大擧して來り攻む。關東の將士、悉く之に從ひ、期を刻して會戰せんとす。知盛、重衡、東門を拒ぎ、貞能等、西門を拒ぐ。而して資盛、有盛、師盛等、兵七千を以て北山を守る。義經、萬騎を以て夜之を襲ふ。我が兵大に敗走す。資盛之を愧ぢ、獨り屋島に奔る。宗盛、諸將をして之に代らしむ。皆往くを憚る。敎經之に當らんと請ひ、卽夜、通盛、盛俊と往いて北山を守る。範賴、東門に至り、土肥實平等、西門に至る。藤原景淸等、力めて西門を拒ぐ。敵入る能はず。重衡、知盛、又東門の敵を擊つて、之を卻く。已にして義經、間道より來り襲ひ、火を縱つ。城卒に陷る。

通釋 この時、賴朝の二弟範賴、義經は、義仲を討つて、之を殺し、終に法皇の詔で大兵を率ゐて攻めて來た。關東の大將侍は皆之に從ひ、時を定めて戰はうとした。知盛、重衡は、東門を防ぎ貞能等は西門を防いだ。そこで、資盛、有盛、師盛等は、兵七千人を率ゐて北方の山を守つた。義經は一萬騎を率ゐて、夜、資盛等の方を襲うた。平家の兵は、大負けして逃げた。資盛は諸將をして、資盛等に代らしめた。併し皆この北の山の方に行くのを厭やがつた。敎經は、この方面に當らせて貰ひたいと顯

ひ出で、その夜、直ぐ、通盛、盛俊と一緒に往つて北の山を守つた。やがて範頼は、東門に攻めかかるし、土肥實平等は西門に攻めて來た。藤原景清等は、一生懸命に西門を拒いだ。それが爲め、敵兵は門内に入ることが出來なかつた。重衡と知盛とは、又東門の敵を擊つて之を退けた。その内に義經は裏道の鵯越から襲うて來て、火をかけた。それが爲め、城はとう〳〵陷ちた。

語釋 北山（三草山、義經は丹波の方より攻めた。）

重衡西走。東人莊家長追射其馬。馬倒。其騎騎副馬。重衡呼而取之。騎爲不聞走。重衡欲自殺。遂爲家長所獲。忠度亦爲岡部忠澄所追。忠度紿曰「吾東兵也」忠澄曰「帽而涅齒者非東兵也」忠度返鬪、搏忠澄。伏之、三刺之。不入。忠澄僕來、終爲所殺。忠澄檢其鎧得歌稿。因知其爲忠度也。經正走、過大藏谷。莊高家呼而求鬪。顧答曰「吾羞與若鬪也」高家怒逼之。經正下馬自殺。其弟經俊及通盛・業盛・師盛・清定・清房・盛俊等皆死。通盛妻聞其夫死、投海而死。教經航赴淡路。宗盛奉帝于舟。諸敗兵爭舟而溺者無數。

訓讀 重衡西走す。東人莊家長、追うて其の馬を射る。馬倒る其の騎副馬に騎る。重衡呼んで之を取らんとす。騎聞かざるまねして走る。重衡自殺せんと欲し、遂に家長の獲る所となる。忠度も亦岡部忠澄の追ふ所となる。忠度紿いて曰く、「吾は東兵なり」と。忠澄曰く、「帽して齒を涅する者は、東兵に非ざるなり」と。忠度返り鬪ひ、忠澄を搏して之を伏せ、三たび之を刺す。入らず。忠澄の僕來り、終に殺す所となる。忠澄其の鎧を檢し、歌稿を得たり。因つて其の忠度なるを知る。經正走り、大藏谷を過ぐ。莊高家呼んで鬪はんことを求む。顧みて答へて曰く、「吾れ若と鬪ふを羞づるなり」と。高家怒り、之に逼る。經正、馬より下りて自殺す。其の弟經俊及び通盛、業盛、師盛、清定、清房、盛俊等皆死す。通盛の妻、其の夫の死を聞き、海に投じて死す。教經航して淡路に赴く。宗盛、帝を舟に奉ず。諸〻の敗兵舟を爭うて溺るるもの無數なり。

通釋 重衡は、西の方へ逃げた。關東の人莊家長が、それを追つかけて、其の馬を射ち止めた。馬が倒れた。部下の騎兵が重衡の換へ馬に乘つて居た。重衡はそれを呼んで乘らうとした。その騎兵は一向聞かぬ振りをして逃げて行つた。致方なく重衡は自殺しようと思つてゐる内、とう〳〵家長に生捕りにされた。忠度も、亦岡部忠澄に追はれた。忠度は瞞して曰ふには「予は關東の兵士でないぞ」と。忠澄が曰ふのに「烏帽子を被つて齒をおはぐろで染めて居るのは、關東の兵士でない」と。忠度は引きかへして鬪ひ、忠澄を組伏せ、三度ばかりもつき刺した。しかし衝き通らない。その内に忠澄の僕がやつて來て、結局忠度は殺されて終つた。忠澄はその鎧をしらべた所、歌の草稿を見付けた。そこでこれは忠度であつたことが分かつた。經正は逃げて、大藏谷を通つた。莊高家が呼び止めて鬪はんことを求めた。經正は振り顧り答へて曰ふには「吾はお前のやうな名もない者と戰ふのを恥ぢるのぢや」と。高家は、怒つて、逼つて來た。經正は馬から下りて自殺をした。その弟の經俊及び通盛、

業盛、師盛、清定、清房、盛俊等も皆討死をした。通盛の妻は自分の夫が死んだと聞いて、海に身を投げて死んで終つた。敦經は舟に乗つて淡路へ行つた。宗盛は、天皇を舟に移し參らせた。その時、敗竄の兵卒どもが、爭つて舟に乗らうと思つて溺れて死んだものが數知れぬ程あつた。

語釋 大藏谷（播磨。）○通盛妻（小宰相局。）

知盛初爲武藏守。國人識而追之垂及。其子知章時年十七、遮鬪斬其一騎、死之。知盛得間而遁、下馬上舟。舟隘不容馬。則北馬首、鞭之。馬躍上陸。田口成能曰、「良馬也。與其獲於敵、寧射殺之。」知盛曰、「吾由此免。不忍殺之。」馬望知盛三嘶、終爲義經所獲。知盛謂宗盛曰、「子死以救父、父棄子而走。使他人如此、吾當唾其面。今吾爲之。謂之何哉。」因歔欷流涕。敦盛亦與知章同齡。望知盛舟馳之、爲熊谷直實所獲。是日、直實冐曉向西門聞城上有笛聲。及獲敦盛、見其腰挿笛。念嚮所聞者是也。乃請首於義經、幷其笛歸之。經盛。義經以諸首虜歸、獻法皇。

訓讀 知盛初め武藏守爲り。國人識て之を追ひ、及ぶに垂んとす。其の子知章、時に年十七、遮り鬪ひ、其の一騎を斬つて、之に死す。知盛、間を得て遁れ、馬より下り、舟に上る。舟隘くして馬を容れず。則ち馬首を

北にし、之を鞭うつ。馬躍つて陸に上る。田口成能曰く、良馬なり。其の敵に獲られんよりは、寧ろ之を射殺せよ」と。知盛曰く、「吾れ此に由つて免る。之を殺すに忍びず」と。馬、知盛を望み、三たび嘶き、終に義經の獲る所となる。知盛、宗盛に謂つて曰く、「子、死して以て父を救ひ、父、子を棄てて走る。他人をして此くの如くならしめば、吾れ當に其の面に唾すべし。今吾れ之を爲す。之を何とか謂はんや」と。因つて歔欷流涕す。敦盛も亦知章と齡を同じうす。知盛の舟を望み、之に馳せ、熊谷直實の獲る所と爲る。是の日、直實、曉を冐して西門に向ひ、城上に笛聲有るを聞く。敦盛を獲るに及んで、其の腰に笛を挿むを見る。念ふに嚮きに聞きし所の者は是なり」と。乃ち首を義經に請ひ、其の笛を幷はせて、之を經盛に歸れり。義經、諸の首虜を以て歸り、法皇に獻ず。

通釋 知盛は、はじめ武藏守であつた。武藏の國の者には顏馴染であつたので、知盛を知つて追つかけ、すんでのことに追ひつかうとした。知盛の倅知章はこの時年十七であつたが、それを邪魔して戰ひ、その内の一騎を斬り殺して死んだ。其の間に知盛は逃げ、馬から下りて舟に乘り移つた。その舟が狹いので馬を入れることが出來ない。そこで、馬の首を北に向けて、之を鞭で打つた。馬は驚いて、躍つて陸に上つた。田口成能が曰ふのに「善い馬ぢや。これを敵に獲られるよりは、いつそ、射ち殺せよ」と。知盛が曰ふのに「自分はこの馬のお蔭で難儀を免れたのである。之を殺すには忍びない」と。馬は知盛の方を見て、三度嘶き、いかにも別を惜しむやうであつたが、とうゝ義經に獲られて終つた。知盛は宗盛に向つて曰ふのに「倅が死んで父を救ひ、父は倅を棄てて逃げる。もし他人がそんな眞似をしようものなら、私は其の人の顏に唾をはきかけるだらう。それを今私

は自分でやつて終ひました。何と申して宜いでせうか、迚も問題にはなりません」と。そこでしやくり泣き、涙を流した。敦盛も亦知章と同年であつた。知盛の舟を望んで、馬を打ち入れ、それに驅け付かうとし、熊谷直實に討ち取られて終つた。この日、直實は、曉かけて西門を攻めてゐたが、櫓の上で笛を吹いてゐる聲を聞いた。所が敦盛を討ち取つた後に檢べて見るとその腰に笛を挿んで居た。さては今曉聞いた笛の主は、この人であつたかと思つた。そこで敦盛の首を義經に願つて貰ひ受け、その笛と一緒に之を經盛に送つてやつた。義經は討ち取つた首級や捕虜を引きつれて都に歸り法皇に獻上した。

語釋 國人（武藏國人。）

法皇使人諭重衡曰「汝貽書宗盛、使效神器、則宥汝死、放還屋島。」對曰「臣宗世建勳王家。而子孫卒爲君所棄、以至於此、命也。勝敗豈關臣一人。臣不才、至爲累囚。假令生還、將何面目見宗族哉。宗族亦必不肯以臣易神器也。雖然、臣不敢不奉敕。」乃作書、從院宣使至屋島。時子得書悲泣、欲聽之。知盛執爲不可、教宗盛作答表曰「謹領宣旨。通盛以下、既授命矣。重衡豈獨欲生哉。至若神器、不可須臾離聖體也。陛下尚思貞盛・淸盛遺勳、則辱枉龍駕、臨幸西州。臣等護以西南四道兵、以討亂賊。不者、臣等有赴三韓契丹而已。不能奉命。」平時忠捕院使、劓而遣之。

訓讀 法皇、人をして重衡を諭さしめて曰く、「汝、書を宗盛に貽り、神器を效さしめば、則ち汝の死を宥して、屋島に放還せん」と。對へて曰く、「臣の宗は、世勳を王家に建つ。而るに子孫、卒に君の棄つる所となり、以て此に至れるは命なり。勝敗豈に臣一人に關せんや。臣不才にして、累囚と爲るに至る。假令生還するも、將た何の面目あつて宗族を見んや。宗族も亦必ず肯て臣を以て神器に易へざるなり。然りと雖も、臣、敢て敕を奉ぜずんばあらず」と。乃ち書を作り、院宣使に從つて屋島に至す。時子、書を得て悲泣し、之を聽さんと欲す。知盛執つて不可と爲し、宗盛をして答表を作らしめて曰く、「謹んで宣旨を領す。通盛以下既に命を授けたり。重衡豈に獨り生を欲せんや。神器の若きに至つては。須臾も聖體を離る可からざるなり。陛下、尙ほ貞盛、淸盛の遺勳を思はば則ち辱く龍駕を枉げ、西州に臨幸せよ。臣等護るに西南四道の兵を以てして以て亂賊を討たん。不らずんば臣等三韓契丹に赴く有らんのみ。命を奉ずる能はず」と。平時忠、院使を捕へ、劓りて之を遣る。

通釋 法皇は、人をやつて、重衡を諭さしめられて申されるには「お前が書面を宗盛に送つて、三種の神器を返させるようにしたら、お前の死罪を宥して、屋島へ許し還してやらう」と。重衡お答へして曰ふには「私の一族は代々勳功を皇室に立てました。所が子孫は遂に法皇に棄てられて、斯のやうな不運となりましたが、これは全く天命で御座います。私一人が今お赦しを得て還されたからとて、勝敗に關係する譯でもありませぬ。私は愚か者で、今捕はれの身となりました。たとひ生きて還つたところで、どの面を下げて一族の者に會へましようぞ。又一族の者とても私と三種の神器とを交換するやうなことはしないに決まつてゐます。けれども、手紙

を出せよとの勅命のある以上、一應先方へ通じて見ませう」と。そこで手紙を認め、院宣使に托んで、屋島へ届けさせた。時子は、倅の手紙を受取つて、泣き悲しみ、その文意を承諾しようと思つた。知盛は、堅くいけないと言ひ張り、宗盛に返事の上書を作らせて曰ふには「謹んで、院宣の趣を承はりました。此の度びの戰ひで、通盛以下皆討死を致しました。重衡だけがひとり生き殘りたいと申す筈も御座いません。三種の神器を返せとの事で御座いまするが、これは一寸の間も、天子の御側を離してはならぬもので御座います。陛下が今も尙ほ、彼の貞盛清盛の遺勳を思召さるるならば、何卒御車を枉げられて西國へ御出で下さりませ。私共は西南の四道の兵を引きつれて陛下を護衞し亂賊の源氏を討ち平げませう。もしさうでなく、私共の申すやうになさらぬならそれまでのこと。それで日本に居ることが出來ぬなら私共は朝鮮契丹へまで行くだけの話です。御命令の一件は、折角で御座いますが從ふ譯に參りません」と。平時忠は、法皇のお使を捕へ、その鼻をそいで返した。

語釋 累囚（囚人。）○院宣使（藤原重國、御廚食次花方。）○執（自說を曲げないこと。）○授命（生命を差し出す。）○龍駕（法皇をさし）○西南四道（山陰、山陽、南海、西海。）○契丹（東胡の族、後國を遼と號した。）

法皇怒、以重衡附賴朝誅焉。賴朝檻致之鎌倉、延見、使梶原景時將命。來跪重衡傍、重衡不肯聽。遙語賴朝曰「重衡至此命也。公尙記先人之德、則請速賜之死」。賴朝乃屬之狩野宗茂具湯沐、令姬千手侍浴。因問其所欲。重衡欲削髮。賴朝不許。因餽酒、遣千手及工藤祐經佐之。祐經撾鼓、千手彈琵琶。重衡屬杯千手、朗吟曰「燭暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲」。賴朝微行、側耳戶外、聞而憐之、更遣名姬伊王與千手更直。明年六月、以南都僧侶請斬于奈良阪。二女皆削髮爲尼云。

訓讀 法皇怒り、重衡を以て賴朝に附して誅せしむ。賴朝、之を鎌倉に檻致して、延見し、梶原景時をして命を將はしむ。來つて重衡の旁に跪く。重衡肯て聽かず。遙に賴朝に語つて曰く、「重衡此に至るは命なり。公、尙ほ先人の德を記せば、則ち請ふ、速に之に死を賜へ」と。賴朝乃ち之を狩野宗茂に屬し、湯沐を具へ、姬千手を以て浴に侍らしむ。因つて其の欲する所を問ふ。重衡髮を削らんと欲す。賴朝許さず。因つて酒を餽り、千手及び工藤祐經を遣はし、之を佐けしむ。祐經、鼓を撾ち、千手、琵琶を彈す。重衡、杯を千手に屬し、朗吟して曰く、「燭は暗し數行虞氏の淚、夜は深し四面楚歌の聲。」と。賴朝微行し、耳を戶外に側だて、聞いて之を憐み、更に名姬伊王を遣はし、千手と更直せしむ。明年六月、南都の僧侶の請を以て、奈良阪に斬る。二女皆髮を削り、尼と爲るといふ。

通釋 法皇は、この書面を御覽になつて大層お怒りになり、重衡を賴朝にお渡しになつて殺させることになされた。賴朝は、重衡を檻車に入れて、鎌倉へ送らせ、引き入れて對面し、梶原景時に取り次ぎをさせた。景時は重衡の傍に行つて跪いた。重衡は景時の言葉を聞かうとはしなかつた。直接はるかに賴朝に向つて曰ふには「拙者が擒になつて、こんな憂き目に會ふのは、全く天命である。貴公がもし亡父清盛から助けられた恩を記憶して居られるならば何卒その恩返しに速く殺して貰ひたい」と。そこで、賴朝は、彼を狩野宗茂に預け、風呂を立て髮を洗はせ、白拍子の千手に入浴の世話をさせた。その際內々重衡の望を問はせた。重衡は髮を剃つて坊主になつ

りたい希望であつた。頼朝は、之を許さなかつた。そこで、酒を送つてやり、千手と工藤祐經とを遣はし、酒の相手をさせた。その時祐經は、皷を打ち、千手は琵琶を彈いた。重衡は杯を千手へさし乍ら詩の句を朗吟して曰ふに「燭は暗し數行虞氏の淚、夜は深し四面楚歌の聲」と。頼朝は、しのんで、外の處で耳を立てて之を聞いて、いかにも可哀相に思ひ、更に名高い白拍子の伊王を遣り、千手と交代で、お伽をさせた。翌年の六月、南都の僧侶の願望で重衡を奈良坂で斬殺した。千手と伊王の二姫は悲しんで皆髪を剃つて、尼となつたといふことである。

語釋 檻致（牢輿に入れて送る。板）○將（取次ぐこと。）○朗吟（聲を張り上げて歌ふ。）○燭暗數行虞氏淚（垓下で敗れ、高祖に取り圍まれた。楚の項羽、漢の高祖と戰ひ、廣相の詩句。其の時項羽は四面楚歌するのを聞いて、漢已に楚を得たるか、何ぞ楚人の多きやと曰つて驚き、遂に虞美人と最後の酒宴をなし、力拔山兮氣蓋世の悲歌を作し、最後の一戰を試みて、終に烏江亭で討死した。その項羽を重衡は自分と比べ、千手を虞氏に比べ、自分の運命を悲しむ心を寄せたのである）○南都僧侶請（づつと以前に重衡は南都の興福、東大の二寺を攻めて燒き、僧數百人を殺したことがある。その怨を報いたのである。）

初重衡之虜入京師也、維盛妻孥在京師。聞三位中將被虜、意其維盛也、使僕視之。非也。然見師盛首、則憂恐。維盛在屋島、亦憶家不措。是歲三月、間出之京師。途梗不達。於是、赴高野山。偶値其舊臣爲僧者、語之以情。曰、「先君嘗德賴朝。內府以故猜疑、比吾於賴盛。吾故遁至此。欲一詣熊野祠、赴水而死。」乃與俱詣焉、投那智海死。豫命隷人、還告資盛。曰、「唐皮甲、小烏刀、在貞能許。公宜取之。萬一事平、幸傳之我兒。」

初平氏有小烏拔圓二刀。例傳嫡長。至忠盛、傳小烏於清盛、傳拔圓於賴盛。二家自是相惡。

訓讀 初め重衡の虜にせられて京師に入るや、維盛の妻孥、京師に在り。三位中將虜にせらると聞き、其の維盛ならんと意ふや、僕をして之を視しむ。非なり。然れども、師盛の首を見て、則ち憂恐す。維盛も、屋島に在つて、亦家を憶うて措かず。是の歲三月、間に出でて京師に之かんとす。途梗りて達せず。是に於て、高野山に赴く。偶其の舊臣の僧と爲れる者に値ひ、之に語るに情を以てす。曰く、「先君嘗て賴朝に德す。內府、故を以て猜疑し、吾を賴盛に比す。吾れ故に遁れて此に至る。一たび熊野の祠に詣で、水に赴いて死せんと欲す」と。乃ち與に俱に詣で、那智の海に投じて死す。豫め隷人に命じ、還つて資盛に告げしめて曰く、「唐皮甲、小烏の刀貞能の許に在り。公宜しく之を取るべし。萬一、事平がば、幸に之を我が兒に傳へよ」と。初め平氏に小烏、拔圓の二刀有り。例として嫡長に傳ふ。忠盛に至つて、小烏を清盛に傳へ、拔圓を賴盛に傳ふ。二家是より相惡し。

通釋 はじめ、重衡が擒にせられて、京都に入つたとき、丁度維盛の妻子は、京都に居た。三位中將が捕へられたと聞いて、さては維盛が捕へられたと思つて、僕をやつて之を視させた。併しそれは違つてゐた。けれども、師盛の首が梟されてゐるのを見て、維盛もやがてあのやうになるのかと大に心を痛め、且つ恐れた。維盛も亦屋島に居て、家族のことを思うて止まない。遂にこの年三月こつそり出で、京都へ行かうとした。けれども途が塞がつてゐて行かれない。そこで、高野山へ行つた。すると偶然舊臣で坊主になつてゐるものに逢つたので、心の

内を話して曰ふには「亡父重盛は、前に頼朝を助命した恩義がある。内府宗盛は、その譯から、兎角余を邪推され、余を頼盛と比べて同じ樣に思つてゐられる。それで余は遁げてここまで來た譯だ。一度熊野の社に參詣をして、それから海に身を投げて死なうと思つてゐる」と。そこで、一緒に熊野に參詣し、那智の海に身を投げて死んだ。その前に僕に命じて置いて、屋島に還り、弟の資盛に言はせて曰ふに「唐皮の鎧と小烏の刀とは、眞能のところに在る。貴公は、わが無き後の年長であるから、之を受取られたら宜からう。萬が一驅亂が平定したなら、何卒之を余が兒に傳へて下されよ」と。もと平氏には、小烏と拔圓の二刀があつた。此は嫡長子に傳へる例であつた。所が忠盛の代になつて小烏を清盛に傳へ拔圓を頼盛に傳へたのである。これからといふものは清盛、頼盛の仲が惡くなつた。

語釋 三位中將（重衡も維盛も三位中將なり。）○高野山（紀伊。）○舊臣（齋藤時頼は前に重盛に事ふ。僧となつて粉河寺にゐた。）○先君嘗德（池尼と共に清盛に顧つて頼朝を許すようにした。）○那智海（紀伊。）

頼盛於是在京師。是歲五月、頼朝以書召之。且曰、「必携宗清。」頼盛卽東行。宗清不肯從。曰、「臣非不辨禍福。獨不愧西海諸公舊僚乎。」乃送頼盛至近江、辭而西、來至屋島。是月、眞能弟眞繼、起兵伊賀、應平氏、集二百人、襲破州守護大內惟能、遂入近江、與源秀義戰而斬之。已而爲惟能所敗、死之。世呼曰三日平氏。

訓讀 頼盛、是に於て、京師に在り。是の歲五月、頼朝、書を以て之を召す。且つ曰く、「必ず宗清を携へよ」と。頼盛卽ち東行す。宗清肯て從はずして曰く、「臣禍福を辨ぜざるに非ず。獨り西海の諸公舊僚に愧ぢざらんや」と。乃ち頼盛を送つて、近江に至り、辭して西し、來つて屋島に至る。是の月、眞能の弟眞繼、兵を伊賀に起して、平氏に應じ、二百人を集めて、州の守護大內惟能を襲ひ破り、遂に近江に入り、源秀義と戰つて、之を斬る。已にして惟能の敗る所と爲りて、之に死す。世呼んで三日平氏と曰ふ。

通釋 頼盛は、前述の如く、平氏の西奔には從はないで、京都に止まつて居た。この年の五月に、頼朝は手紙を出して呼び寄せた。そしてつけ加へて曰ふには「必ずともに宗清をつれて來るように」と。頼盛は、早速、關東に下向した。宗清は、隨いて行くことには不承知で、曰ふには「それは、行つた方が幸福である位のことは辨へないでもありません。併しそれでは、西海に居られる諸公や古い同役衆に對して愧ぢ入る次第であります」と。そこで、頼盛を見送つて、近江まで行き、其處で別れて、西へ向ひ、屋島へ赴いた。この月、眞能の弟の眞繼が、兵を伊賀に起して、平氏に味方し、二百人をかり集めて、州の守護の大內惟能を襲うて破り、更に進んで、近江に入り、源秀義と戰つて之を斬り殺した。その內に惟能に破られて討死した。世、之を呼んで三日平氏といつた。

語釋 宗清（池尼に謂ひ、頼朝を助けた者。）○三日平氏（三日は短日月といふ意で、實際に三日間といふのではない。）

平氏欲復山陽道。九月、行盛以兵二千屯兒島。範頼以十萬騎來攻。我軍敗還。宗盛

以下、日悒悒不樂。知盛曰「吾嚮欲守京師。公等不從。今終如何。」宗盛莫以應。

訓讀 平氏、山陽道を復せんと欲す。九月、行盛、兵二千を以て兒島に屯す。範頼、十萬騎を以て來り攻む。我が軍敗れ還る。宗盛以下、日に悒悒として樂しまず。知盛曰く、「吾れ嚮きに京師を守らんと欲す。公等從はず。今終に如何ん」と。宗盛以て應ふる莫し。

通釋 平氏は、山陽道を回復しようと思つた。九月には、行盛が兵二千を率ゐて、兒島に屯した。範頼は、十萬騎を率ゐて攻め來つた。平氏の軍は敗れて還つた。宗盛以下、一族の者共は心配で面白くない。知盛が曰ふのに「私は前に、京都を守らうと主張した。その時貴公等は、從はなかつた。今となつて見ると如何です」と。宗盛は返す辭もなかつた。

語釋 兒島(備前。)○悒々(樂しまざる貌。)

明年春、知盛城長門引島、扼門司關、又遣兵擊破土肥實平於備前、復兒島。又擊破河野通信、斬其族黨百六十人、效首屋島。宗盛撿之。時聞源義經自阿波來攻。而未得確報。明日、望高松里火起。田口成能曰、「敵來襲也。請急御舟、令將士拒于陸。」從之。義經果襲至。我兵能拒。義經縱火行在。我兵盡上舟。海陸交射。景清上岸挑戰。美尾屋十郎者來鬪而走。景清追攫其鏑。鏑斷。挂之薙刀、掀而呼曰「吾景清也。盍來決死」。

敵莫敢近。我兵踵上、大戰佯卻上舟、以誘致義經。幾獲而逸之。

訓讀 明年春、知盛、長門の引島に城き、門司關を扼し、又兵を遣はして、土肥實平を備前に擊破せしめ、兒島を復す。又河野通信を擊破し、其の族黨百六十人を斬り、首を屋島に效す。宗盛之を檢す。時に源義經、阿波より來り攻むと聞く。而れども未だ確報を得ず。明日、高松の里に火起るを望む。田口成能曰く、「敵來り襲ふなり。請ふ急に舟を御し、將士をして陸に拒がしめよ」と。之に從ふ。義經果して襲ひ至る。我が兵能く拒ぐ、義經、火を行在に縱つ。我が兵盡く舟に上る。海陸交〻射る。景清岸に上りて戰を挑む。美尾屋十郎なる者來り鬪つて走る。景清追うて其の鏑を攫む。鏑斷つ。之を薙刀に挂け、掀げて呼んで曰く、「吾は景清なり。盍ぞ來つて死を決せざる」と。敵敢て近づく莫し。我が兵踵いで上り、大に戰ひ、佯り卻き舟に上り、以て義經を誘致す。幾んど獲んとして之を逸す。

通釋 明年の春、知盛は、長門の引島に城を築き、門司關を喰ひ止め、一方兵を遣つて、土肥實平を備前に破らせ、兒島を回復した。又河野通信をも擊ち破つて、その一族郎黨百六十人を斬り、その首を屋島に送り届けた。宗盛は首實檢をした。その時、源義經が阿波の方から攻めて來ると聞いた。けれども、まだ確實な報知が手に入らなかつた。するとその翌日のこと、見れば高松の里に火事が起つてゐる。田口成能が曰ふのに、「これは敵が襲來したのである。どうぞ皆早く舟に御乘り込みになつて、大將侍は陸で防戰するように成されよ」と。そこでその說に從つた。すると、案の定義經が襲つて來た。平氏の兵は、よく拒いだ。義經は行在に火をかけた。平氏の兵は皆舟に乘つた。海と陸と互に矢を射ち合つた。景清は岸に上つて戰をけしかけた。源氏方の美尾屋十郎

といふ者が來て闘つたが叶はないので逃げ出した。景清は後を追つかけて、兜のしころをヒッ掴んだ。しころは切れて終つた。それを薙刀の先にかけ、高くさし上げて呼ばはつて曰ふには「吾こそは、惡七兵衛景清である。何故やつて來て死を決しないか」と。源氏の方では誰れも近づくものもなかつた。平氏の兵は、その跡から、陸に上つて、大に戰ひ、わざと負けた振りをして、舟に乗り、義經をおびき寄せた。もう少しで義經を擒にする所だつたが、惜しいことに逃がして終つた。

語釋 門司關（長門。）○高松里（讃岐。）

宗盛召教經曰「我兵數逸義經。義經兵不過數百騎耳。煩公一戰。」教經乃與盛嗣・景清等三十人、迫陸而射。教經勁弓長箭、射殺敵精騎數十人。會日暮。義經退軍高松。教經軍屋島、欲夜襲源氏。盛嗣與江見盛方爭先、徹曉不果襲。天明、義經以七千騎來攻。我三十人步行、持短兵接戰。敵騎披靡。教經因射之。戰終不利、遂上舟而退。熊野湛增・河野通信等、盡屬源氏。源氏軍日盛。平氏奉乘輿、避于志度。義經復來攻。乃退保引島。

訓讀 宗盛、教經を召して曰く、「我が兵數〻義經を逸す。義經の兵は數百騎に過ぎざるのみ。公の一戰を煩はさん」と。教經乃ち盛嗣、景清等三十人と、陸に迫つて射る。教經勁弓長箭、敵の精騎數十人を射殺す。會〻日暮る。義經、軍を高松に退く。教經屋島に軍し、夜、源氏を襲はんと欲す。盛嗣、江見盛方と先きを爭ひ、曉に徹するまで襲ふを果さず。天明、義經七千騎を以て來り攻む。我が三十人步行し、短兵を持して接戰す。敵騎披靡す。教經因つて之を射る。戰終に利あらず、遂に舟に上りて退く。熊野湛增、河野通信等、盡く源氏に屬す。源氏の軍日に盛なり。平氏乘輿を奉じ、志度に避く。義經復來り攻む。乃ち退いて引島を保つ。

通釋 宗盛は、教經を召び寄せて曰ふには「わが兵は、度々義經を取り逃がして、殘念なことをした。義經の兵は、數百騎に過ぎない。一戰やつて貰らひ度いものである」と。そこで、教經は、盛嗣、景清等三十人と陸に近づいて射つた。教經は弓の上手で、勁い弓、長い矢で源氏の選り拔きの兵數十人を射殺した。丁度、日が暮れて來た。義經は、高松まで軍を退けた。教經は、屋島に陣取り、夜、源氏を襲はうと思つた。盛嗣は、江見盛方と先登を爭ひ、愚圖々々してゐる內に夜が明けて、夜討ちをし損ねた。夜が明けると、義經は七千騎を率ゐ、攻めて來た。平氏の一隊三十人は、かち立ちで、刀劍で以て接戰した。源氏の兵は、サット開いて逃げ出した。そこで教經は逃げるのを射つた。しかし、結局、敗けて、とうく、舟に乘つて退却した。熊野湛增、河野通信等は、皆源氏に屬いて終つた。源氏の軍は、日增しに盛となつた。平氏は、天皇をお伴れ申して、志度の浦に敵を避けられた。義經はまたそこへ攻めて來た。そこで（前に知盛が城を築いて置いた）引島まで退却してそこを守つた。

語釋 短兵（短い武器、刀劍の類。）○志度（讃岐。）

已而長門・周防悉應源氏。乃赴箱崎聞範頼以大衆在豐後、則旋泊于壇ノ浦源氏軍

充塞海陸兵艦三千、四面來攻。我有五百艘。知盛立船首、謂諸將士曰、「勝敗之決、在於今日。汝輩有進死、毋退生。一心戮力、必獲義經而後已。」景清・盛嗣等、爭願決戰。田口成能潛通款於敵。知盛謂宗盛曰、「士氣奮矣。獨成能可疑。請斬以徇。」不聽。固請。宗盛乃召成能島之。成能唯唯。知盛握刀、目宗盛。宗盛終不能斷也。

訓讀 已にして長門・周防、悉く源氏に應ず。乃ち箱崎に赴く。範頼、大衆を以て豐後に在りと聞き、則ち旋つて壇浦に泊す。源氏の軍、海陸に充塞し、兵艦三千、四面より來り攻む。我に五百艘有り。知盛、船首に立ち、諸將士に謂つて曰く、「勝敗の決は、今日に在り。汝が輩進んで死する有るも、退いて生くる毋れ、心を一にし力を戮はせ、必ず義經を獲て後に已まん」と。景清・盛嗣等、爭うて決戰せんと願ふ。田口成能、潛に款を敵に通ず。知盛、宗盛に謂つて曰く、「士氣奮へり。獨り成能疑ふ可し。請ふ、斬つて以て徇へん」と。聽かず。固く請ふ。宗盛乃ち成能を召して之を島む。成能唯唯す。知盛刀を握り、宗盛に目す。宗盛終に斷ずる能はず。

通釋 その内に長門・周防の二國は皆源氏方に内應して終つた。そこで宗盛は箱崎へ行かうとした。範頼が大軍を率ゐて豐後に控へてゐると聞き、引き返して壇浦に舟を泊めてゐた。源氏の軍は海にも陸にも充ち塞がり、軍艦は三千艘からあり、四方から來り攻めた。平氏方には五百艘の舟があつた。平知盛は船のへ先きに立つて、諸〻の大將侍に向つて曰ふには、「勝ち敗けの決まるのは今日に在るのである。お前等は進んで討死するとも、退いて生くる算段をしてはならぬぞ。心を一つにし、力を戮はせて、必ず義經を生捕りにするまで、大に奮戰せねばならぬぞ」と。景清・盛嗣等は爭うて決戰したいと願つた。田口成能は、こつそり好みを敵方の源氏に通じてゐた。知盛はそれを感づいて、宗盛に謂つて曰ふには、「軍中の士氣は大に奮つて居ります。ただ成能だけは、ドウも可怪しいので御座います。何卒彼を斬つて、軍中への見せしめにしたいもので御座います」と。宗盛は聞き入れなかつた。知盛は是非にと固くお願ひした。そこで宗盛は成能を呼び寄せて、之を勸め戒めた。成能はハイハイと承知した。知盛は刀の柄を握り、宗盛に目配ばせして、決行を促した。けれども宗盛は終に決斷することは出來なかつた。

語釋 箱崎（筑前。）○壇浦（長門。）○通款（款は誠、誠意を通ずること。）○島（シツカリやれよと戒め勵ます。）○唯唯（聲に應じて、よどむ所なくハイ〳〵と答へる。）

已而大戰。我兵奮擊、東軍數卻。成能降義經、告之曰、「平氏、徙帝於兵船、徙兵於帝船、欲誘敵而夾擊之。」義經知乘輿所在、合軍疾攻。知盛乃赴帝船。諸嬪迎問狀。知盛大笑、答曰、「卿等當睹東國男兒耳。」一船皆哭。知盛手掃除船中、盡棄汙穢物。時子乃抱帝、相約以帶、挾劍璽、出立船首。帝時八歲、問時子曰、「安之也。」時子曰、「虜集矢於御船。故將他徙也。」遂與俱投海死。皇太后繼投。東兵鈎其髮獲之。行盛・有盛聞之皆力戰死。

訓讀 已にして大に戰ふ。我が兵奮擊し、東軍數卻く。成能、義經に降り、之に告げて曰く、「平氏、帝を兵

船に徙し、兵を帝船に徙し、敵を誘うて之を夾擊せんと欲す」と。義經、乘輿の在る所を知り、軍を合はせて疾く攻む。知盛乃ち帝船に赴く。諸嬪迎へて狀を問ふ。知盛大に笑ひ、答へて曰く、「卿等、當に東國男兒を睹るべきのみ」と。一船皆哭す。知盛手づから船中を掃除し、盡く汙穢の物を棄つ。時子乃ち帝を抱き、相約するに帶を以てし、劍璽を挾み、出でて船首に立つ。帝時に八歳、時子に問うて曰く、「安くに之くか」と。時子曰く、「虜、矢を御船に集む。故に將に他に徙らんとするなり」と。遂に輿に俱に海に投じて死す。皇太后繼いで投ず。東兵其の髮を鈎して之を獲。行盛・有盛之を聞き、皆力戰して死す。

遊樗 其の内に兩軍大に戰つた。平氏の軍は大に奮ひ擊つたので東軍は度々退却した。成能は案の定、義經に降參して、義經に告げて曰ふのに「平氏の方では、天子樣をば普通の兵士の船に徙し參らせ、天子樣のお船には兵士を徙し込み、天子樣の御船で源氏方をおびき寄せて、挾み擊ちにしようと思つてゐます」と。義經は成能の言葉で、天皇のお在でになる所を知つたので、軍勢を合せ固めて急に攻め寄せた。知盛はそこで天皇の御船に行つた。諸〻の宮女どもは知盛を迎へて戰爭の樣子を尋ねた。知盛は大に笑ひ、答へて曰ふのに、「あなた方は、やがて東男にお目にかかられることであらう」と。船中の者は皆聲を揚げて哭いた。知盛は手づから、船中を綺麗に掃除して、汙れ穢いものは皆海の中に棄てた。そこで、二位尼時子は、安德天皇をお抱き申上げ、帶で以てシツカリと天皇と自分とをくくりつけ、三種の神器のうち、御劍と御璽とをた挾み、舟のへ先きに出で立つた。安德天皇はその時御八歳でゐらせられた。帝は時子に問うて仰せらるるに「何處へ行くのぢや」と。時子は申上ぐるに、「はい、虜どもが矢を御船に向けて射ち集めまする。よつて、他の安全な處へ徙らうかと存じまする」と。

とう〳〵時子は安德天皇と御一緒に海に身を投じて死んで終はれた。皇太后の建禮門院も、そのあとから次いで海へ身を投ぜられた。東兵は、熊手で以て、建禮門院の御髮を引つかけ、これを生捕りにした。行盛や有盛等は、これ等の事を聞いて憤激し、皆死力を出して戰つて討死した。

教經驍名素著。敵爭欲獲之。教經殊死戰、殺敵無數。知盛呼曰「公盍早自爲計。多殺雜兵毋爲也」教經曰「中納言、欲吾與義經決死耳」乃進索義經、卒與之遇。教經免冑、撤鎧袖躍入其船。敵兵遮鬪。輒搏仆之、直逼義經。敵中有安藝家村。力兼三十人。率二力士進當教經。教經蹴仆其一人、挾二人投海死。宗盛與清宗不能自裁。從士擠之海。泅而遁。敵兵鈎獲之。藤原景經、景清從弟也。見之曰「奴輩敢辱我君」追斬一人、中箭死。知盛聞而切齒久之曰「吾可以死矣」與教盛皆自殺。平家長等八人殉之。時壽永二年、三月二十四日也。

訓讀 教經驍名素より著る。敵爭うて之を獲んと欲す。教經殊死して戰ひ、敵を殺すこと無數なり。知盛呼んで曰く、「公盍ぞ早く自ら計を爲さざる。多く雜兵を殺す、爲すこと毋れ」と。教經曰く、「中納言は、吾が義經と死を決するを欲するのみ」と。乃ち進んで義經を索め、卒に之と遇ふ。教經冑を免ぎ、鎧袖を撤し、躍つて其の船に入る。敵兵遮り鬪ふ。輒ち之を搏ち仆し、直に義經に逼る。敵中に安藝家村なるあり。力三十人を兼ぬ。二

力士を率ゐ、進んで教經に當る。教經其の一人を蹴仆し、二人を挾み海に投じて死す。宗盛、清宗と自裁すること能はず。從士之を海に擠す。泅いで遁る。敵兵鈎して之を獲たり。藤原景經は、景清の從弟なり之を見て曰く、「奴輩敢て我が君を辱しむ」と。追うて一人を斬り、箭に中つて死す。知盛聞いて切齒すること之を久しうして曰く、「吾れ以て死すべし」と。教盛と皆自殺す。平家長等八人、之に殉ず。時に壽永二年三月二十四日なり。

通釋 教經はもと〳〵其の勇名の高かつた人であつた。源氏方では皆爭うて彼を生捕りにしようと思つた。教經は死物狂ひになつて戰ひ、敵兵を殺すこと數知れぬ程であつた。知盛は呼びかけて曰ふのに「貴公は何故早く自決をしないのですか。雜兵どもを多く殺したつて無駄なことですお止しなさい」と。教經は「中納言殿が、斯樣なことを申さるるは、畢竟拙者が義經と戰つて死を決することを欲してゐるからであらう。宜し來たッ」と曰つて、そこで進んで義經を搜し索め、とう〳〵義經とブッつかつた。教經は冑を免ぎ、鎧の袷をちぎり取つて、義經の船中へ躍り込んだ。源氏の兵は義經に近つかれては一大事と、邪魔に入つて教經と鬪つた。教經は手當り次第、片端からそれ等邪魔立てする輩を搏ち仆して、いきなり義經に逼つた。敵中に安藝家村なるものがゐて、其の力は三十人力といふ剛の者。それが二人の力士を率ゐて、進んで教經に當つて來た。教經は其の內の一人を蹴仆し、他の二人を小脇に抱へ、海に飛び込んで最後を遂げた。宗盛と清宗とは自害することを得せず。愚圖愚圖してゐた。供の侍が二人を海の中へ突き落した。すると泅いで遁げようとした。源氏の兵は、熊手で引つかけて二人を生捕りにした。藤原景經は景清の從弟である。此の有樣を見て曰ふのに「下郎共が無禮千萬にも、我が主君を辱しめ居つたナ」と。進んで一人を斬り殺し、箭に中つて討死した。知盛は宗盛父子が擒になつたと聞いて、齒を食ひしばり殘念がること久しうして「私も死ぬ時が來た」と、曰つて、教盛と共に自殺して果てた。平家長等八人の者も同じ枕に殉死した。其の時は實に壽永二年三月廿四日であつた。

語釋 中納言（知盛を）さす。○中納言欲吾與義經云々 諸々の解釋本を調べて見ると、こゝの所を皆次ぎのやうに譯してゐる。「中納言殿よ拙者は義經と戰つて死を決したいと思つてゐる計りなのです」と。吾欲となつてゐれば無條件に此の解に從ふが、欲吾となつてゐるので、これは中納言が欲することにするのが文法の上から順當である。今試に源平盛衰記を調べて見ると「前中納言知盛卿是を見て、由なき事し給ふ者かな、此輩は皆歩兵にこそ侍らめ、彈に目にたて給ふべきにあらず、自害をもし給へかしと宣へば、渚は九郎冠者に組めとにこそ、そは存ずる處なり。知何はせんと伺ひ廻る處に、判官の船と能登守の船と、すり合ひて通りけり」とある。さては九郎と組めよと中納言は仰せらるゝのであらうといふ意である。又平家物語の方では、知盛が使者を立てゝ「いたく罪なつくり給ひそ、さりとてはよき敵かは」と宣へば、能登殿「さては大將に組めとざんなれ」とて、打物莖短に取り云々とあつて教經が知盛の意のある所を推して合點）○清宗（宗盛の倅。）○するところは、盛衰記と同じである。日本外史のこゝの所も、欲字の位地から考へて、今は前のやうな解釋を下して置く。

平家長等八人（有國・家長以下八人と、あり。其姓名は不明。）○壽永二年（二年は四年の誤。）

經盛・資盛皆遁、已而自殺。宗盛父子與皇弟・皇太后・平時忠以下、從義經而東。有命、徇宗盛以下于京師。宗盛自輿中四望。清宗不仰視。既罷、皆拘于義經第。宗盛不解衣、寢以袖庇清宗。守兵見而憫之。五月、送於鎌倉。賴朝延之前舍、隔庭相見。將命者至。宗盛悚然請宥死。賴朝措魚于俎、加刀焉示之。諷使自殺。宗盛不曉其意。又送還京師、至篠原。父子別拘。知將被殺也、乃請僧稱佛、曰「吾不死於壇浦、以有清宗故耳。」於是、皆被斬。宗盛有次子、曰副將。先斬于京師。

訓讀 經盛、資盛皆遁れ、已にして自殺す。宗盛父子、皇弟、皇太后、平時忠以下と、義經に從ひて東す。

命有り、宗盛以下を京師に徇へしむ。宗盛・輿中より四望す。清宗仰視せず。既にして罷め、皆義經の第に拘せらる。宗盛衣を解かず、寢ぬるに袖を以て清宗を庇ふ。守兵見て之を憫む。五月、鎌倉に送らる。賴朝之を前舍に延き、庭を隔てて相見る。命を將ふ者至る。宗盛悚然として死を宥さんことを請ふ。賴朝、魚を俎に措き、刀を加へて之に示し、諷して自殺せしめんとす。宗盛其の意を曉らず。又送られて京師に還り、篠原に至る。父子別に拘せらる。將に殺されんとするを知るや、乃ち僧に請うて佛を稱せしめて曰く、「吾れ壇浦に死せざりしは、清宗有るを以ての故のみ」と。是に於て。皆斬らる。宗盛次子有り、副將と曰ふ。先きに京師に斬らる。

通釋 經盛資盛は、皆遁れ、その中に自殺した。宗盛の父子は、皇弟惟明、皇太后建禮門院、平時忠以下の者等と義經について東に行つた。朝命あつて、宗盛以下を京都市中を引き廻した。宗盛は輿の中からあちらこちらを見廻した。清宗は顏を上げて視ることすらせず、うつむいてばかり居た。それが濟んでから皆義經の屋敷に押込められた。宗盛は夜着物も脫がず其のままで横になり、寢るときには袖で清宗を庇つてやつてゐた。さすがに番兵も之を見て、哀れに思つた。五月、鎌倉へ送られた。賴朝は、之を表の間に延き入れ、庭を間にして會つた。取り次ぎの者が來た。宗盛は、殺されるかと思つて、恐れ戰いて、命だけは助けて呉れと賴んだ。賴朝は、魚を俎の上に載せて、庖丁をその上に置いて見せ、それとなく自殺させようとした。宗盛は、一向其の意味が分らなかつた。又送還されて京都に歸り途中篠原まで來た。父子は別々に拘留せられてゐた。追つつけ殺されるといふことを知つて、宗盛は、坊主を招んで、念佛して貰ひ、曰ふには「余が壇浦で死なかつたのは、倅の清宗に惹かされたからである」と。此處で二人共、皆斬られて終つた。宗盛に次男があつた。副將といつた。これは前に京都で斬られた、

語釋 前舍（前の部屋のこと。）○悚然（恐れる貌。）

初壇浦之敗、時子謂衆曰、「宗盛非故相國之子也。吾之再姙也、相國期其生男。而女生焉。吾恐相國恨怒也、密使人易之一傘工男兒。宜矣、其不若重盛、以至於此也。」宗盛既死。時忠等皆處流。

訓讀 初め壇の浦の敗に時子、衆に謂つて曰く、「宗盛は故相國の子に非ざるなり。吾れの再姙するや、相國、其の男を生むを期す。而して女生る。吾れ相國の恨怒を恐れ、密に人をして之を一傘工の男兒と易へしむ。宜なり、其の重盛に若かずして、以て此に至るや」と。宗盛既に死す。時忠等皆流に處せらる。

通釋 はじめ壇浦で敗れたとき、二位尼時子は、多くの人々に向つて曰ふのに「宗盛は、亡くなられた太政大臣清盛公の實子でありません。妾が二度目の姙娠をしたとき清盛公は、男子を生むものとあてにして居られた。所が女子が生れました。妾は清盛公が殘念に思はれ、怒られると恐いから、内々に人をして、傘屋の職人の家の男の子と交換させたのです。宗盛が、重盛に及ばないでこんな事になつたのも道理であります」と。宗盛はすでに死んだ。時忠等は、皆流し者となつた。

語釋 傘工（清水寺の側、僧にて傘職の者。）

時義經與頼朝有隙、逃奔西海。頼朝恐其與平氏遺黨相依託作亂也、遣北條時政于京師、購索平氏胤子、伏匿所在者。幼孩生埋之、稍長者刃之。其母若保、往往隨死。啼哭四聞。維盛子曰六代、依其母匿大覺寺側。爲人所告、當斬。其乳母因僧文覺請宥。頼朝素重文覺。且思重盛德己也、特宥之、削髮爲文覺弟子。及文覺圖不軌、六代坐死。

訓讀 時に義經、頼朝と隙有り、逃れて西海に奔る。頼朝、其の平氏の遺黨と相依託し亂を作さんことを恐れ、北條時政を京師に遣はして、平氏の胤子、所在に伏匿する者を購索せしむ。幼孩は之を生埋し、稍長ぜる者は之を刃す。其の母若しくは保は、往々隨ひ死す。啼哭四もに聞ゆ。維盛の子を六代と曰ひ、其の母に依りて大覺寺の側に匿る。人の告ぐる所と爲り、斬に當る。其の乳母、僧文覺に因つて宥を請ふ。頼朝素より文覺を重んず。且つ重盛の己に德するを思ひ、特に之を宥し、髮を削りて文覺の弟子と爲らしむ。文覺不軌を圖るに及んで六代坐死す。

通釋 當時の義經は、頼朝と仲違ひをして、逃げて西海の方へ行つてゐた。頼朝は義經が平家の殘黨と組んで亂をしはせぬかと恐れたので、北條時政を京都へ遣はして平氏の血統の者であちこちに匿れて居るものを懸賞で探がさせた。極く幼い子は地の中へ生き埋めにし、やや大きくなつてゐるものは、斬り殺した。その母だの、乳母だのは、往々一緒に死んだ。啼き悲しむ聲が諸方に聞えた。維盛の子に六代といふのがあつて、母親にたよつて大覺寺の側に匿れて居た。人に告發されて斬られるところであつた。その乳母が文覺といふ坊さんに頼んで赦免を請うた。頼朝は元々文覺上人を尊敬して居つた。それに重盛は嘗て自分を助命して呉れた(六代は重盛の孫)ことを思うて、特に之を赦し、髮を剃つて文覺の弟子とした。後文覺が謀叛を謀つたとき、六代は卷ぞへをくつて殺された。

語釋 依托(互に頼み合ふこと。) ○保(乳母。) ○大覺寺(京都の西。) ○文覺(遠藤盛遠、初め北面の武士であつた。源渡の妻袈裟を奪はんとして渡を殺さんとす。袈裟夫に代つて死す。盛遠大に感激し僧となり。高雄寺に住す。) ○不軌(反逆。)

初維盛弟忠房、遁壇浦紀伊。知盛次子知忠、當族人西奔時、甫三歲。乳母子紀友方、携匿備後。後徙伊賀。平氏舊臣藤原忠清、先宗盛一年、見捕斬。平貞能削髮奉重盛骨、隱於常陸。忠清二子忠光・景清、與平盛嗣等、潛匿各處。後八年、鎌倉有士木事。頼朝臨焉。忠光雜役徒、欲刺頼朝、嵌魚鱗于眼、以爲眇、荷畚出入。頼朝見而恠、執之、懷利刃。曰、平氏臣忠光、欲爲故主復仇。究問其黨。曰、獨有盛嗣。聞前在丹波。不知今何之。不復言、絶食飲、月餘死。頼朝大索天下無所獲。

訓讀 初め維盛の弟忠房、壇浦を遁れて、紀伊に匿る。知盛の次子知忠、族人西奔の時に當つて、甫めて三

歳なり。乳母の子紀友方、携へて備後に匿れ後、伊賀に徙る。平氏の舊臣藤原忠清、宗盛に先きだつこと一年、捕斬せらる。平貞能髪を削り、重盛の骨を奉じて、常陸に隱る。忠清の二子忠光、景清、平盛嗣等と各處に潛匿す。後八年、鎌倉に土木の事有り。頼朝臨む。忠光、役徒に雜り、頼朝を刺さんと欲し、魚鱗を眼に嵌して以て眇と爲り、畚を荷うて出入す。頼朝見て惟しみ、之を執ふ。利刃を懷にす。曰く、「平氏の臣忠光なり。故主の爲めに仇を復せんと欲す」と。其の黨を究問す。曰く、「獨り盛嗣有るのみ。前に丹波に在りと聞く。今何くに之くかを知らず」と。復言はず、食飲を絶つこと月餘にして死す。頼朝、大に天下に索むれども、獲る所無し。

通釋 はじめ、維盛の弟の忠房は、壇浦から逃げて、紀伊に匿れてゐた。知盛の次男の知忠は、平家が西海へ都落の時にはやつと三歳であつた。乳母の子の紀友方がつれて備後に匿れ、その後、伊賀に移つた。平氏の舊臣藤原忠清は、宗盛より一年前に捕らへられて斬られた。平貞能は髪を剃つて坊主となり、重盛の遺骨を持つて常陸に隱れた。忠清の二人の子、忠光、景清は、平盛嗣等と銘々に匿れてゐた。壇浦の戰爭後八年、鎌倉で土木工事があつた。頼朝は、其の場へ出張つてゐた。その時、忠光は人夫の中にまじつて、頼朝を刺し殺さうと思ひ、魚の鱗を目の中にはめ込み、目つかちとなり、もつこをかついで出たり入つたりしてゐた。頼朝は、それを見て不審に思ひ、之を捕へた。よく切れる刀を懷ろに匿してゐた。曰ふには「余は平氏の舊臣藤原忠光である。亡くなつた主人の爲めに仇を報いようと思つてゐるのだ」と。そこで「その徒黨の者について責め訊ねた。彼は「殘つてゐるのはただ盛嗣だけである。先頃丹波に居つたといふことである。今何處へ往つたか分らない」といつた。それ以外何事も言はないで、食べ物や飲み物を一個月ばかり絶つて、死んで終つた。そこで、頼朝は大に天下中をさがさせたが何等獲る所はなかつた。

語釋 隱於常陸（常陸の那珂郡小松寺はその遺跡といふことである。）○畚（土を運ぶ器。）○究問（詰しく吟味すること。）

後五年、知忠自伊賀還、入京師、匿于法性寺側。盛嗣・景清聞之、皆至。諸舊臣稍稍來屬、謀襲頼朝、妹婿藤原能保。能保覺之、令兵圍攻。我兵二十餘人、亂射殺敵而死。知忠與友方俱自殺。盛嗣・景清遁走。聞忠房在紀伊、往歸之、擧兵據湯淺城、爲熊野別當所攻破。忠房被捕殺。盛嗣・景清又遁。會頼朝慶東大寺。景清雜衆中、欲刺之。事覺被捕。屬之和田義盛。義盛苦其不遜也、辭之。乃屬於八田知家。景清終不食而死。

訓讀 後五年、知忠、伊賀より還り京師に入り、法性寺の側に匿る。盛嗣、景清、之を聞き皆至る。諸の舊臣稍稍來り屬し、頼朝の妹婿藤原能保を襲はんと謀る。能保之を覺り、兵をして圍み攻めしむ。我が兵二十餘人、亂射し、敵を殺して死す。知忠、友方と俱に自殺す。盛嗣、景清遁れ走る。忠房紀伊に在りと聞き、往いて之に歸し、兵を擧げて湯淺城に據り、熊野の別當の攻め破る所と爲る。忠房も捕へ殺さる。盛嗣、景清又遁る。會頼朝東大寺を慶す。景清衆中に雜り、之を刺さんと欲す。事覺はれて捕へらる。之を和田義盛に屬す。義盛其の不遜に苦しみ、之を辭す。乃ち八田知家に屬す。景清終に食はずして死す。

通釋 その後、五年して、知忠は伊賀から還つて、京都に入り、法性寺の側に匿れてゐた。盛嗣と景清がそ

れを聞き知つて、皆京都へやつて來た。多くの舊臣どもが段々やつて來て屬いたので、賴朝の妹婿藤原能保を襲はうと計畫した。能保は之を感付いて兵士をして彼等を圍み攻めさせた。平氏の兵二十餘人は滅多矢鱈に射つて敵を殺して討死した。知忠は、友方と一緒に自殺した。盛嗣と景清とは遁れ走つた。忠房が紀伊に居ると聞いたので往つて、之に屬き、兵を擧げて湯淺城に立て籠つたが、熊野別當に攻め破られた。忠房も捕へられて殺された。盛嗣と景清とは、又其處もうまく遁げた。丁度賴朝は奈良の東大寺を豐請して、その落成式を行つた。その時景清は多くの見物人の中に雜り込み賴朝を刺し殺さうとした。露顯に及んで捕へられた。之を和田義盛に引き渡した。義盛は景清が無禮我儘であるのに閉口して之を斷つた。そこで、八田知家に引き渡した。景清はとう食はずして死んで終つた。

語釋 法性寺(京都の東方。)○湯淺城(紀伊。)

盛嗣變姓名、仕但馬人氣比道廣、爲其廐卒、因通其女。每浴馬、爲馳射狀。道廣知其盛嗣而不問。既而隨道廣如京師、遊故妾家。妾家告之源氏。乃令道廣捕之。道廣遣力士數人、候其浴圍之。盛嗣罵曰「奴輩、吾欲遁卽遁。而不欲累主人。」出而就縛。賴朝面讓之曰「盍死於壇浦。」對曰「欲擁一平氏胤、以復舊業耳。」又問曰「聞汝依義經、有諸。」盛嗣曰「否也。嚮在京圖判官而不遂。爾來頗儲利刃銳鏃、欲一試之於將軍之身。」

遂被斬。

訓讀 盛嗣、姓名を變じ、但馬の人氣比道廣に仕へ、其の廐卒と爲り、因つて其の女と通ず。馬を浴する毎に、馳射の狀を爲す。道廣其の盛嗣なることを知れども問はず。既にして道廣に隨ひ京師に如き、故の妾の家に遊ぶ。妾の家之を源氏に告ぐ。乃ち道廣をして之を捕へしむ。道廣、力士數人を遣はし、其の浴するを候ひて之を圍ましむ。盛嗣罵つて曰く「奴輩、吾れ遁れんと欲せば、卽ち遁れん。而れども主人を累はすを欲せず」と。出でて縛に就く。賴朝、面のあたり之を讓めて曰く、「盍ぞ壇の浦に死せざる」と。對へて曰く、「一平氏の胤を擁し以て舊業を復せんと欲せしのみ」と。又問うて曰く、「聞く、汝義經に依ると、諸有りや」と。盛嗣曰く、「否らざるなり。嚮きに京に在り、判官を圖つて遂げず。爾來頗る利刃銳鏃を儲へ、一たび之を將軍の身に試みんと欲す」と。遂に斬らる。

通釋 盛嗣は、姓名を變へて、但馬の人氣比道廣に仕へて、その廐係りの兵卒となつてゐたが、その緣で、道廣の娘と密通した。彼は馬を行水させる度びに、その馬に乘つて馳せたり、弓を射る形ちをして居た。道廣は、此の男が盛嗣であることを知つたが不問に附して置いた。さう斯うする內、盛嗣は、道廣にお供して、京都へ往つたので、むかし妾であつた者の家に遊びに行つた。その妾の家で、之を源氏に密告した。そこで道廣をして之を取り押へさせた。道廣は、力士數人を遣つて盛嗣が湯に入つて居るのを窺つて取り圍ませた。盛嗣は罵つて曰ふのに「下郎共、逃げようと思へば、すぐにも逃げられるんだ。併し主人(道廣)に迷惑をかけたくないので捕まつてやるのだ」と。湯から出て縛つて貰つた。賴朝は、面前で、これを責めて曰ふのに「何故、壇浦で討死をし

なかつたか」と。對へて曰ふに「平家の一人の子孫でももり立てて再興を圖らうと思つたまでである」と。賴朝又問うて曰ふに「汝は義經の世話になつたといふことを聞いたが、眞んとうか」と。盛嗣對へて曰ふに「違ふ。以前、京都で義經を殺さうと思つたが不成功に終つた。その後、よく切れる刄や鋭い矢尻を可成り蓄へて、是非一度あなたの軀に試して見ようと思つてゐた」と。遂に斬られて終つた。

語釋 判官（義經。）

叙說 此一篇の大意は、平氏には將門のやうな、清盛のやうな、不臣の者が出たが、併し同門の貞盛によつて將門は誅せられたからこれは相殺出來るし、清盛の不臣だとて藤原氏に比べれば十分の一にも足りない位で、そんなに酷く罪するのは可哀想である。清盛があんなになつたのは王室と相家とが原因をなしてゐるのだから、結局總勘定して見た所では平氏の功罪は相償ふに足るといつて宜からうといふのである。

外史氏曰、自我先王之開國也、非無僭亂之臣也。而未有謀危社稷者。獨有一將門焉。而出於平氏。豈非其宗之大恥哉。然能討滅之者、亦出於平氏焉。則足以相償矣。且自將門一伏誅、而後世無復覬覦神器者。可謂彼以其身標天下大戒也。

訓讀 外史氏曰く、我が先王の國を開きしより、僭亂の臣無きに非ざるなり。而れども未だ社稷を危うせんと謀る者あらず。獨り一の將門有るのみ。而して平氏より出づ。豈に其の宗の大恥に非ずや。然れども能く之を討滅せる者も、亦平氏より出づ。則ち相償ふに足る。且つ將門一たび誅に伏してよりのち、世復神器を覬覦する者無し。彼れ其の身を以て天下の大戒を標すと謂ふ可きなり。

通釋 外史氏が曰ふのに、むかし、わが神武天皇が、日本の國をお開きなされてより以來、非分な望みを抱き亂を企てた臣下が無いでもなかつた。しかし天位を攘み、國家を危くしようと企くらんだものはなかつた。所がただ一人の平將門だけがそれをやらうとした。而かも、その將門は平氏から出たのである。考へて見ればこれは實に平氏一門の大恥辱ではあるまいか。しかし能く其の惡黨を討ち滅ぼしたものも、亦平氏から出たのであつた。差引勘定すれば結局恥辱を取消したとも言へる。それに將門が一たび誅せられてから後は、世の中に二度と三種の神器を狙ふ不埒者が出なくなつた。（ものは解釋のしようであつて）、つまり彼れ將門は、一天萬乘の御位は犯すべからざるもの、犯すときは自分のやうになるぞと、大きな警戒を、自身標本となつて後世に示したものといつても宜いのである。

語釋 先王（先皇の意、神武天皇をさす。）○僭亂（道義の如き。）○社稷（土地の神と穀物の神、國家の意に轉じて用ふ。）○討滅者（貞盛。）○標（標。）

餘論 以上第一段、平氏は初めから功罪相償つてゐることをのべたのである。

抑使將門得一撿非違使、則未必甘爲反賊。故天慶之亂、皆相門驕傲、壅塞上下之所致也。當其無事也、寵朝廷名爵於私門、而不恤人之失職。及其急也、乃遽揭朱紫、呼號天下、使天下英雄有以窺朝廷。後世源平爭起、以功邀其上者、焉知其不基於

此ニ也。

訓讀 抑將門をして一の撿非違使を得しめば、則ち未だ必ずしも甘んじて反賊と爲らず。故に天慶の亂は、皆相門驕傲にして、上下を壅塞するの致す所なり。其の無事なるに當つては、朝廷の名爵を私門に籠めて、人の職を失ふを恤へず。其の急なるに及んでは、乃ち遽に朱紫を揭げて、天下に呼號し、天下の英雄をして、以て朝廷を窺ふこと有らしむ。後世、源平爭ひ起り、功を以て其の上に邀むる者、焉んぞ其の此に基づかざるを知らんや。

通釋 一體將門に一撿非違使の職を得させてやれば何も好んで謀叛人抔にはなら無かつたに違ひない。して見れば、天慶の亂は攝關の家、藤原氏が驕り高ぶつて、我がもの顏に、天子と下々との間を塞いだことから誘致したのである。藤原氏は、天下泰平の時には、朝廷の立派な位や爵祿を自分の一門に取り込み、他人が官職を失つて苦しんで居ることなどは心にもかけない。それが一旦事件が起つて急となるとその時、初めて慌てて立派な高位官爵を高く振りまはして、早くこの亂を平げたものには褒美として、この官位をやるぞ抔と天下に宣傳し、結局天下の英雄に、何んだ朝廷はそんなに無力なのかと、朝廷の内情を見すかせるやうにし、野心を起させるやうにしたのである。後世源平二氏が爭ひ起つて功を立て、其の代償としてお上に勝手な要求をするやうになつたのはなんぞ知らん、これ等のことが本になつてゐたのである。

語釋 天慶之亂（將門の亂。）○朱紫（赤色紫色の官服、卽ち官爵祿位をいふ。）○焉知其不（焉知は不知と置き換へて見る。不知其不……。打消が重なつてゐるから相殺すると知其……となる。）

世稱清盛功不償其罪。舉不臣者、輒以爲稱首。而不知相家不臣已什倍清盛。清盛蓋視而學之。否則何遽至此。詩云「唯其有之。是以似之」。自相門之專權也、后皆其女、天子皆其女所生、而卿相皆其子弟親屬。苟非其族類、鋤而去之。雖皇族不能免焉。甚則易置其主、視猶奕棋。清盛所爲、無一不似彼己氏者。而加以鷙悍其意曰、「以無功之人、猶擅權寵如此。吾之有大造於王室、何爲而不可」。世以其拔與之無漸、羣起咎之、而不言有爲之師者焉。

訓讀 世に稱す、清盛の功其の罪を償はずと。不臣の者を擧ぐれば、輒ち稱首と爲す。而して相家の不臣已に清盛に什倍するを知らず。清盛は蓋し視て之を學ぶのみ。否らざれば、則ち何遽ぞ此に至らん。詩に云く、「唯だ其れ之有り。是を以て之を似ぐ」と。相門の權を專にせしより、后は皆其の女、天子は皆其の女の生む所、而して卿相は皆其の子弟親屬なり。苟も其の族類に非ざれば、鋤して之を去る。皇族と雖も免るる能はず。甚だしきは則ち其の主を易置し、視ること猶ほ奕棋のごとし、清盛の爲す所、一として彼己氏を似かざる者無し。而して加ふるに鷙悍を以てす。其の意に曰へらく、「無功の人を以て、猶ほ權寵を擅にすること此くの如し。吾れの王室に大造有る、何を爲してか不可ならん」と。世、其の拔與の漸無きを以て、羣起して之を咎め、而して之が師たる者有るを言はず。

通釋 世の人はいふに、清盛の立てた手柄は犯かした罪を償ふに足らないと。臣道を知らぬ者を擧げる場合に

はいつも彼を眞先きに擧げる。所が藤原氏の不臣なることが、清盛の十倍にもなつてゐることに氣が付かないのである。思ふに清盛は、ただ藤原氏の不臣なる遣り方を視て、之に倣つたまでのことである。若し然うでないとすれば、如何に不都合な男だからとて、斯うも不臣な振舞をやり出す筈はないのである。唯だ其れ此のやうな例があるのだ。だからそれを眞似たまでだ」と詩の文句にあるが其の通りである。藤原氏が權を專にしてからは皇后は皆その娘であるし、天子は皆その娘の生んだ人であるし、而して大臣宰相の貴い位は、皆その一門緣者の者が得るといふ有樣である。苟も、その一族同類でなければ根こそぎ除き去つて終ふ。よしそれは皇族であつても、免れることは出來なかつた位である。ひどい事になると、天子を置きかへるのを、まるで碁石でも置きかへるやうに心得てゐた。清盛がやつたことは一つとして例の家の人がやつたことを眞似ないものとてはなかつた。それに例の家の人々と違つて、清盛には、たけたけしい氣象があつたのであるからやり切れたものでない。清盛は心の内で考へた「例の家の人々のやうに、格別これといふ功もない者であつても、猶ほあのやうに、權力や、寵愛を得てゐる。自分程皇室に大功を立てた者なら、何をやつたつて惡いことは無い筈だ」と。世間の者は、清盛があまり順序を飛び越えて急に出世したので、寄つて集かつて之を咎め立てるばかりで、清盛がそんなことをしたのにはお師匠さんのあつたことに就いては一言も曰はないのである。(これは實に奇怪な話である。)

語釋 清盛功(保元平治の功。) ○其罪(法皇を幽閉したりしたこと。) ○稱首(第一番に言ひ出すこと。) ○詩云(詩云詩經か雅頌々者華の句。) ○似(つぐ。) ○雖二皇族一不レ免(師高が高明王を除き、兼道が中書王を忌むの類。) ○彼已氏(左傳に見ゆる字面。某甲といふが如く、其の名をさすことを欲しないでかくいふ。) ○大造(大功。) ○拔與(他から見ると飛び拔けた出世。)

論 以上第二段、清盛の專横は藤原氏を倣つたに過ぎないことを叙べたのである。

且清盛所以至此、由後白河帝養成其勢爾。夫名爵公器、不可私用。人臣而私名爵、是負其君也。人君而私名爵、是負其先王也。帝濫授先王名爵於清盛、藉以濟其私焉。而長其負功邀上之心、至於不可制。將誰咎哉。

訓讀 且つ清盛の此に至りし所以は、後白河帝、其の勢を養成するに由るのみ。夫れ名爵は公器、私用す可からず。人臣にして名爵を私せば、是れ其の君に負くなり。人君にして名爵を私せば、是れ其の先王に負くなり。帝、先王の名爵を清盛に濫授し、藉つて其の私を濟す。而して其の功を負み上に邀むるの心を長じ、制す可からざるに至らしむ。將た誰をか咎めんや。

語釋 それに清盛があんなに酷く成つた譯は、後白河天皇が其の勢を養成なされたからである。一體名號爵位は天下公けの器であつて、自分勝手に用ふべきものではないのである。臣下のもので、之を我が物に振舞ふと、畢竟それは君に貪いたものとなる。人君でそれを私すれば、それは御先祖に負いたこととなるのである。所が後白河天皇は、御先祖以來お定めなされた名號爵位を清盛に矢鱈にお與へになり、清盛によつて、御自分の私を成し遂げられたのである。そして、清盛は功を恃んで、お上へ色々のことを厚顏しく要求する心を增長させ、遂に之を抑へることの出來ぬやうにしてお終ひになつたのである。だから誰を咎めることもない全く後白河天皇御自身の御過ちであつたのである。

語釋 濟二其私一(位を讓つた後に政治をなされたが如き、又高倉天皇を立てられたが如き類。)

雖然、成平氏之勢者、不獨始於帝也。初忠盛受寵於白河・鳥羽、連進官爵。人以爲不次。蓋朝廷倚其力、以抑源氏。抑源氏所以殺相家之權也。源氏自滿仲・賴光、每爲相門之爪牙。攝政兼家之騙花山也、源賴信實捍衞道途。降至文治之際、朝廷疑關白兼實之助源賴朝、亦非以其世相黨援哉。由是觀之、延平宗以抗相門、院政廟論、所相傳承、其猶寛平之擢任菅氏耶。文武雖異、其意一也。

訓讀 然りと雖せ、平氏の勢を成す者は、獨り帝に始まるのみならざるなり。初め忠盛、寵を白河、鳥羽に受け、連りに官爵を進めらる。人以て不次と爲す。蓋し朝廷其の力に倚つて以て源氏を抑ふ。源氏を抑ふるは、相家の權を殺ぐ所以なり。源氏は滿仲、賴光より、毎に相門の爪牙となる。攝政兼家の花山を騙するや、源賴信、實に道途を捍衞す。降つて文治の際に至り、朝廷、關白兼實の源賴朝を助くるを疑ふも、亦其の世相黨援するを以てに非ずや。是に由つて之を觀れば、平宗を延いて以て相門に抗するは、院政廟論、相傳承する所、其れ猶ほ寛平の菅氏を擢任するが如きか。文武異なりと雖も、其の意は一なり。

通釋 けれども、平氏の勢力をあれ迄にしたのは、ひとり、後白河天皇のみに始まつた譯でもない。はじめ、忠盛は、白河、鳥羽の二法皇に寵せられて、盛に官爵を進められた。當時の人はそれを不次の拔擢だと思つてゐた。思ふに、それは朝廷が平氏の力にたよつて源氏を抑へようとする爲めであつたのである。この源氏を抑へるといふことは、つまり、藤原氏の權力を削ぐといふ譯なのである。今事實を述べて之を證明すると、源氏は、滿仲・賴光の時から、いつでも、藤原氏の爪牙となつてゐた。あの攝政兼家が、花山天皇を騙まして御所からつれ出し出家をおさせ申した時、途中で邪魔が入つてはならぬと、源賴信が天皇のお通り道を防ぎ守つたことがある。その後後鳥羽天皇の文治年間に、朝廷で關白兼實が源賴朝を助けてゐるのではないかといふ疑をもたれたのも畢竟藤原氏と源氏とが代々相組んで助け合つて居たからではあるまいか。これ等から考へると、平氏を引きよせて、藤原氏に對抗したのは昔から、代々承け繼がれた所の政略であつて、院中の御政治でも、朝廷の評論でも、常もその御考へでなされたので、丁度それは寛平時代、宇多天皇が菅原道眞を拔擢なされて重職に任ぜられた樣なものであらうか。一方は文一方は武で違つてゐるがその考へは同一であつたのである。

語釋 不次（順序をふまぬこと。）○爪牙（身を護る道具の意。鳥獸は爪牙で身を護る。）○騙花山（兼家が一條天皇を立てんと欲し、其の倅道兼に命じて、花山天皇を欺きすかして位を遜つて落飾して花山寺に入らしめるようにしたことをいふ。）○捍衞（ふせぎまもること。途中、兼家の計畫を邪魔する者が出ては困るから、その用心をしたのである。）○疑關白兼實（義經行家が賴朝を討つ宣旨を請うた時、兼實が反對したのは、賴朝と私ありと見られて疑はれた。）○院政（法皇院中の政治。）○擢任菅氏（道實を右大臣に拔擢して、藤原政治の權を殺がんとされた。）

以菅公之賢、猶不能無戀權之意。平氏除重盛之外、皆不學無術、其矜功擅寵、進不知止、曷足尤焉。假設重盛後父而死、盡反其所爲、戒飭子弟、輔翼王室、則雖接踵比隆於藤原氏可也。而源氏何資以起哉。源氏名爲治暴亂、而其實攘竊王權。源平之罪、未易輕重也。且夫源氏猜忍、骨肉相食。孰與平氏闔門至死不失懿親邪。

訓讀 菅公の賢を以てしてすら、猶ほ權を戀ふるの意無き能はず。平氏は重盛を除くの外、皆不學無術、其の功に矜り、寵を擅にし、進んで止まるを知らざる、曷ぞ尤むるに足らん。假設重盛父に後れて死し、盡く其の爲す所に反し、子弟を戒飭し、王室を輔翼せば、則ち藤原氏に接踵比隆すと雖も、可なり。而して源氏何に資つて起らんや。源氏、名は暴亂を治むと爲して、其の實は王權を攘竊す。源平の罪、未だ輕重し易からざるなり。且つ夫れ源氏の猜忍なる、骨肉相食む。平氏の闔門死に至るまで、懿親を失はざるに孰與ぞや。

通釋 菅原道眞公程の賢者でも、なほ權力を慕ふ意が全然無かつたとは云へないだらう。(其の結果終に太宰府へ流されたのである。菅公でもさうである。まして菅公とは打つて變つてゐる平家のことであるから想像に餘りある次第である。)平氏は重盛を除いて外は、皆學問もなければ手腕もない連中であつたのだから、勳功を鼻にかけ、君寵を擅にし、いい氣になつて止まることをしらなかつたので、彼等のその遺口は咎め立てする程の値打ちもない位だ。萬一重盛が清盛に後れて死に、盡く清盛が行つた惡逆に引き換へて善根を積み、若い者を戒め皇室を輔けてゐたとすれば、藤原氏に嗣いで、それと肩を比べる程盛んになつたつていい譯である。さすれば源氏は何を頼みに興起し得ようや。一體源氏は名前だけは暴亂を治めるといふのであるが、その實は皇室の權力を盜んだのである。その點から見ると源平兩氏の罪は、どつちがどうとも言へないのである。それに源氏の者は猜みの心、殘忍の心が多くて、兄弟同志で共食ひをやつたのである。その點は平氏が一門打揃つて、死ぬる迄美しい親しみの心を失はなかつたのとは全く比べものにならないのである。

語釋 戀レ權之意(三善清行が菅公に辭職を勸めたが菅公は聽き入れなかつたのであるが、權を戀ふ意が全然無かつたとは言へない。此處は平家をいふ爲めに反對に立派な人物を引き合ひに出して論ずるところ)○接踵(かかとを接する。あとをつぐこと。)○比隆(ならんで隆にあることと。)○攘竊(彼れより自ら來るものをぬすむを攘といふ。)○骨肉相食(義平が叔父の義賢を殺したり、義朝が其の父爲義其他弟を殺したり、頼朝が諸弟從兄弟に對するが如き皆それである。)

鈴論 以上第三段、清盛の專横は、天子が藤原氏を抑へる爲めに平氏を延き入れられたことに基いてゐることを叙べたのである。

世傳平語、倚琵琶演之、其音悲壯感憤、聽者莫不悽愴。余嘗西遊長門、過壇浦、觀平氏覆滅之處矣。又抵肥後、聞「其州有五家山、山谷深阻、平氏或竄匿焉、子孫至今猶有存者。不與外人交通云。」夫平氏於王家、功罪相償。天不必勦絶其後。則是其或然也。

訓讀 世に平語を傳へ、琵琶に倚つて之を演ず。其の音悲壯感憤、聽く者悽愴せざるは莫し。余嘗て西に遊び、壇の浦を過ぎ、平氏覆滅の處を觀る。又肥後に抵り、聞く、「其の州に五家山あり。山谷深阻、平氏或は竄匿し、子孫今に至るまで猶ほ存する者有り。外人と交通せずと云ふ」と。夫れ平氏、王家に於ける、功罪相償ふ。天必ずしも其の後を勦絶せず。則ち是れ其れ或は然らん。

通釋 今日世間で平家物語といふ書を傳へ、それを琵琶といふ樂器に合はせて語つてゐる。その音聲が如何にも哀しい中に勇ましく感動的で聽く者は誰れでも悲しみ痛むのである。自分は以前、西方、長門の國に遊び、壇浦を過ぎ、平家一門が滅亡した所を觀たことがあつた。それから又肥後の國へ行つた時、聞いた話であるが、そ

の國に五家山といふ處があつて、山は深く谷の險しい所であるが其處へ平氏のもので逃げ匿れたものがあつて、その子孫は、今日に至るまでまだ殘つて居る。併しその土地以外とは一切往來をして居らぬといふことである。一體平氏は皇室に對して、功もあり罪もあつて、結局相償つてゐる。(それを無暗に責めるのは片落ちである。)お天道樣は公平で、その子孫を絶やさうともしないものであらう。して見れば五家山の話も、萬更ら作りごとでもあるまい。

語釋 平語(平家物語は信濃前司行長の作と傳へられてゐる。)○演之(語ること。多く書者が語つた。)○五家山(五箇村と作る方がいいといふ說がある。)

餘論 以上第四段、結局平氏は功罪相償ふことを叙べたのである。

叙說 本論は、朝權が武門に移つたのは、藤原氏が私門を營み、國家の休戚に意を用ひなかつたことから起つてゐると論じ、皇室と藤原氏との系統を叙べて、その由つて來る所を究めたのである。

外史氏曰、王權之移於武門、始於平氏、成於源氏。而基之者、藤原氏也。故略叙王室相家之系統、以備參觀云。蓋神祖而後三十九世曰天智、是爲中宗。天智子大友卽位。而天武以叔父簒立、傳之持統・文武・元明・元正・聖武・孝謙・帝大炊。凡七世而天武之嗣絶。光仁以天智孫、入繼大統、傳之其子、是爲桓武帝。桓武三子、平城・嵯峨・淳和、兄弟相及。仁明以嵯峨子繼之。文德以仁明子又繼之。文德幼子、以藤原氏故、立卽位。是爲清和帝。

訓讀 外史氏曰く、王權の武門に移るは、平氏に始まり、源氏に成る。而して之を基する者は藤原氏なり。故に王室相家の系統を略叙し、以て參觀に備ふと云ふ。蓋し神祖より後三十九世を天智と曰ひ、是を中宗と爲す。天智の子大友、位に卽く。而るに天武、叔父を以て簒立し、之を持統・文武・元明・元正・聖武・孝謙・帝大炊に傳ふ。凡そ七世にして天武の嗣絶ゆ。光仁、天智の孫を以て入りて大統を繼ぎ、之を其の子に傳ふ。是を桓武帝と爲す。桓武の三子、平城・嵯峨・淳和、兄弟相及ぶ。仁明、嵯峨の子を以て之を繼ぐ。文德、仁明の子を以て又之を繼ぐ。文德の幼子、藤原氏の故を以て、立つて位に卽く。是を清和帝と爲す。

通釋 外史氏が曰ふのに、皇室の權力が武門の手に移つたのは、平氏からのことで、源氏になつてから全く武門の手中のものとなつて終つたのである。そして、その基をなしたのは藤原氏である。だから皇室と藤原氏との系圖を大體述べて置いて參考の便に供へようと思ふ。思ふに神武天皇の後三十九代目の御方を天智天皇と申上げ、中宗といはれた御方であつた。天智天皇の子大友(卽ち弘文天皇)が卽位なされた。ところが天武天皇は叔父の身分で帝位を奪つてお立ちになり、御位を持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、大炊(卽ち淳仁天皇)と順次にお傳へになつた。凡そ七代經つてから天武天皇のお跡が絶えたのである。光仁天皇は天智天皇の御孫であるので入つて天子のお跡をお繼ぎなされ、其の皇子に位をお傳へ皇子卽ち平城・嵯峨、淳和の三帝が兄弟順に御位に卽かれた。それから、仁明天皇は嵯峨天皇の皇子を以てその跡をお繼ぎなされた。それから、文德天皇は仁明天皇の皇子を以て又お繼ぎになつた。文德天皇の幼い皇子が藤

原氏の關係で御即位なされた。これが清和天皇である。

語釋 中宗（中興の英王。）○天武篡立（壬辰の亂。）○孝謙（淳仁天皇の後重祚され、稱德と申す。）○以藤原氏故立（文德天皇は長子惟喬を立てようとされたが、藤原良房が外孫の清和天皇を立てたのである。これが藤原氏專横の初めである。）

清和子陽成、爲藤原氏所廢。光孝以文德弟代之。光孝而下、宇多・醍醐・朱雀・村上、父子相繼。村上之子、冷泉・圓融、兄弟相及。花山以冷泉子繼圓融。一條以圓融子代花山。三條又以冷泉子繼一條。一條之子、後一條・後朱雀、兄弟相及。後朱雀而下、後冷泉・後三條・白河・堀河・鳥羽・崇德、父子相繼。崇德而下、詳於源平語中。崇德而上、至於文德廿一世、其非藤原氏之出者、宇多・後三條而已。故皆計抑其權而在位不長、莫能遂志。然宇多以後三朝、不置攝關。政在天子。白河以後、已辭位而猶聽政。政在上皇。其餘皆仰藤原氏之成。而其擅政始於文德云。

訓讀 清和の子陽成、藤原氏の廢する所と爲る。光孝、文德の弟を以て之に代る。光孝より下、宇多、醍醐、朱雀、村上、父子相繼ぐ。村上の子、冷泉、圓融、兄弟相及ぶ。花山、冷泉の子を以て圓融に繼ぐ。一條、圓融の子を以て花山に代る。三條、又冷泉の子を以て一條に繼ぐ。一條の子、後一條、後朱雀、兄弟相及ぶ。後朱雀

より下、後冷泉、後三條、白河、堀河、鳥羽、崇德、父子相繼ぐ。崇德より下は、源平語中に詳なり。崇德より上、文德に至るまで廿一世、其の藤原氏の出に非ざる者は、宇多、後三條のみ。故に皆其の權を抑へんと計る。而して在位長からず、能く志を遂ぐる莫し。然れども宇多以後の三朝は、攝關を置かず。政、天子に在り。白河以後は、已に位を辭して猶ほ政を聽く。政、上皇に在り。其の餘は皆藤原氏の成を仰ぐ。而して其の政を擅にするは、文德に始まると云ふ。

通釋 清和天皇の皇子の陽成天皇は藤原基經の爲めに廢められなされた。光孝天皇は文德天皇の弟といふので、代つて天子になられた。光孝天皇より、以下、宇多、醍醐、朱雀、村上の諸帝は父子で相繼承なされた。村上天皇の皇子、冷泉天皇、圓融天皇は御兄弟順々に御即位なされた。花山天皇は冷泉天皇の皇子といふので圓融天皇にお繼ぎなされた。一條天皇は圓融天皇の皇子といふので花山天皇に代られた。三條天皇は又冷泉天皇の皇子といふので一條天皇に繼がれた。一條天皇の皇子、後一條、後朱雀兩天皇は、兄弟順に立たれた。後朱雀天皇より以下、後冷泉、後三條、白河、堀河、鳥羽、崇德諸帝は父子相繼がれたのである。崇德天皇以下は本書の源平兩氏の物語の中で詳に述べてある。それで、崇德天皇より前文德に至るまで、二十一代の間で藤原氏の出でなかつた御方は、宇多、後三條の兩帝だけである。そんな譯でこの兩帝は藤原氏の權力を抑へようと計畫なされた。併し御位に在らせられることが短かつたのでその御志をお遂げなされるに至らなかつた。然れども、宇多天皇以後の三代は攝政關白を置かれなかつた。政治は天子の御手の内に在つたのである。それが白河天皇以後となるとすでに帝位をお辭しになつた後、なほ政治をなされるやうになつた。かくて政治は上皇の御手に在つたのであ

る。その外の諸帝は皆藤原氏のするが儘にして居られた。そして藤原氏が政治を自分勝手にしたのは、文徳天皇の御世からだといふことである。

語釋 村上（村上天皇は朱雀天皇の同母弟。ここに父子といふは誤）○後冷泉（後冷泉と後三條は兄弟。）○藤原氏之出（藤原氏の生む所。）○在位不レ長（三條天皇は四年。後三朝字多、醍醐、朱雀）○不レ置二攝關一（實は攝政關白は置かれてゐた。池田廣洲翁曰く恐くは傳寫の誤と。）

餘論 以上第一段、皇室の系統をのべて、藤原氏の勢力の盛んになつた跡を見るやうにした。

然余謂、藤原氏、驕專、其來久矣、非獨始於文德時也。鎌足助天智、效力王室。其子不比等、爲四朝元老、文武・聖武、竝娶其女。而孝謙其外孫女也。而皆淫縱。惠美押勝、嬖於孝謙、殆危國家。實不比等孫、則其家法可知也。

訓讀 然れども余謂ふ、藤原氏の驕專は、其の來ること久し、獨り文德の時に始まるのみに非ざるなりと。鎌足、天智を助け、力を王室に效す。其の子不比等は、四朝の元老と爲り、文武、聖武、並に其の女を娶る。而して孝謙は其の外孫の女なり。而して皆淫縱。惠美押勝は、孝謙に嬖せられ、殆んど國家を危うす。實に不比等の孫にして、則ち其の家法知る可きなり。

通釋 併し自分は藤原氏の驕り專横なのは、由つて來る所久しいもので、ひとり、文德天皇の時に始まつたばかりは言へないと思ふ。藤原鎌足は、天智天皇を助け皇室の爲めに力を盡した。その子の不比等は、持統天皇以下、四代の元老となり、殊に文武、聖武の二帝は不比等の娘を娶つてゐられる。そして、孝謙天皇は聖武天皇の皇女であられるから卽ち不比等の外孫女に當られる。しかし二皇后一外孫女ともに御行ひ正しくあらせられなかつた。かの惠美押勝は孝謙天皇に寵愛せられ、殆んど國家を危くした。その孝謙天皇は實に不比等の孫女であられたので、藤原氏の家庭の仕込み樣が正しくなかつたことも之で略見當がつく。

語釋 四朝（持統、文武、元明、元正。）○娶二其女一（文武天皇の皇后は宮子、聖武天皇の皇后は安宿卽ち光明皇后。）○孝謙（聖武天皇の皇女。）○淫縱（聖武天皇の皇后は僧玄昉を寵せられ、孝謙天皇は惠美押勝と道鏡とを寵せられた。）

其後光仁・桓武・仁明、獨不レ出於藤原氏。而自平城以下、至於文德、又皆其出。文德外舅左大臣冬嗣、爲不比等四世孫。冬嗣之子良房、又納女文德、生清和。文德欲レ立長子惟喬而憚良房、遂立清和。則藤原氏之威、懾人主、非一日、又可知也。

訓讀 其の後光仁、桓武、仁明、獨り藤原氏より出でず。而して平城より以下文德に至るまで、又皆其の出なり。文德の外舅左大臣冬嗣は、不比等四世の孫たり。冬嗣の子良房、又女を文德に納れ、清和を生む。文德、長子惟喬を立てんと欲して、良房を憚り、遂に清和を立つ。則ち藤原氏の威、人主を懾れしむる、一日に非ざること、又知る可きなり。

通釋 其の後、光仁、桓武、仁明の三帝のみは藤原氏のお腹から出られたお方ではなかつた。けれども、平城天皇以下、文德天皇に至るまでは矢張り皆藤原氏の出でゐらせられた。文德天皇の外祖、左大臣冬嗣は、不比等四世の孫であつた。冬嗣の子の良房は、又自分の女を文德天皇に納れて皇后としたが、清和天皇を生み奉つた。

文德天皇は、その皇長子惟喬親皇をお立てにならうと思はれたが、良房に氣兼ねをされて、清和天皇をお立てになつた。これ等のことからすれば藤原子の威力が天子をも恐れしめたことは久しい間のことで、昨日今日に始まつたことでないことが知れる譯である。

語釋 外舅（外祖の誤。外舅は妻の父の意。冬嗣の女順子が文德天皇を生む。）○惟喬（紀靜子の生む所。藤原氏に非ず。）

清和生九歲卽位。良房以外祖攝政。其子基經廢陽成、立光孝、關白萬機。攝關之號始此。基經二子、時平忠平。忠平攝政於朱雀之朝、與其二子實賴・師輔、竝列三公。於是乎、有天慶之亂。冷泉・二弟爲平・守平。村上欲立爲平爲冷泉儲貳。而實賴等以其非藤原氏出、沮之而立守平。是爲圓融。於是乎、有安和之變。

訓讀 清和生れて九歲にして位に卽く。良房、外祖を以て政を攝す。其の子基經、陽成を廢し、光孝を立て、萬機を關白す。攝關の號、此に始まる。基經の二子、時平、忠平。忠平、政を朱雀の朝に攝し、其の二子實賴、師輔と、並に三公に列す。是に於てか、天慶の亂有り。冷泉の二弟爲平、守平。村上、爲平を立てて、冷泉の儲貳と爲さんと欲す。而して實賴等、其の藤原氏の出に非ざるを以て、之を沮んで守平を立つ。是を圓融と爲す。是に於てか、安和の變有り。

通釋 清和天皇は、生れてまだ九歲といふのに御卽位なされた。良房は母方の祖父といふので代つて政治をした。その子の基經は陽成天皇を廢し、光孝天皇をお立て申し、萬機を關白したのである。攝政關白といふ名はこの時から始まつたのである。基經の二人の子、時平、忠平。その忠平は朱雀天皇の時に攝政となり、その二子、實賴、師輔と頭を揃へて三公となつたのである。此の時である、忠平が撥非違使を惜しんで將門に遣らなかつた爲めに、天慶の亂が起つたのである。冷泉天皇の二皇弟は、爲平、守平と申上げた。父君の村上天皇は、爲平親王を立てて、冷泉天皇のお世嗣となされようとした。所が實賴等は爲平親王が藤原氏の出でないといふので反對して守平親王をお立て申した。これが圓融天皇である。その爲めに、安和の變が起つたのである。

語釋 攝關（神皇正統記に、光孝帝踐祚の始めに攝政を改めて關白とされたことが出てゐる。忠平は太政大臣はそれをさしていふのである。攝政の稱は、これより先き清和天皇の時に始まる。ここ）○列三公（承平五年、七年、實賴は右大臣に村上天皇の時左大臣に轉ず、師輔右大臣となる。朱雀の朝には師輔は大納言であつて、まだ三公にはなつてゐなかつた。この處は大體の見地より期く述べたのである。）○儲貳（皇太子。）○其非藤原氏出（爲平、守平兩皇子は皆平親王は源高明の女を納れて妃とせられた。これが藤原氏の氣に入らなかつたのである。池田臨洲翁が其字の下に妃字を脫すとして其妃非藤原氏出となすは是に似たり。）○安和之變（冷泉天皇の安和二年、中務少輔橘繁延、前相模介藤原千晴等、爲平親王を擁し、關東にて亂を作すを謀つた。源滿仲も之に關係した。京師の擾亂天慶の亂の如しと曰はれてゐる。）

師輔三子、曰伊尹・兼通・兼家。兼家三子、曰道隆・道兼・道長。皆兄弟爭政。伊尹女生花山。兼家女生一條。故兼家令道兼賺花山遜位、而以一條代之。是其最甚者也。後一條而下三帝、皆道長女所生。是其最極寵榮者也。道長二子、賴通・敎通、相繼執政。而賴通生師實、師實生忠實。忠實疎其長子忠通、而愛少子賴長。於是乎、有保元之禍。

訓讀 師輔の三子、曰く伊尹・兼通・兼家。兼家の三子曰く道隆・道兼・道長。皆兄弟政を爭ふ。伊尹の女、花山を生む。兼家の女、一條を生む。故に兼家は道兼をして花山を廉し、位を遜らしめ、而して一條を以て之に代ふ。是れ其の最も甚だしき者なり。後一條より下の三帝は、皆道長の女の生む所なり。是れ最も寵榮を極むる者なり。道長の二子、頼通・教通・相繼いで政を執る。而して頼通、師實を生み、師實、忠實を生む。忠實其の長子忠通を疎んじて、少子頼長を愛す。是に於てか、保元の禍有り。

通釋 師輔の三子を伊尹・兼通・兼家といつた。兼家の三子を道隆・道兼・道長といつた。皆兄弟で政權を爭つた。伊尹の娘に當る方が花山天皇をお生みした。兼家の娘に當る方は一條天皇をお生みした。故に兼家は其の子道兼をして花山天皇(伊尹の孫に當る)をだまして出家させ、位をお遜らせ申し、そして自分の孫に當る一條天皇をば之に代へたのである。これ等は藤原氏の專横の最も烈しいものである。後一條以下の三帝は皆道長の娘のお生みした所である。これ等は藤原氏が最も君寵を蒙つた極點である。道長の二子、頼通、教通は相繼いで政治の權柄を執つた。そして、頼通は師實を生み、師實は忠實を生んだ。忠實は、その長男の忠通を疎外して、少子の頼長を愛した。そこで保元の亂が勃發したのである。

語釋 三帝(後一條、後朱雀、後冷泉。)○最極ニ寵貴ニ(道長政治上の隨一を執ること三十餘年、女の后となるもの三人。兩朝天子の外祖となり、兒女公卿妃嬪となる者が多かつた。榮華物語に、その寵榮を記してある。)○保元之亂(頼長が崇德上皇と亂を作したことは本文に詳かである。)

忠通ノ三子、基實・基房・兼實。基實生ニ基通、基房生ニ師家、兼實生ニ良經。更執ニ朝政於源平之際。其論議可ニ觀者、獨有ニ兼實。他充ニ位而已。其後一姓分爲ニ五派、更爲ニ攝關。而其進退皆不ニ復關ニ天下ノ事。不ニ足ニ錄也。

訓讀 忠通の三子、基實・基房・兼實。基實、基通を生み、基房、師家を生み、兼實、良經を生む。更朝政を源平の際に執る。其の論議觀る可き者は、獨り兼實有るのみ。他は位に充つるのみ。其の後、一姓分れて五派と爲り、更攝關と爲る。而れども其の進退、皆復天下の事に關せず。錄するに足らざるなり。

通釋 忠通の三子は、基實・基房・兼實といふ。基實は、基通を生み、基房は師家を生み、兼實は良經を生んだ。これ等の者は代る〳〵源平時代に朝政を執つて居たのである。皆大した人物ではないので、其の中で議論意見の觀るべきものはただ兼實あるのみである。その外のものは、唯だ位を塞いで居ただけの話であつた。その後藤原氏は分れて五派となり、それが代る〳〵攝政關白となつた。併しその進退は何れも、早や天下の事に關する樣な事はなかつた。(武家が政權を握つたからである)だからここに書く程のこともないのである。

語釋 五派(近衞、九條、二條、一條、鷹司、これを五攝家といふ。後深草天皇の建長四年、北條時頼の奏請によつて五家分立することとなつた。)

總之、良房而下、奕葉秉鈞。大抵務營私門、不以國家休戚經心。而當其爭權、父子兄弟、且不相保。奔競從諛、擧朝成風。宜乎、大亂之基於是。而其終與王室俱衰、共頽、徒存空名。可不哀邪。

訓讀 之を總ぶるに、良房より下、奕葉鈞を秉る。大抵務めて私門を營み、國家の休戚を以て心に經せず。而れども其の權を爭ふに當つては、父子兄弟すら、相保たず。奔競從諛舉朝風を成す。宜なるかな、大亂の是に基づくこと。而して其の終りは王室と俱に衰へ共に頹れ、徒に空名を存するのみ。哀しまざるべけんや。

通釋 概括して云ふと、藤原氏は良房より後は代々朝廷の權を握つてゐたのである。皆自分一家の事のみを營み、國家の喜びや憂ひなどは氣にも懸けなかつたのである。しかし彼等が權力を爭ふ場合には、父子兄弟でさへ助け合はない位であつた。名利のための奔走、競爭、へつらひ、これが朝廷全體の風習となつたのである。大亂が此處に本づいて、起つたのもまことに道理ではある。そして、藤原氏の終末は皇室と一緒に衰へ、一緒にくづれ、たゞ攝政關白といふ實のない名目だけが殘つたに過ぎないのである。まことにこれが悲しまないでゐられようか。

語釋 秉鈞（政權を執ること。）○休戚（休は慶び、戚は憂ひ。）

餘論 以上第二段、藤原氏の系統を陳べて、その專權の發展の經路を明かにしたのである。

外史氏曰、吾閱レ史、有レ知二王覇所以廢興一也。源頼朝嘗奏二大江廣元一、爲二廳使衛尉一。攝政兼實議爲二不可一。曰「非二儒家進仕之例一。」嗚呼、以二門閥一爲レ賢、以二格例一爲レ政、驅二其才俊一以資二梟雄一。而猶不二覺悟一、爭二此區區一。兼實且然。其他可レ知。

訓讀 外史氏曰く、吾れ史を閲し、王覇の廢興する所以を知る有り。源頼朝、嘗て大江廣元を奏し、廳使衛尉と爲さんとす。攝政兼實、議して不可と爲す。曰く、「儒家進仕の例に非ず」と。嗚呼、門閥を以て賢と爲し、格例を以て政を爲し、其の才俊を驅つて、以て梟雄に資す。猶ほ覺悟せず。此の區區を爭ふ。兼實すら且つ然り。其の他は知る可し。

通釋 外史氏が曰ふのに、自分は歷史を讀んで朝廷の威が衰へ、幕府の勢力が興つた譯を知ることが出來た。源頼朝が嘗て大江廣元を奏請して檢非違使衛門尉としようとした。攝政兼實は、評議の結果それは出來ないこととした。そして曰ふのに「そんな仕官は儒者の家としては、これ迄に例のないことである」と。ああ家柄といふことをすぐれた物となし、何んでも從來のしきたりで政治をなし、朝廷の俊れた人物を追ひやつて頼朝のやうな梟雄の用に立てた。それで尙ほ、自分の間違ひに氣がつかないで、こんな小さなことを兎や角爭つて居るのである。兼實ほどの、少しはものの分かつた男がさうなのである。其の外は推して知るべしだ。

語釋 外史氏曰（これまで王室相家の系統を略叙した。これから自家の意見を述べるので、言葉を改める所だから外史氏曰としたのである。）○廳使衛尉（檢非違使と衛門尉と。）

向使相家有二憂國之心一、通二變之略一、何患於王權之外移邪。顧嚮者天慶之亂也、亦由二藤原忠平之不一許二廳使於平將門一也。久矣哉、相家之沈滯豪傑也。抑將門欲二自興一也、而以得失爲二榮辱一。頼朝欲レ與二之其下一也、而不以從違爲損益。又可以觀二世變一矣夫。

訓讀 向きに相家をして國を憂ふるの心、變に通ずるの略有らしめば、何ぞ王權の外移を患へんや。顧ふに嚮者の天慶の亂たる、亦藤原忠平の廳使を平將門に許さざるに由るなり。久しいかな、相家の豪傑を沈滯せしむ

るや。抑〻將門は自ら興へんと欲し、而して得失を以て榮辱と爲す。賴朝は之を其の下に興へんと欲し、而して從違を以て損益と爲さず。又以て世變を觀る可きかな。

通釋 若し藤原氏に國家を憂ふる心があり、又先例格式抔に拘泥しないで、場合々々の變化によつて融通する才略があつたら、朝廷の權力は決して外部の武人の手に移る抔の氣遣ひはなかつたのである。思ふにさきに起つた天慶の亂でもさうだが、あれだつて藤原忠平が檢非違使を平將門にやることを許さなかつたから起つたことである。藤原氏が豪傑の士を取り上げないで沈滯せしめたのも久しいことではある。抑も將門は檢非違使の職を己が身に加へ得ようとしたので、その職を得る得ないを名譽恥辱としたのである。(故に得なかつたから恥辱として遂に謀叛をしたのである。)所が賴朝は檢非違使の職を自分の手下の廣元に與へようとして、而も朝廷が自分のいふ通りに從つて呉れるか從はないかといふことはそれ程問題にしてはゐなかつた。(損とも益とも思はない。從はなければ自分の助けとなるから)此の一事で以て、世の樣が如何に變つたかといふことを窺ひ知ることが出來るのである。

詰釋 沈滯(榮達させないで沈めて置くこと。)○自興(其の職に自ら任ぜられること。)○世變(權力が武家に移り、朝官が空名となつたこと。)

餘論 以上第三段、朝廷の權が武門に移つたのは、その原因は藤原氏が門閥や格例に拘泥して、豪傑を沈滯させたことにある事を叙べたのである。

日本外史解義　卷一終

日本外史解義　卷二

源氏正記

源氏上

源氏出自清和天皇。天皇宮人王氏、生貞純親王。敍四品任兵部卿、稱桃園親王。親王二子、曰經基、曰經生。皆賜姓源氏。經基有武幹、善騎射。以親王爲帝第六子、世呼經基曰六孫王。天慶中、爲武藏介。平將門之反、間行入奏之。因拜從五位下。從藤原忠文伐將門、又從小野好古伐賊黨藤原純友、終叙正四位下、任鎮守府將軍。子孫世爲武臣、其旗用白。

訓讀 源氏は、清和天皇より出づ。天皇の宮人王氏、貞純親王を生む。四品に敍せられ、兵部卿に任ぜられ、桃園親王と稱す。親王の二子は、經基と曰ひ、經生と曰ふ。皆姓を源氏と賜ふ。經基武幹有り、騎射を善くす。

親王は帝の第六子たるを以て、世、經基を呼んで六孫王と曰ふ。天慶中、武藏介となる。平將門の反するや、間行し、入りて之を奏す。因つて從五位下に拜せらる。藤原忠文に從ひて、將門を伐ち、又小野好古に從ひて、賊黨藤原純友を伐ち、終に正四位下に敍せられ、鎭守府將軍に任ぜらる。子孫世々武臣と爲り、其の旗白を用ふ。

通釋 源氏はもと清和天皇から出たのである。清和天皇の宮女の王氏といふのが貞純親王を生まれた。此の親王は四品親王に敍せられ、兵部省の長官に任ぜられ、桃園親王と申上げた。此の方に二人のお子があつて、經基、經生と申した。此の二方が皆源氏の姓を賜つて臣籍に降下されたのである。この經基は勇武に長じて殊に馬に乘つて弓を射ることが上手であつた。父君の桃園親王は帝の第六番目の皇子であられたから、そのお子樣といふので、世の中の者は此の經基を六孫王と呼んでゐた。經基は朱雀天皇の天慶年中に武藏介と爲つてゐられた。平將門が謀叛をしたので、人目につかぬやうに變裝して都へ行き、此のことを天皇に申し上げた。その功によつて從五位下に拜せられた。間もなく征東大將軍藤原忠文に從つて將門を伐ちに出かけたが、これは平貞盛が早く片附けて終つたので途中から引き還へしたが、その翌年には小野好古に從つて將門の一味の藤原純友を征伐に出掛け、其れ等の功により終に正四位下に叙せられ、鎭守府將軍に任ぜられた。この子孫が代々武藝を以て君に事ふる臣となり、その旗は白旗を用ひて、記とした。

語釋 宮人王氏（宮人は宮女、王氏中務大輔棟貞の女。）○桃園親王（京都の桃園に居られたので、清和天皇よりすれば孫の王）○小野好古（篁の孫で、小野道風の兄である。）○第六子（陽成・貞固・貞元・貞平・貞保・貞純、の順である。）○六孫王（第六の親王の子に當るので六孫王といつた。）

有八子。長滿仲、生于攝津多田、襲父職位、得關東士心。冷泉帝安和二年、中務少輔橘繁延、前相模介藤原千晴等、密謀挾爲平親王奔關東爲亂。滿仲與焉。已而滿仲與繁延有隙。遂自首。以攝政藤原實賴旨、與弟滿季捕繁延・千晴、流之。當是時、京師騷擾、如天慶之亂云。滿仲嘗謂武臣衞天子、不可無利刀。乃召筑前良冶某鍛錬六旬、得一刀。曰截髮、曰膝圓、傳之子孫。滿仲官至左馬頭。及卒、贈從三位。

訓讀 八子有り。長は滿仲、攝津の多田に生れ、父の職位を襲ぎ、關東の士心を得たり。冷泉帝の安和二年、中務少輔橘繁延、前相模介藤原千晴等、密に爲平親王を挾んで關東に走り、亂を爲さんと謀る。滿仲與かる。已にして滿仲、繁延と隙有り。遂に自首す。攝政藤原實朝の旨を以て、弟滿季と、繁延、千晴を捕へて之を流す。是の時に當り、京師の騷擾天慶の亂の如しと云ふ、滿仲嘗て謂ふに、武臣天子を衞るには、利刀無かる可からずと。乃ち筑前の良冶某を召して、鍛錬せしむること六旬にして、二刀を得たり。曰く截髮、曰く膝圓、之を子孫に傳ふ。滿仲、官、左馬頭に至る。卒するに及んで從三位を贈らる。

通釋 經基に八人の子があつた。その長男の滿仲は攝津の多田といふ所で生れたが、父の歿後、父の職と位とをそのまま相續して、鎭守府將軍、正四位下となり、關東の武士の人望を得て居つた。冷泉天皇の安和二年に、中務少輔橘繁延、前相模介藤原千晴などが、密に皇弟爲平親王を守り立て、關東に走つて謀叛しようとした。滿仲も之に關係してゐた。其の內に滿仲は繁延と仲違ひとなつた。そこでとう〳〵自ら自首して出た。攝政藤原實賴の命令で弟の滿季と一緒に、繁延、千晴を捕へて遠方へ流した。當時京都は大分騷いで混雜し、丁度平

將門の天慶の亂のときのやうであつたといふことである。滿仲嘗て思ふのに、武藝を以て身を立てる程の者が、天子を保護するのには、どうしても、よく切れる刀がなくてはならぬと。そこで筑前の國の上手な刀鍛冶の某といふ者を呼び寄せて、六十日間もかかつて、鍛へ上げさせて二たの刀を得た。截鬚・膝圓と名づけて代々子孫に傳へた。此の滿仲といふ人は官は左馬寮の長官にまでなつた。死んでからは從三位を追贈された。

語釋 八子（滿仲・滿政・滿季・滿實・滿快・滿生・滿重・滿猶）○多田（大阪の北方。）○筑前良治某（良治は良き刀鍛冶、其）○截鬚・膝圓（滿仲はこの刀を用ひて死刑囚を切つて見た所、非常によく切れて、其の餘勢で一つは鬚が切れたし、一つは膝まで切り落した。それで截鬚、膝圓と名付けたのである。）

四子、賴光・賴親・源賢・賴信。源賢爲僧。賴親坐與興福寺僧鬪、處流。子孫居大和、稱大和源氏。賴光材武有名。爲東宮大進。永延中、攝政藤原兼家造新第落之。賴光遣馬三十匹、以分賓客。兼家子道隆襲攝政。其弟右大將道兼、與之爭權。賴信素事道兼。謂賴光曰「吾力能刺道隆。使我主代之。」賴光掩其口曰「毋妄言。事敗、肝腦塗地。汝主亦豈可晏然止哉。」賴信乃止。賴光有三子。長賴國。子孫世居多田、稱攝津源氏。

訓讀 四子、賴光、賴親、源賢、賴信。源賢は僧と爲る。賴親は興福寺の僧と鬪ふに坐して、流に處せらる。子孫大和に居り、大和源氏と稱す。賴光材武にして名あり。東宮大進と爲る。永延中、攝政藤原兼家新第を造り之を落す。賴光馬三十匹を遣り、以て賓客に分つ。兼家の子道隆、攝政を襲ぐ。其の弟右大將道兼、之と權を

爭ふ。賴信素より道兼に事ふ。賴光に謂つて曰く「吾が力能く道隆を刺し、我が主をして之に代らしめん」と。賴光其の口を掩うて曰く「妄言する毋れ。事敗るれば肝腦地に塗れん。汝が主も亦豈に晏然として止まる可けんや」と。賴信乃ち止む。賴光三子あり。長は賴國。子孫世〻多田に居り、攝津源氏と稱す。

通釋 滿仲の四人の子は、賴光、賴親、源賢、賴信である。その中源賢は僧となつた。賴光は武藝の材があつて名と喧嘩をした廉で流し者となつた。その子孫は、大和に居つて、大和源氏といつた。賴親は奈良興福寺の僧高かつた。東宮大進といふ役になつた。一條天皇の永延年間、攝政藤原兼家が新しい邸宅を造つて、落成式を行つた。賴光は、其の時、馬三十頭を送り、其の席に列席した賓客に分けてやり、祝意を表した。兼家の子の道隆は、攝政の職を繼承した。その弟の右近衛大將道兼が兄道隆と權力を爭つた。賴信はもともと道兼に事へて居た。この時、兄の賴光に向つて曰ふには「私の力で道隆を刺し殺すことは容易だから之を刺し殺し、私の主人の道兼をして代つて攝政となれるやうにしよう」と。賴光は賴信の口を手で抑へて曰ふには「滅多な事をいふな。若し遣り損なつたら、お前は殺されて終ふであらう。もうさうなればお前の主人の道兼だつて、どうして無事で居ることが出來ようぞ」と。そこで賴信も其の企を止めにした。賴光には三人の子があつた。その長子は賴國といつた。子孫は代々攝津の多田に住んでゐたので、世之を攝津源氏といつた。

語釋 與興福寺僧鬪（賴親が大和守であつた時、興福寺の僧の不法を朝廷へ訴へ出た。僧徒は怒つて賴親を攻めた。賴親は子賴國、賴基。）○三子（賴國、賴基。）

賴信尤勇敢、善用兵。長元中、爲甲斐守。會上總介平忠常作亂。朝廷令上野介平直進（大進は亮の次ぎ、東宮の公事を掌る。）

賴親の房等と共に戰つて之を却け殺傷頗る多かつた。朝廷其の罪を定め賴親を土佐に、賴房を隱岐に流した。）○東宮大

方將東海・東山兵討之。三歲不能平也。乃以頼信爲常陸介、伐之。頼信聞命卽往。人勸其待兵集而進。弗聽。遂率子頼義等、進赴鹿島。忠常奪舟、列柵海岸。不可濟。頼信計示弱怠之、使使請和。忠常不肯。於是聚衆議戰。衆謂其無舟筏、宜循海赴攻。頼信曰「不可。賊恃險。吾直渡、攻其不備、可一戰下也。聞有淺處可騎渡。軍中豈有知之者乎」。有高文者、自稱知之、馳入海、行立葦爲表。頼信麾軍從之。忠常驚怖出降。斬之、效首京師。以功敍從四位上、任上野常陸介。頼信謝曰「臣藉天威、得不血刃、而降强賊。何功之有。臣老矣。不堪遠任。願得改守丹波。非所敢望也」。不許。

訓練 頼信尤も勇敢にして、善く兵を用ふ。長元中、甲斐守と爲る。會〻上總介平忠常、亂を作す。朝廷上野介平直方をして、東海・東山の兵に將として之を討たしむ。三歲平ぐる能はず。乃ち頼信を以て常陸介と爲し、之を伐たしむ。頼信命を聞き卽ち往く。人其の兵の集まるを待つて進まんことを勸む。聽かず。遂に子頼義等を率ゐ、進んで鹿島に赴く。忠常舟を奪ひ、柵を海岸に列ぬ。濟る可からず。頼信弱を示して之を怠らしめんと計り、使をして和を請はしむ。忠常肯んぜず。是に於て、衆を聚め戰を議す。衆、其の舟筏無ければ、宜しく海に循ひて赴き攻むべしと謂ふ。頼信曰く、「不可なり。賊、險を恃む。吾れ直に渡り其の備へざるを攻めば、一戰

にして下す可し。聞く、淺處の騎渡す可き有りと。軍中豈に之を知る者有る乎」と。高文なる者有り。自ら之を知ると稱し馳せて海に入り、行く〻葦を立てて表と爲す。頼信、軍を麾いて之に從ふ。忠常驚怖し、出で降る。之を斬り、首を京師に效す。功を以て從四位上に叙せられ、上野常陸介に任ぜらる。頼信謝して曰く、「臣天威に藉り、刃に血ぬらずして强賊を降すことを得たり。何の功か之れ有らん。臣老いたり。遠任に堪へず。願はくば改めて丹波に守たるを得しめよ。敢て望む所に非ざるなり」と。許されず。

通釋 兄弟の中では頼信が一番勇氣があつて、戰爭が上手であつた。後一條天皇の長元年間に、甲斐守となつた。この頃上總介平忠常が謀叛をした。朝廷では上野介平直方を、東海東山、兩道の兵の大將となして征伐に向けた。三年たつても、平げることは出來なかつた。そこで、頼信を常陸介として、伐たせることにした。頼信は其の命令を聞くと、早速出發した。部下の兵士が集まるのを待つてから後に進んでは如何かと勸める人もあつた。併し彼はそれを聞き入れなかつた。遂にその子の頼義等を率ゐて、常陸の鹿島まで進み出た。忠常は、その邊の舟を奪ひ取り、海岸に柵をつらねてゐた。それが爲めに、頼信は渡ることが出來なかつた。頼信はわざと弱い樣な風を見せて、敵に油斷をさせようと計り、使を遣つて和睦を申し込ませた。忠常は、承知しなかつた。そこで部下の軍勢を聚めて、戰爭の方策を相談した。皆の者は舟も筏もないのであるから、海岸を傳つて攻めて行つたら宜いでせうといつた。頼信が曰ふのに「それは可けない。賊は險阻を恃みとしてゐる。いきなり海を渡つて、敵の油斷して居る所を攻めたなら、一度の戰爭で敵を下すことが出來る。聞けば、淺い處があつて、馬で渡れるそうである。我が軍隊の中に誰れか之を知つてゐるものはないか」と。高文といふものがゐて、私が存じて居

りますと云つて、海に驅け入り、行く行く淺い處へ葦を立てて、目じるしとした。頼信は、軍隊を指圖して、その後から從つた。忠常は驚き怖れて、出て來て降參した。忠常を斬つて、その首を京都に送つた。頼信は其の功によつて、從四位上に叙せられ、上野常陸介に任ぜられた。頼信は御禮を申して曰ふには、「私は陛下の御威光によつて戰爭もしないで、強い賊を降參させることが出來ました。何の手柄がありませうぞ。私はもう年を取りました。遠方へ赴任するには堪へられません。何卒改めて、都近くの丹波に國守となりたいもので御座います。併し強ひてお願ひする譯では御座いません」と。此の請ひは許されなかつた。

語釋 人勸（平惟基が勸めた。）○鹿島（常陸。）○高文（眞髪氏。）○不レ血レ刃（双物に敵の血もつけず、即ち戰はないこと。）

子頼義、沈斷有二武略一。爲二小一條院ノ判官代一。毎レ從二獵一善用二弱弓一殪二猛獸一。平直方奇二其材藝一、以レ女妻レ之。既而頼義夢二八幡神一賜二劍一、其妻有レ姙生レ子。頼義喜曰「此兒必興二我家一」。因名曰二義家一。及レ長冠二于八幡祠ノ前一、稱二八幡太郎一。爲レ人英果、善レ射。毎レ有二征行一、未二嘗不一レ從。頼義爲二相模守一。州俗好レ武。頼義・義家撫以恩威。豪傑爭服、樂爲二之用一。

訓讀 子頼義、沈斷にして武略有り。小一條院の判官代と爲る。獵に從ふ毎に、善く弱弓を用ひて猛獸を殪す。平直方其の材藝を奇とし、女を以て之に妻はす。既にして頼義、八幡神、劍を賜ふと夢み、其の妻姙む有りて子を生む。頼義喜んで曰く、「此の兒必ず我が家を興さん」と。因つて名づけて義家と曰ふ。長ずるに及んで、八幡祠の前に冠し、八幡太郎と稱す。人と爲り英果、射を善くす。征行有る毎に、未だ嘗て從はずんばあらず。頼義相模守と爲る。州俗武を好む。頼義・義家、撫するに恩威を以てす。豪傑爭ひ服し、之が用を爲すを樂しむ。

通釋 頼信の子頼義は、沈着いて決斷力に富み、武勇謀略のあつた人であつた。小一條院敦明親王附きの判官代といふ役になつた。獵の催しがあると、いつもお供をして、巧みに、張りの弱い弓で猛獸を射殪した。平直方が彼れの才能技藝を立派なものとして、自分の娘を嫁に遣つた。其の後、或る夜のこと頼義は八幡大菩薩から劍を下された夢を見たが、間もなく、妻が身重になつて男の子を生んだ。頼義は大層喜んでいふに、「此の兒は屹度自分の家を興して呉れるに違ひない」と。そこで家といふ字を使つて義家と名前を附けた。この義家が成長してから、男山八幡宮の前で元服の式を上げ、八幡太郎と稱へた。義家の人柄は才能勝れ、事を決めるに果斷で、弓を射ることが上手であつた。父が征伐に行く度び、いつもお供をしないことはなかつた。頼義は相模守となつた。其の國の風は一般に武を好むでゐた。頼義・義家は其の土地の者を、恩義と威光とで手なづけた。それが爲めに其の國の豪傑共は、先きを爭つて、樂しんで頼義・義家の御用を勤めた。

語釋 小一條院（後一條天皇の太子であつた敦明親王は、病のために太子の位を讓られた。そこで小一條院といふ號を賜つた、上皇の格式に準ぜられた。）○判官代（何々代、と代の字をつけた役は院中に限る。判官代は院中のことを糾し、或は文案を審し、又事務の證滯・失策等を調べる役。）○八幡神（應仁天皇を祀る。）○冠（男子は十五歳になると元服の式をして冠を初めてつけて一人前の男となる。支郎（山城の男山の八幡宮である。）○八幡祠（石清水の八幡樣のこと。）

當二是時一、陸奥ノ豪族安倍頼時、幷二諸部落一爲二六郡ノ酋長一。國守與二秋田城ノ介一、合レ兵伐レ之。頼

時逆撃大敗之。白河關以北傳海、盡叛附焉。朝議以賴義爲陸奥守、與義家及次子義綱、率兵赴伐。會大赦、賴時解兵而降、臣事賴義。賴義遂兼鎮守府將軍。永承七年、任滿將還、入府視事。賴時厚犒其軍。既罷、歸國府、宿于阿栗川。有人、夜襲藤原光貞營。初賴時長子貞任、請婚於光貞、不聽。以故報之也。

訓讀 是の時に當り、陸奥の豪族安倍賴時、諸部落を幷はせて六郡の酋長と爲る。國守、秋田城介と、兵を合はせて之を伐つ。賴時逆へ撃つて、大に之を敗る。白河關以北、海に傳るまで盡く叛附す。朝議、賴義を以て陸奥守と爲し、義家及び次子義綱と、兵を率ゐて赴き伐たしむ。大赦に會ひ、賴時、兵を解いて降り、賴義に臣事す。賴義遂に鎮守府將軍を兼ぬ。永承七年、任滿ちて將に還らんとし、府に入りて事を視る。賴時厚く其の軍を犒ふ。既にして罷めて、國府に歸り、阿栗川に宿す。人有り、夜、藤原光貞の營を襲ふ。初め賴時の長子貞任、婚を光貞に請ひて、聽かれず。故を以て之に報いしなり。

通釋 當時、陸奥の豪族に、安倍賴時といふ者がゐて、諸〻の村落を我がものとし、勝手に六郡の頭領になつた。陸奥の國守の藤原登任は、秋田城介の平重成と兵を合はせて賴時を征伐した。賴時の方では鬼切部といふ所まで出かけてそこで登任等の軍を迎へ撃ち、大に之を破つた。それが爲め、白河關より北、今の青森灣に至る迄の地方は皆、朝廷に叛いて賴時に附いた。朝廷では許議の結果、源賴義を陸奥守と爲し、長男の義家及び次男の義綱と共々に兵を率ゐて征伐に赴かしめることになつた。丁度其の時大赦が行はれて、賴時の罪も許される

ことになつたので、賴時は手下の兵士共を解散して降參し、賴義に家來として仕へた。かくて賴義は遂に鎭守府將軍をも兼ぬることになつた。後冷泉天皇の永承七年に、賴義は任期が滿ちたので、京都へ還らうと思つて殘務整理の爲め鎭守府に入りて事務を視た。賴時はどうしたことか、酒食など饋つて、賴義の軍隊を手厚く慰勞した。賴義は、その內に仕事が片附たので國府へ歸ることになり、途中で阿栗川に一宿した。すると其の夜、何者かが藤原光貞の陣屋を不意打ちして、亂暴を働いたものがあつた。これは、初め賴時の長子の貞任が、光貞に緣談を申込んで、すげなく斷はられたことがある。其の遺恨を晴らさうと爲めの仕業であつたのである。

語釋 六郡（膽澤・和賀・江刺・磐井・志波・岩手。）○秋田城介（秋田城は出羽にありて、鎭壓してゐた。それを城介といつた。今は羽後に屬す）出羽介（ここにあつて、北方を當時の城介は平重成であつた。）○白河關（關城。）○國府（鎭守府は兵事國府は民事の行政所である。奥羽は土地が廣大であるからこの兩府が置いてある。）○阿栗川（陸前。）○不聽（家柄が惡るいので緣談をはねつけたのである。）

於是、賴義欲執貞任。賴時乃擧兵反、據衣川關。賴義奏請再任、發兵伐之。賴時壻藤原經清・平永衡、來屬官軍。或告永衡與虜有私。賴義捕永衡斬之。經清亦不自安、遁歸於賴時。賴時族富忠、勇而有衆。賴義以勅旨諭、應官軍。賴時亦親往說之。賴義令富忠伏兵要擊、獲賴時、誅之。而貞任軍猶張。

訓讀 是に於て、賴義、貞任を執へんと欲す。賴時乃ち兵を擧げて反し、衣川關に據る。賴義奏して再任を請ひ、兵を發して之を伐つ。賴時の壻藤原經清・平永衡、來つて官軍に屬す。或人、永衡、虜と私有りと告ぐ。

頼義、永衡を捕へて之を斬る。經清も亦自ら安んぜず、遁れて頼時に歸す。頼時の族富忠、勇にして衆有り。頼義勅旨を以て諭して官軍に應ぜしむ。頼時も亦親ら往いて之に説く。頼義、富忠をして兵を伏せて要擊せしめ、頼時を獲て之を誅す。而して貞任の軍猶ほ張る。

通釋 そこで頼義は貞任を執へようとした。頼時は直ちに兵を擧げて叛旗を飜へし、衣川關に立て籠つた。頼義は朝廷に事情を申し上げて、陸奥守の再任をお願ひし、兵を繰り出して頼時・貞任を征伐することになつた。頼時の壻の藤原經清、平永衡の二人は、來つて官軍に附いた。或る人が永衡が賊に内通してゐると密告した。頼義は永衡を捕へて斬つて終つた。經清も亦相壻の死を見て、不安を感じ、頼時の所へ遁げて行つた。頼時の一族の富忠といふ男は、勇氣があつて而かも部下を大勢有してゐた。頼義は天子の詔勅の御趣意を説いて之を諭し、官軍の方へ味方させることになつた。頼時の方でも棄てて置けず、頼時自身で富忠の所へ出かけて行つて味方して呉れと説いた。そこで頼義は好機逸す可らずと、富忠に命じて兵を隱し置き、待ち伏せして之を擊たせ、頼時を捕へて、之を誅して終つた。けれども貞任の軍は依然として盛んであつた。

語釋 衣川關（陸中。）○請二再任一（四年の國府の任期が滿ちた際であるが、もう四年任期を延ばして貰ふこと。）

貞任魁傑、善用レ兵。官軍數、不レ利。屬歲比饑、糧食不レ給。天喜五年、頼義奏請レ徵二兵食一。其十一月、自將二兵千八百一、擊二貞任一于河崎。會二大風雪一、人馬凍飢。貞任以二選兵四千一、戰二于鳥海一、縱二左右翼一、大敗二我軍一。我軍所レ餘僅二六騎一。虜急圍レ之、矢下如レ雨。頼義義家皆傷レ馬。

從騎下而授レ之。義家與二藤原範明等一、縱横奮擊。虜兵相警曰、「八幡太郎也。」遂退去。

訓讀 貞任魁傑にして、善く兵を用ふ。官軍數〻利あらず。屬〻歲比りに饑ゑ、糧食給せず。天喜五年、頼義奏して兵食を徵せんと請ふ。其の十一月、自ら兵千八百に將として、貞任を河崎に擊つ。大風雪に會ひ、人馬凍飢す。貞任、選兵四千を以て、鳥海に戰ひ、左右の翼を縱つて、大に我が軍を敗る。我が軍餘す所僅に六騎のみ。虜、急に之を圍み、矢、下ること雨の如し。頼義、義家、皆馬を傷つく。從騎下りて之を授く。義家、藤原範明等と、縱横奮擊す。虜兵相警めて曰く。「八幡太郎なり」と。遂に退き去る。

通釋 貞任は身體長大にして、衆にすぐれた男で、其の上戰爭も上手であつた。官軍は屢〻負けた。その上年年打續く饑饉の爲めに兵粮に不足を來してきた。御冷泉天皇の天喜五年、頼義は朝廷へ事情を申上げて兵士と糧食とを徵發をしてもよいお許しを請うた。同年の十一月には、頼義自身、兵千八百人の將となつて、貞任を河崎で擊つた。丁度大吹雪に會つて、人も馬も凍えて食ふものもなくなつた。その弱味へつけ込んで貞任は、選り拔きの強い兵士四千人を引きつれて、鳥海といふ所で戰ひ、左右の兩翼軍を縱つて、したたか我が軍を敗つた。我が軍は、散々の體で、討ち殘されたものが僅かに六騎だけであつた。賊軍は得たりかしこしと、急に之を取り圍んで、雨のやうに矢を射下ろした。頼義も義家も皆その乘用の馬を傷つけられた。供の家來が自分の馬を下りて授けて呉れた。義家は藤原範明等と縱横無盡に奮ひ擊つた。敵兵は此の勇ましい働き振りに舌を卷き、互ひに警戒し合ひ、「あれは八幡太郎だ。」といつて、とう〳〵皆退却してしまつた。

語釋 河崎（陸中。）○鳥海（陸中。）

賴義既免、乃奏「兵食不レ至、遠近皆然。且出羽守不レ與レ臣戮レ力。於レ是、詔罷出羽守。新守至、亦不敢來援。貞任勢益張。令經清以私符徵官物。令曰「用白符、勿レ用赤符」。赤符、官符也。賴義益因、對守數歲。康平五年、任滿。詔高階經重代任。國民慕賴義、不レ服經重。經重不レ得已而去。」

訓讀 賴義既に免かれ、乃ち奏す、「兵食至らず、遠近皆然り。且つ出羽守、臣と力を戮はせず」と。是に於て詔して出羽守を罷む。新守至るも、亦敢て來援せず。貞任の勢益〻張る。經清をして私符を以て官物を徵せしむ。令して曰く、「白符を用ひ、赤符を用ふる勿れ」と。赤符は、官符なり。賴義益〻困しみ、對守すること數歲。康平五年任滿つ。高階經重に詔して代り任ぜしむ。國民賴義を慕ひて、經重に服せず。經重已むを得ずして去る。

通釋 賴義は危ない所をやつと免かれ、そこで朝廷へ申上げるやう、「兵士も、糧食も今以て參りませず、それが遠方も近かい所も皆然うなのであります。それに出羽守源兼長は一向私と力を合はせて呉れません。」と。そこで詔して出羽守を罷免した。新らたに源齊賴を出羽守に新任したがこの新參の出羽守も亦賴義を援けようとはしなかつた。一方貞任の勢は益〻熾んになつて來た。彼は一味の經清をして勝手に拵らへた割符を持たせて、朝廷への納めものをドン〳〵徵發させた。そして命令を發していふには、「白色の割符を用ひて交易をしろ、赤色の割符は僞せものだから使ふな」と。赤色の割符はつまり朝廷發行の割符である。賴義はそれが爲めに益〻困まつて、戰爭も出來ず、數年の久しい間にらみ合ひの有樣であつた。後冷泉天皇の康平五年に賴義の再任の年限も滿ちた。朝廷では高階經重に詔して、賴義に代つて陸奥守に任じた。けれども陸奥の國民賴義を慕うて、新守の經重に歸服しない。そこで經重は折角來任したけれども致し方なく立ち去つて終つた。（それが爲め賴義は元通り留任することになつたのである。）

語釋 出羽守（源兼長。）○新守（源齊賴、賴義の再從兄弟。）○私符（自分で造つて、私に用ふる切手。）○白符（私符には官の印なく、白色の切手。）○赤符（官の印のある赤色の切手。）

於是、賴義矢必滅レ虜、使人說出羽・酋清原光賴、及弟武則、諭以大義。七月、武則率子弟以下萬餘人而至。賴義以三千人、會議于營岡、爲七陣、以武則等分將之、而自將第五陣、進至萩埒、將攻小松柵。以凶日不レ果。會清原氏候騎誤失火民家、柵中大囂。賴義謂武則曰「機不レ可レ失、拘日何爲」。對曰「我兵怒如レ火。宜及此時用之」。乃遣騎兵、絕其衝路、而步兵薄攻之。深江是則等、以死士冒險入柵。虜大擾。貞任令弟宗任出戰。賴義以麾下橫擊破之。虜遂棄柵走。乃焚柵而退。會霖雨、留旬餘。磐井以南、盡應宗任、侵奪我糧道。賴義分兵赴拒。

訓讀 是に於て、賴義必ず虜を滅さんことを矢ひ、人をして出羽の酋清原光賴、及び弟武則に說かしめ、諭

すに大義を以てす。七月、武則、子弟以下萬餘人を率ゐて至る。頼義、三千人を以て、營岡に會議し、七陣と爲し、武則等を以て分つて之に將とし、而して自ら第五陣に將となり、進んで萩埒に至り、將に小松柵を攻めんとす。凶日なるを以て果さず。會〻清原氏の候騎誤つて火を民家に失し、柵中大に囂し。頼義、武則に謂つて曰く、「機失ふ可からず、日に拘はる何ぞ爲さん」と。對へて曰く、「我が兵怒るこの火の如し。宜しく此の時に及んで之を用ふべし」と。乃ち騎兵を遣はし、其の衝路を絶ち、而して歩兵をして薄つて之を攻めしむ。深江是則等、死士を以て險を冒し柵に入る。虜大に擾る。貞任、弟宗任をして出でて戰はしむ。頼義、麾下を以て横に擊つて之を破る。虜の遊軍、又我が第七陣を襲ふ。亦擊つて大に之を破る。虜遂に柵を棄てて走る。乃ち柵を焚いて退く。會〻霖雨ありて留ること旬餘。磐井以南、盡く宗任に應じ、我が糧道を侵奪す。頼義、兵を分つて赴き拒がしむ。

通釋 そこで頼義は、大に決心して、こん度は屹度賊を滅して見せると、心に誓ひ、人をやり、出羽の酋長の清原光頼と其の弟の武則に順逆の大義を說いて、之を諭した。七月になつて、武則は一族の子弟以下一萬餘人の軍勢を率ゐて、頼義の所へやつて來た。そこで頼義は部下の三千人の兵をつれて、營岡といふ所で皆集つて戰爭に關する相談をなし、大體全軍を七陣に分け、武則等をそれ〴〵一方の隊將とし、而して頼義自身は第五陣の隊將になつて、萩埒といふ所まで進軍し、これから敵の小松柵を攻めようとした。所が此の日は丁度日柄が惡るかつたので其の儘攻めずに見合はせてゐた。丁度其の日のこと、清原氏の斥候の騎兵が、粗相して民家に火災を惹き起し、爲めに小松の柵内では大騷ぎをし出した。頼義が武則に向つていふに、「こんな好い機會を失つてなるものか。日柄等に拘泥してなんとする。」と。武則もそれに對へていふに「さうですとも、味方の兵士は火のやうに怒つて居ります。こんないい時機を逃がさずに、この勢ひ立つてゐる兵を用ひなければ嘘です。」と。そこで騎兵を遣つて、敵の攻め寄する要路を絶ち切らし、一方歩兵をやつて、詰め寄せ〳〵敵を攻めさせた。深江是則等は命知らずの武者を引きつれ、危險を犯して柵中へ突入した。賊は不意を食つて大混亂をした。貞任は弟の宗任をして柵外に出て戰はせた。頼義は旗下勢をつれて横合から擊つて之を破つた。賊の遊擊隊が又わが第七陣を襲擊した。これも亦擊つて大に破つて終つた。それで賊はとう〳〵柵を棄てて逃げ出した。そこでこの柵を燒いて一先づ引揚げた。其の後長雨が續いて、思ふまま進軍も出來ず、十日餘りも滯留してゐた。すると案外にもその間に磐井郡以南が皆宗任に加擔して終つて、わが兵糧を運ぶ通り路を侵し、盛んに掠奪をやつた。頼義は棄てて置けねので一隊の兵を分ちやつて防禦に赴かせた。

語釋 營岡（陸前、一說にヂン）○萩埒（陸中、埒は馬場とも書く。）○小松柵（萩埒を距ること五町。柵とは、とりでにて小城のこと。）○衝路（突いて出て來る肝心な路。）○遊軍（遊擊軍で、別に受持の所なく、不時の用に立てる豫備兵の如きもの。）○第七陣（この時第七陣は清原武則が受持つてゐた。）○霖雨（凡そ雨の三日以上のものを霖といふ。左傳に見ゆ。）○磐井（陸中今の一關の地。）

九月、貞任瞰我兵寡、以精騎八千、來襲。武則曰、「我客兵、糧乏。利在速戰。彼不坐困之而來戰。是自授首也。」頼義大喜、爲長蛇陣、逆戰半日、大破之、追走至磐井河。曰、「吾欲乘機遂擣其巢穴也。」則令武則以八百騎夜追之。武則更揀死士五十、自間道焚貞任營、內外合擊。虜軍大亂、走保衣川之險。

訓讀　九月、貞任我が兵の寡きを瞰ひ、精騎八千を以て來り襲ふ。武則曰く、「我は客兵にして糧乏し。利、速戰に在り。彼、坐ながら之を困しめずして來り戰ふ。是れ自ら首を授くるなり」と。賴義大に喜び、長蛇の陣を爲し逆へ戰ふこと半日、大に之を破り、走るを追うて磐井河に至る。曰く、「吾れ機に乘じ遂に其の巢穴を擣かんと欲するなり」と。則ち武則をして八百騎を以て、夜之を追はしむ。武則更に死士五十を揀び、間道より貞任の營を焚き內外より合擊す。虜軍大に亂れ、走つて衣川の險を保つ。

通釋　九月、貞任は我が兵數の寡いのを、伺ひ知つて、選り拔きの精い騎兵八千を引きつれ、不意に攻め來つた。武則がいふのに「我が軍は他國から來たので、自然兵糧が不十分です。だから一時も速く戰つて勝負を決めるのが有利であります。(若し敵が持久の計を立てやうものなら、こちらはその內に兵糧が無くなつて、弱るのであるのに)賊共はヂッとしてゐて我が軍を困しめることをしないで、わざ〳〵こちらへ戰爭をしに來て呉れました。これは賊共が自分で自分の首をサア差上げませうと、呉れに來たやうなものです。」と。賴義は大層喜んで、長蛇の陣といふ陣立てをなし、サア來いと貞任の軍を迎へて戰ふこと半日、大に賊を破り、逃げるのを追つかけて磐井河まで來た。そこで賴義がいふに、「好い機會だから、われはこの機にッケ込んで、この上、賊の根據地まで、うちくづしてやらうと思ふ」と。そこで武則に八百騎の兵をつれさせて、夜貞任を追つかけさせた。武則は更らに五十人の命知らずを選んで、裏道から進んで行つて貞任の本陣に火をかけ、內外二方面から一時に力を合はせて擊つた。賊軍は大混亂に陷り、走つて衣川の險阻を維持した。

語釋　長蛇陣(陣法の名、橫に長く列をなす陣。)　磐井河(陸中。)

賴義義家進攻之。河水方漲。武則等戰不利。見河岸有樹覆水。武則使趫捷者攀樹踰河縱火虜營。貞任駭走。賴義追擊、連破二柵、進拔鳥海柵。乃會將士飲。謂武則曰、「吾得至於此、子之力也。子視吾面目、奚若也。」對曰、「臣爲將軍執鞭。何力之有。將軍盡忠於天子、暴露于野十餘年、頭髮皆白。天地爲動、將士爲奮、破虜如決河。臣今視將軍、髮復半黑也。卽獲貞任、則全黑矣。」賴義喜、又進破三柵、追貞任、至厨川柵。

訓讀　賴義・義家、進んで之を攻む。河水方に漲る。武則等戰利あらず。河岸に樹有りて水を覆ふを見る。武則、趫捷の者をして樹を攀ぢて河を踰え、火を虜營に縱たしむ。貞任駭き走る。賴義追擊し、連りに二柵を破り、進んで鳥海柵を拔く。乃ち將士を會して飲む。武則に謂つて曰く、「吾れ此に至るを得たるは、子の力なり。子、吾が面目を視る奚若んぞや」と。對へて曰く、「臣、將軍の爲めに鞭を執る。何の力か之あらん。將軍、忠を天子に盡し、野に暴露すること十餘年、頭髮皆白し、天地も爲めに動き、將士も爲めに奮ひ、虜を破ること、河を決するが如し。臣、今將軍を視るに、髮復半ば黑し。卽し貞任を獲ば、則ち全く黑からん」と。賴義喜び、又進んで三柵を破り、貞任を追うて厨川柵に至る。

通釋　賴義、義家は進んで、衣川の險を攻めた。折惡しく磐井河が大氾濫をしてゐて、渡ることが出來ない。武則等は戰爭がうまくゆかなかつた。川の岸に大きな樹があつて、その枝が繁茂して川に蔽ひ被さつてゐるのを

見つけた。武則は身輕な敏捷い男に、その樹を攀ぢて川を越えさせ、賊の兵營に火をつけさせた。貞任はこれに面喰つて駭き逃げた。賴義はすかさず追つかけ擊ち、續けざまに二柵を破り、進んで鳥海の柵を陷れた。そこで賴義は將士を集め、戰勝の祝宴を催した。その時武則に向つていふには「余が今日こんな大勝を得るやうになつたのは、全く貴殿の力によるのだ。貴殿は余のこの面目を何んと見られるか。」と。武則が對へていふに「臣は將軍の爲めに鞭をとつて先達をなしたに過ぎません。何の別に大した盡力を致した譯ではありません。それに引きかへ將軍は天子に忠義を盡され、もう十幾年も東北の荒れ野に、身を曝らされ、苦勞なされた故か頭の髮は眞白におなりでした。天地も之が爲めに感動し、將士も之を目前に拜見してはジッとしてはゐられません。大に奮勵し、それは恰も堤防を切つて河の水を一時に流すが如うに、非常な勢で賊を敗りました。私は今、將軍の御樣子をつくづく拜見するのに、眞白であつた頭髮が、再び半ば黑くなつたやうに思はれます。この調子でゆけば、もし貞任を捕へたならば、將軍の頭髮は眞黑くなることでせう」と。賴義は喜んで、更らに進んで三ケ所の柵を破り、貞任を追つかけて厨川柵まで來た。

語釋 趨捷者（小者なれば名を上げないのである。）○二柵（大麻生野と瀨原の二柵。）○執レ鞭（鞭を執つて、先驅する意で、これは賤者のする役、武則謙遜していふのである。）○三柵（黑澤尻、鶴脛、比與鳥の三柵。）○厨川柵（陸中）

柵據水澤、高壘深塹、塹中植レ刃、以死守之、殺我兵數百人。賴義令壞人家堙塹、下レ馬遙拜京師、手取レ火、號爲神火、投之。會風起壘柵皆火。我軍因急圍之。虜殊死戰。武則解其一角。虜逃走。賴義擊鏖之。貞任乃獨身出鬪。我兵叢刺之。不殊、載之巨楯、六人舁之至。賴義視之、腰圍七尺、長稱之。賴義數其罪、斬之、及其子千代、其弟重任。經清亦被縛至。賴義命用鈍刀斬之曰「猶能用白符乎。」宗任等皆降。賴義見柵中有所虜掠美女數十人、盡分賜將士。

訓讀 柵、水澤に據り、壘を高うし、塹を深うし、塹中に刃を植て、死を以て之を守り、我が兵數百人を殺す。賴義人家を壞ちて塹を堙めしめ、馬より下りて遙に京師を拜し、手づから火を取り、號して神火と爲し之を投ず。會〻風起り、壘柵皆火く。我が軍因つて急に之を圍む。虜、殊死して戰ふ。武則、其の一角を解く。虜逃走す。賴義擊つて之を鏖にす。貞任乃ち獨身出で鬪ふ。我が兵之を叢り刺す。殊せずして、之を巨楯に載せ、六人にて之を舁いて至る。賴義之を視るに、腰圍七尺長け之に稱ふ。賴義其の罪を數めて之を斬り、其の子千代、其の弟重任に及ぶ。經清も亦縛せられて至る。賴義命じて鈍刀を用ひ之を斬らしめて曰く、「猶ほ能く白符を用ふるや」と。宗任等皆降る。賴義柵中に虜掠する所の美女數十人有るを見て、盡く分ちて將士に賜ふ。

通釋 此の柵は沼地に臨んで築かれ、敵はこれに據つて、城壁を高くし、濠を深うし、その濠の中には刃を並べ植てつけて、死力を盡して、守り、我が兵數百人を殺した。賴義は近傍の人家を破壞して、濠を埋めさせ、自身馬から下りて、遙かに都の方を拜し、手づから火をとつて、神火と名づけ、それを投げつけた。折善く風が起つて、城壁も柵も皆燒け出した。我が軍は勢に乘じて急に敵を取り圍んだ。賊は死物狂ひになつて戰つた。そ

こで武則は圍みの一方を開いた。すると、賊共はそれ逃げ路が出來たと、その一角から逃げ出した。頼義はすかさず擊つて鏖にして終つた。貞任は、そこで、唯一人出で來て鬪つた。我が兵士どもが之を寄つてたかつてつき刺した。とどめを刺さないで之を大きな楯の上に載つけて、六人で舁いで、頼義の所へ運んだ。頼義は之を檢視するに、腰の周圍が七尺もあり、身長もそれに相當する程大きな男であつた。頼義は彼の罪を責めて斬り殺し、其の子千代、其の弟の重任までも殺して終つた。經清も縛られてやつて來た。頼義は兵に命じて鈍刀を用ひて之を斬らせて、いふには「どうだ、これでもまだ白符を用ひられるか、」と。宗任等は皆降參した。頼義は厨川柵の中に、貞任等が諸方から掠奪した所の美女が數十人あたのを見て、皆部下の將士に分ち與へた。

語釋 水澤（沼地で、水たまりになつてゐる所地名ではない。）○神火（八幡神に祈つたので神火といつたのである。）○投レ之（前以て草を積置きその上へ投げつけたのである。）○不レ殊（殊は絶の意、息の根をとめないこと。）○巨楯（大きなたて、楯は前に立て、敵の矢を防ぐもの。）

六年二月、使人齎貞任以下ノ首、獻闕下。詔叙正四位下、任伊豫守。叙義家從五位下、任出羽守。義綱爲左衛門ノ少尉。清原武則爲鎮守府將軍。八月、頼義建八幡祠于鎌倉ノ鶴岡、賽戰功。

訓讀 六年二月、人をして貞任以下の首を齎らし、闕下に獻ぜしむ。詔して正四位下に叙し、伊豫守に任ず。義家を從五位下に叙し、出羽守に任ず。義綱、左衛門少尉と爲り、清原武則、鎮守府將軍と爲る。八月、頼義八幡祠を鎌倉の鶴ケ岡に建て、戰功を賽す。

通釋 六年二月に、使ひの者に貞任以下の首を持たせて、朝廷に獻上させた。詔して頼義は正四位下に叙し、伊豫守に任じた。義家は從五位下に叙し、出羽守に任じた。義綱は左衛門少尉となり、清原武則は鎮守府將軍となつた。八月、頼義は、八幡宮を鎌倉の鶴ケ岡に建てて、戰勝の御禮參りをした。

語釋 左衛門少尉（左衛門府の尉の次ぎの官、尉は第三番目の役。）

七年春、頼義・義家、以諸降虜入朝、奏請賞有功將士。朝議未許。以故未赴任。任國不登、以私資、濟貢賦。如是二年、上書請重任、曰、「臣聞、人臣建勳功、受恩賞、和漢古今所同也。是以或有起徒隷而係金紫、出卒伍而至將相者。頼義以功臣之裔、效恪勤之節、舊矣。適東夷蜂起、侵盜郡縣、抄略人民。六郡之地、不服皇威者、數十年矣。及近歲、日益猖獗。頼義以永承六年、受任彼州。至天喜中、兼帥鎮府。臣啣鳳凰之詔、以向虎狼之國、被堅執銳、身受矢石、暴露千里之外、而出入萬死之途。藉天子之威、與將卒之力、終得奏其功。其渠帥安倍貞任・藤原經清等、皆伏誅戮、傳首京師。其餘醜虜、安倍宗任等束手歸降。掃其巢窟、收之縣官。叛逆之徒、皆爲王民。乃蒙錄功績、得守伊豫。

訓讀 七年春、頼義・義家、諸降虜を以て入朝し、奏して有功の將士を賞せんことを請ふ。朝議未だ許さず。故を以て未だ任に赴かず。任國登らず、私資を以て、貢賦を濟す。是くの如くすること二年、上書して重任を請ひて曰く、「臣聞く、人臣、勳功を建て、恩賞を受くるは、和漢古今同じき所なり。是を以て、或は徒隷より起りて金紫を係け、卒伍より出でて、將相に至る者有りと。頼義、功臣の裔を以て、恪勤の節を效すこと舊し。適々東夷蜂起し、郡縣を侵盜し、人民を抄略す。六郡の地、皇威に服せざること數十年なり。近歳に及んで、日に益々猖獗なり。頼義、永承六年を以て、任を彼の州に受く。天喜中に至つて、兼ねて鎮府に帥たり。臣、鳳凰の詔を喇み、以て虎狼の國に向ひ、堅を被り、鋭を執り、身、矢石を受け、千里の外に暴露して、萬死の途に出入す。天子の威と、將卒の力とに藉りて、終に其の功を奏するを得たり。其の渠帥安倍貞任、藤原經清等、皆誅戮に伏し、首を京師に傳ふ。其の餘の醜虜、安倍宗任等、手を束ねて歸降す。其の巢窟を掃ひ、之を縣官に收む。叛逆の徒皆王民と爲る。乃ち功績を錄するを蒙り、伊豫に守たるを得たり。

通釋 七年春、頼義、義家は、多くの降參した賊を引きつれて入朝し、手柄を立てた將士を褒賞せられむことをお願ひした。朝廷の意向では、それを許す所まで行かなかつた。故に頼義等は任地にも赴かずに居た。その中に、任地の伊豫では、穀物が熟さないで、米が取れなかつたので、已むを得ず、頼義は、私財を投じて年貢米の納入を濟ませた。こんなことを二年も續けたので堪まり兼ね、上書して伊豫守に重任したいとお願ひ申して曰ふには「私は斯ういふことを聞いて居ります、それは臣下が手柄を建てて、恩賞を受けるのは、日本でも支那でも、昔でも今でも同じことで變りはない。それでこそ、或る者は役夫奴僕のやうな賤しい身分から起つて、金印紫綬を

身につける程、出世したものもあり、兵卒の仲間から出て、大將宰相にまで登つたものもあつた譯であると。私は功臣經基の後胤で、隨分久しい間、王事につとめ、臣下としての節操を盡して來ました。たまたま東方の夷狄どもが群り起つて、郡縣を侵略し賊を働き人民から財を掠め取つたり致しました。それが此の節では、賊勢日に益々盛んとなつて參りましたが陛下の御威光に服從せざること數十年も續きました。それが爲め陸奥の六郡の土地た。私は、永承六年に、陸奥守に任ぜられました。天喜年間になりましては、鎮守府將軍も兼ねることに成りました。私は陛下の尊い詔の御趣意を承り、虎狼のやうな恐ろしい國に向ひ、堅い鎧を身につけ、よく切れる刀を手にし、敵の矢や石を身に受けて、千里もある遠方に身を曝し、命がけの場所に出たり入つたりしました。お蔭で、天子の御威光と、將士の盡力とによりまして、たうとう成功することが出來ました。賊の頭目の安倍貞任や、藤原經清などは、皆殺して終つて、その首は京都へ送りました。その外の夷の安倍宗任等は、手向ひもせず、歸順し降參して參りました。賊の根據地を掃ひのけ、之を朝廷の役人の手に渡しました。又叛逆した者等は皆今では天子の民となりました。そこで、朝廷では、私の功績を書き留められて、伊豫守として戴きました。

語釋 請二重任一（愚圖々々してゐる内に任期が滿ちたので再任を請うたのである。任期は四年のものである。）○金紫（宰相の佩び物。）○恪勤（職務を大切にすること。）○東夷（安倍氏をさす。）○永承・天喜（共に冷泉天皇の年號。）○鳳凰之詔（天子の詔。後趙の石季龍、樓上より木製の鳳凰の口に詔書を銜まぜて下せし故事より借りて來た。）○虎狼之國（暴秦に比して虎狼の字を用ひたのである。）

臣忝聖恩、欽荷不暇、而以鎮服餘燼、猶留奥地。且征戰之際、有功勞者十餘人、爲請抽賞、未得裁許。是以不敢赴任。況去歳九月、被賜任符、遲引之罪、出不獲已。四歳之

任、空過二稔、不レ能レ徵二納官物一。而封家納官、督責如雲。仍以私物、且償進濟。聞彼州吏言、頻年旱凶、田無二秋實、民有二菜色一。臣謹按二傍例、延二莅境之年限、以救一闔國之凋弊者、其人寔繁。況致二希世之功者、寧無二殊常之恩。昔班超以二三十年一平二西域。今賴義以十二歲誅二東夷。遲速優劣、採擇非レ難。饒無レ受二千戶之封、曷不レ許二重任之典。望請、天恩哀矜、臣意、忝賜二允可、使レ臣徐得レ處レ興復之計、以致辨濟之方。臣不レ任二懇款一。

訓讀 臣、聖恩を忝なうし、欽荷暇あらず。而して餘燼を鎭服するを以て猶ほ奥地に留まる。且つ征戰の際、功勞有る者十餘人、爲めに抽賞を請へども、未だ裁許を得ず。是を以て、敢て任に赴かず。況んや去歲九月、任符を賜はる。遲引の罪、已むを獲ざるに出づ。四歲の任、空しく二稔を過ぎ、官物を徵納する能はず。而して封家納官、督責雲の如し。仍つて私物を以て、且く進濟を償ふ。彼の州の吏の言を聞くに、頻年旱凶、田に秋實無く、民に菜色有りと。臣謹んで傍例を按ずるに、莅境の年限を述べ、以て闔國の凋弊を救ふ者、其の人寔に繁し。況んや希世の功を致す者、寧ぞ殊常の恩無からん。昔班超は三十年を以て西域を平ぐ。今賴義十二歲を以て東夷を誅す。遲速優劣、採擇難きに非ず。饒ひ千戶の封を受くること無きも、曷ぞ重任の典を許されざらんや。望請す。天恩もて臣の意を哀矜し、忝く允可を賜ひ、臣をして徐に興復の計を處し、以て辨濟の方を致すを得しめよ。臣、懇款に任へず」と。

通釋 私はそれ程厚い聖恩を忝うして、その御恩は背負ひ切れぬ位であります。けれども賊の殘黨を鎭め、服する爲めに、なほ陸奥の地に留まつて居りました。それに前日征伐致しました時、功勞のあつたものが十餘人もありまして、私は彼等の爲めに、特別に御褒美をお願ひ致しましたが、まだ御許しが出ません。その爲めに、まだ任地の伊豫にも行きかねて居ります次第であります。まして、去年の九月に、任地に行く割符を頂戴しましたのに、まだ行かずに居るとは、延引の罪、まことに已むを得ない次第で御座います。國守四年の任期が斯んなことで空しく二年も過ごして終ひまして、任地にゐない爲め租稅を人民から取り立てて朝廷へ納めることも出來ません。けれども封地を伊豫に有つて居る貴族の家や、收稅吏などが、多勢私の處へ集つて來て矢のやうな催促を致します。致し方なく、自分の私財を以て、立て替へ濟まして置きました。伊豫の役人の言ふところに因りますと、毎年旱で田に稻を植ゑても、秋實ることはなく、人民は飢ゑて、其の顏色はないさうです。私は、謹んで、外の例を調べて見ますのに、國守の任期を延ばして、其の國の衰微を救ふようにした例はまことに多いのであります。まして、私の如き、世に稀な手柄を立てた者には、普通と違つた御待遇があつても宜しいと思ひます。むかし、後漢の班超は、三十年もかかつて、西域を平げました。今私は十二年で以て、東夷を誅しました。何ちらが早くて何ちらが遲いか、又其の功は何ちらが優れ、何ちらが劣つてゐるか、擇び分けるのは、難かしいことではありますまい。たとひ班超と同じやうに千戶の封を頂戴しなくとも、國守の重任ぐらゐは、許されさうなものであります。何卒お願ひで御座いますが、陛下のお情けで私の意中を不憫と思召され、忝くも、御許可下され、私をしてゆるゆるその疲弊を引き戻す計らひの出來るように、又人民が私の立て替へを辨償

する方法を立てられるやうにして戴き度いのであります。右懇願の至りに堪へない次第で御座います」と。

語釋 欽荷（欽はつつしむこと。恭しく荷ふこと。）○抽賞（抜きんでて賞を與へる。）○二稔（二年。）○封家（封地を伊豫に持つてゐる者。その者が其の土地の納入物を頼義に催促したのである。）○栄色（飢えて青ざめ血の氣のないこと。）○莅境（莅は臨む。國境に臨む意で任地に在ること。）○救二凋弊一（國守が赴任すると人民は負擔多くて困るものである。だから愆々赴任の時期を延ばして一時を救つてやるのである。）○班超（後漢章帝の時より西域にあること三十年和帝の時召還され、食邑千戸。）○懇款（懇願。）

先是、諸降虜皆處流。義家愛宗任勇、特親信之。一夜問所私女子。乘車而往。獨宗任從。心陰圖報復、拔刀窺車中。見其睡不敢發。後遂傾心事之。義家嘗過藤原頼通第、談陸奥戰事。博士大江匡房在別室聞之曰、「好男子、惜未知兵法。」宗任微聞之慍、告義家。義家曰、「其或然。」見匡房出、禮之、遂就學焉。承暦三年、美濃亂。詔義家往定之。亂人聞之皆遁。延久三年、陸奥亂。守源頼俊討平之。頼俊者、頼親孫、頼義從姪也。

訓釋 是より先き、諸降虜皆流に處す。義家、宗任の勇を愛し、特に之を親信す。一夜、私する所の女子を問ふ。車に乘つて往く。獨り宗任のみ從ふ。心陰に報復を圖らんとし、刀を抜いて車中を窺ふ。其の睡れるを見て、敢て發せず。後遂に心を傾けて之に事ふ。義家嘗て藤原頼通の第に過ぎり陸奥の戰事を談ず。博士大江匡房別室に在つて、之を聞いて曰く、「好男子、惜しむらくは未だ兵法を知らず」と。宗任微に之を聞いて慍り、義家に告ぐ。義家曰く、「其れ或は然らん」と。匡房の出づるを見て、之を禮し、遂に就いて學ぶ。承暦三年、美濃亂る。

義家に詔して、往いて之を定めしむ。亂人之を聞いて皆遁る。延久三年、陸奥亂る。守の源頼俊討つて之を平ぐ。頼俊は、頼親の孫、頼義の從姪なり。

通釋 これより先き、諸降虜の降參した賊どもは皆遠國へ流刑に處した。義家は宗任の勇氣を愛して、彼れだけは特に信用して親しんでゐた。ある夜の事義家は言ひ交してある女の所を訪ねようとした。義家は車に乘つて往つた。此の時宗任だけがお供をしてゐた。宗任は心の内に、陰に父や兄の仇を取りたいと思つて、刀を抜いて車の中を覗いて見た。義家は氣持よくスヤ〳〵と居睡りをしてゐたので、（流石の宗任も、かく迄自分を信用して呉れてゐるのかと感激して、）刀を元の鞘へ收めた。其の後は一心になつて義家に事へた。義家は嘗て藤原頼通の屋敷を訪ねて、陸奥の實戰の話をした。その時博士の大江匡房が別室にゐて、其の話を聞いて「天晴れ立派な男だが、惜しいことには、まだ兵法を知らない」と曰つた。宗任が聞きつけて、むつと癪にさへ、義家に密告した。義家は曰ふのに「成る程それはさうかも知れん」と。匡房が出て來るのに會つて、丁寧に挨拶をなし、遂に弟子入りして、兵法を學んだ。白河天皇の承暦三年、美濃に亂が起つた。義家に詔して、往つて、之を平定せしめられた。亂を起した者共は八幡太郎が攻めて來ると聞いて皆逃げて終つた。その前、後三條天皇の延久三年に陸奥が亂れた。國守の源頼俊が討つて之を平定した。頼俊は頼親の孫で頼義の從姪に當る人である。

語釋 博士（儒家の號、廣く古今に渉り文章學問に通じて居る故に博士といふ。）○大江匡房（匡衡の曾孫、成衡の子、江帥と稱せられオ藝に秀れた人。）○延久（延久は承暦より前である。一説に轉寫の誤りといふ。）○從姪（從兄弟の子。）

永保二年、頼義卒。三年、詔義家爲陸奥守、兼鎮守府將軍。初清原武則有二子、曰武

貞・武衡。武貞生眞衡、又納藤原經清之寡婦、生家衡。亦養經清子清衡。而眞衡爲嫡嗣。家衡・清衡以下、皆臣事之。其姑夫吉彦秀武、以事怨眞衡、擧兵背之。眞衡赴攻之。秀武使人說家衡清衡、襲其虛。眞衡乃還救。已而聞義家至、迎饗之、復往攻秀武。二弟又來襲。義家從兵入其城、拒卻之。義家自赴出羽、攻家衡。不利還。武衡喜、來謂家衡曰、「子克八幡太郎。我曹之榮也。當與戮力。」遂合兵據金澤柵。義家大怒。

訓讀 永保二年、賴義卒す。三年、義家に詔して、陸奥守と爲し、鎭守府將軍を兼ねしむ。初め清原武則、二子有り、武貞・武衡と曰ふ。武貞、眞衡を生み、又藤原經清の寡婦を納れて、家衡を生む。亦經清の子清衡を養ふ。而して眞衡嫡嗣たり。家衡、清衡以下、皆之に臣事す。其の姑夫吉彦秀武、事を以て眞衡を怨み、兵を擧げて之に背く。眞衡赴いて之を攻む。秀武、人をして、家衡・清衡に說き、其の虛を襲はしむ。眞衡乃ち還り救ふ。已にして義家の至るを聞き、迎へて之を饗し、復た往いて秀武を攻む。二弟又來り襲ふ。義家、兵を從へて其の城に入り、拒いで之を卻く。義家出羽に赴き、家衡を攻む。利あらずして還る。武衡喜び、來つて家衡に謂つて曰く、「子は八幡太郎に克つ。我が曹の榮なり、當に與に力を戮はすべし」と。遂に兵を合はせて金澤柵に據る。義家大に怒る。

通釋 白河天皇の永保二年に賴義は死んだ。同三年には義家に詔して陸奥守となし、鎭守府將軍を兼ねさせた。初め清原武則に二人の子があつて、武貞・武衡といつた。その武貞が眞衡を生み、後又藤原經清の後家を妻に迎へて家衡を生んだ。それ計りでなく經清の子の清衡までも養つて子としてゐた。けれども眞衡は嗣子である。家衡清衡以下の者は皆臣下として眞衡に事へてゐた。眞衡の伯母の夫である吉彦秀武といふ者が、ある事の爲めに眞衡を怨んで兵を擧げて眞衡に背いた。眞衡は往いて之を攻めた。其の留守に秀武は人をやつて家衡と清衡とに說いて、其の不在につけ込んで不意打をさせた。そこで眞衡は引き還へして、その難を救つた。兎角する中に義家が陸奥守兼鎭守府將軍となつて來任したと聞き、出迎へて之を饗應し、再び往つて秀武を攻めた。その留守に例の家衡・清衡の二弟が又其の虛を襲擊した。義家は部下の兵を從へて眞衡の城に入り、防戰して之を退却させた。義家は自身で出羽に往いて家衡を攻めた。けれども、敗けて還つて來た。武衡は喜んで、家衡の所へやつて來ていふには「そなたは八幡太郎に克つた。それは實に我等仲間の榮譽と申すべきぢや。向後は拙者も與に力を戮はせて事に當るとしよう」と。とう〳〵兵士を合はせて金澤の柵に立て籠つた。義家は烈火の如く怒つた。

語釋 姑夫（をばのむこ。蓋し秀武の妻は武貞の姉妹である。）○以事怨眞衡（眞衡は子か無かつたので平安忠の子、成衡を養子にして、頼義の女を嫁に貰つた。その時丁度眞衡は客と共に夢中で、挨拶すらしなかつた。秀武はキチンと坐つてやゝ久しく待つてゐたが一向取り合はれぬので大に憤慨し、金を投じ、持つて來た酒饌を啖らつて直ちにそこを去り、出羽に歸り、兵を起して背いた。以事の以は「爲めに」といふ意。）○金澤柵（後羽）

寛治元年九月自將數萬騎攻之。去柵數里、望見雁行亂曰、「是有伏也。」縱兵搜索。果獲麾之。謂衆曰、「兵法言、鳥亂者伏也。我不學則殆矣。」遂進圍柵。相模人、鎌倉景政挑戰。敵射中其右目。景政不拔箭而索射己者、終射殺之。武衡據險死鬪、多傷我兵。

又使卒千任者詬言義家曰「汝父納名簿於我、以獲克敵。簿見在我。汝何以負我」義家怒攻之、未能下。

訓讀 寛治元年九月、自ら數萬騎に將として之を攻む。柵を去ること數里、雁行の亂るるを望見して曰く、「是れ伏あるなり」と。兵を縱つて搜索せしむ。果して獲て之を鏖にす。衆に謂つて曰く、「兵法に言ふ、鳥亂るる者は伏なりと。我れ學ばずんば則ち殆かりしならん」と。遂に進んで柵を圍む。相模の人鎌倉景政、戰を挑む。敵射て其の右目に中つ。景政箭を拔かずして、己を射たる者を索め、終に之を射殺す。武衡、險に據つて死鬪し、多く我が兵を傷つく。又卒千任なる者をして、義家を詬言せしめて曰く、「汝の父、名簿を我に納れ、以て敵に克つを獲たり。簿、見に我に在り。汝、何を以て我に負く」と。義家怒り、之を攻めて、未だ下す能はず。

通釋 堀河天皇の寛治元年の九月に義家は自ら數萬騎に將となつて金澤の柵を攻めた。柵を去ること數里の所まで來ると、遙か向ふに當つて並び飛んで行く雁の行列が遽かに亂れたのを望み見て、義家は曰ふのに「これは伏兵が居るのだ」と。兵を遣り搜し求めしめた。果して其の通りで伏兵を搜し出して之を皆殺しにした。その時義家は部下の軍勢に謂つて曰ふには「兵法に飛ぶ鳥の行列が急に亂れるのは、そこに伏兵があるからだと言つてある。自分が若し兵法を學ばなかつたら、實に危い所であつた」と。そこで義家は遂に進んで金澤の柵を取り圍んだ。相模の人で、鎌倉景政といふ者が敵に戰をしかけた。敵は矢を射て景政の右の目に中てた。景政は箭を拔かないで、そのままで自分を射た者を搜し求めて、とう〳〵その者を射殺して終つた。武衡は險阻な所に立て籠つて死者狂ひで鬪つて、源氏の兵を多く傷つけた。そればかりでなく兵卒の千任といふ者をして義家を罵り辱かしめていふには「お前の父の頼義は、以前安倍貞任を伐つ時、名前を書きつらねた帳簿を、わが父武則に差し出し、平身低頭、臣事して援けを得たので、それで貞任にやつと勝つことが出來たのである。その時の名簿は現在わが手許にあるぞ。お前は何故其の恩義を忘れて我に負くのか」と。義家は大に怒つて武衡を攻めたが、まだそれを攻め下すことは出來なかつた。

語釋 鎌倉景政（權五郎と稱し、姓は平氏、その時年十六であつた。）○射レ己者（鳥海彌三郎といふ者が景政を射たのである。）○千任（家衡の乳母の子、藤原氏。）○獲レ克レ敵（敵は安倍貞任である。前九年の役の時のことをいふ。）

義家ノ弟義光稱シ新羅三郎ト、亦勇智多シ技能。是ノ時、爲リ右兵衞尉ト、在リ京師ニ聞キ兄軍不ル利ナラ奏請フ赴キ援ケ。不レ許サレ。遂ニ舍テ官ヲ赴ク之ニ。義光素ヨリ好ミ音、嘗テ學ブ笙於豐原時元ニ。是ノ時、時元已ニ死シ、其ノ孤子時秋ニ送リ義光ニ。至ル足柄山ニ。會ニ月明ナリ。義光因テ吹キ笙、盡ク授ケ所ノ學ブ訣別ニ、遂ニ至ル陸奥ニ。義家喜ビ泣キ曰ク、「吾レ見ル汝ヲ、猶ホ見ルガ先君ノ也ニ。」乃チ與ニ俱ニ進ミ攻ム。柵固クシテ不レ拔ケ。義家因リ會食ニ、設ケ勇怯ノ兩列ニ、以テ勵マス戰士ニ。義光ノ從臣腰秀方、無シ日ヲ不レ列シ勇ニ也。

訓讀 義家の弟義光は新羅三郎と稱し、亦勇智にして技能多し。是の時、右兵衞尉となりて、京師に在り。兄の軍利あらずと聞き、奏して赴き援けんことを請ふ。許されず。遂に官を舍てて之に赴く。義光素より音を好み、嘗て笙を豐原時元に學ぶ。是の時、時元已に死し、其の孤子時秋、義光を送つて、足柄山に至る。會〻月明

なり。義光因つて笙を吹き、盡く學ぶ所を授けて訣別し、遂に陸奥に至る。義家喜び泣いて曰く、「吾れ汝を見る、猶ほ先君を見るがごとし」と。乃ち興に俱に進み攻む。柵固くして拔けず。義家會食に因り、勇怯の兩列を設け、以て戰士を勵ます。義光の從臣腰秀方、日として勇列に列せざるは無し。

通釋 義家の弟の義光は新羅三郎といつてゐたが、此の人も兄のやうに亦勇氣・智惠があつて、技藝・才能に富んでゐた。是の時右兵衛尉となつて、京都に居つた。兄義家の軍が形勢面白からずといふことを聞いたので、朝廷に申出でて、兄の所へ往つて援けさせて戴きたいとお願ひした。併し許されなかつた。そこでとう〳〵右兵衛尉の官を捨てて出掛けて行つた。此の義光といふ人は平素音樂が好きで、以前笙の笛を豐原時元に就いて學んだことがある。是の時には早や時元は死んで終つてゐたが、その孤子の時秋は、義光を見送つて足柄山まで來た。丁度月のよい夜であつた。そこで義光は笙を吹いて嘗て自分が時元から學んだ笙の祕曲を全部吹いて時秋に敎へ授けて永がの別れをなし、遂に陸奥に行き着いた。義家は弟の來たのを見て、喜び泣いていふに「自分はお前に會ふのは丁度亡くなられた御父上樣にお眼にかかるやうな氣持ちがする」と。そこで義家は弟と一緒に進んで敵を攻めた。けれども柵は中々堅固で陷らなかつた。義家は士氣を鼓舞する爲めに、部下の將士と會食する時を利用して、勇列・怯列の二列の席を設け、（勇士は勇列で食事させ、臆病者は怯列で食事させて）戰士を勵ました。義光の家來の腰秀方といふ者は一日として勇列に列しない日とてはなかつた。

語釋 新羅三郎（近江の新羅明神で元服したから新羅三郎といつた、三男坊である。）○右兵衛尉（車駕出入などの時に護衛したり等する役。）○笙（樂器にて笛の類。十三管よりなる。）○時秋送二義光一（時元歿した時、時秋はまだ幼なかつたので祕曲大食入調を傳授することが出來なかつた。そこで義光に皆授けてあつた。義光が出陣して戰歿したなら祕曲が絕える譯であるから、其祕曲を得んために、義光を送つて行つたのである。）○足柄山（相模。）○先君（類義を指す。父の死んだ後には先君とか、先考、先人などといふ。）○腰秀方（一に秀方は秀方に作る）

吉彥秀武降在我軍。進說「宜持久困之」。義家從之、下令休戰。武衡使人來言曰、「我軍苦無事。我有健兒龜次。請得一力人角之」。乃遣鬼武者、勝而殺之。虜愧憤出戰。已而虜食盡、出羸兵來降。秀武曰、「是紓糧也。宜斬」。義家又從之。虜益窘、因義光乞降。不聽。再乞、且請義光臨柵中爲要結。義光欲往。義家止之。乃使秀方往。虜露刃待之。秀方夷然。武衡賂之以金。秀方卻之曰、「我輩將旦暮分取之。不煩汝賂也」。撫刀而出。

訓讀 吉彥秀武、降つて我が軍に在り。進み說く、「宜しく久しきを持して之を困しむべし」と。義家之に從ひ、令を下して戰を休む。武衡、人をして來り言はしめて曰く、「我が軍、無事に苦しむ。我に健兒龜次有り。請ふ、一力人を得て之を角せしめん」と。乃ち鬼武者を遣はし、勝つて之を殺す。虜愧憤して出でて戰ふ。（已にして虜、食盡き羸兵を出だし來り降らしむ。秀武曰く、「是れ糧を紓むるなり。宜しく斬るべし」と。義家又之に從ふ。虜益〻窘しみ、義光に因つて降を乞ふ。聽さず。再び乞ひ、且つ義光に、柵中に臨んで、要結を爲さんことを請ふ。義光往かんと欲す。義家之を止む。乃ち秀方をして往かしむ。虜、刃を露はして之を待つ。秀方夷然たり。武衡之に賂ふに金を以てす。秀方之を卻けて曰く、「我が輩將に旦暮に之を分取せんとす。汝が賂を煩はさざるなり」と。刀を撫して出づ。

通釋　吉彦秀武（この度びの騒亂の發頭人）はこの時降參して我が義家の軍にゐた。彼は進み說いていふに、「戰をなさずに久しく取り圍んで、ヂッとしてゐて敵を兵糧攻めで困しめるのが第一だらうと思ひます。」と。義家は其の說に從ひ、命令を出して戰爭を休めさせた。敵將武衡は使を我が軍に遣はして言ふのに「近頃は戰爭もなく、することが無くて困つてゐる。我が軍に强者の龜次といふ者がゐる。どうぞあなたの方からも一人力のある者を出して貰らつて、一つ力くらべをさせて見たいものだ。」と。そこで源氏方から鬼武者といふ力士を遣はして相撲を取らせたが、鬼武者が勝つて龜次を殺して終つた。賊軍は負けたので愧ぢ憤つて柵より出で戰つた。その中に賊方は兵糧が無くなつて來たので、人減らしをする爲めに、弱い兵士どもを柵から出して降參させた。秀武はその策を見拔いていふに「これは敵の食糧が乏しくなつたから、それで食糧を食ひ延ばす計である。降參した者は皆斬つた方が宜いでせう」と。義家は又その說に從つた。賊軍は益〻窮迫し、義光に賴んで降參を申込んだ。許さなかつた。すると又再び降參を申し出で、其の上に義光に柵中へ來て戴いて降參の約束を取り定めたいと賴んで來た。義光は往かうと思つたが、義家がこれを止めた。そこで從臣の腰秀方をして代理として往かしめた。所が賊共は刀の鞘を拂うて拔身で秀方を待ち迎へた。秀方は平氣で恐れはしなかつた。敵將武衡は秀方に金を贈賄した。秀方は之をつき返へしていふには、「我が輩、近かい內に、之を分け取りにすることが出來るのである。今わざ〳〵汝が賄賂として贈つて呉れる手數を掛けなくとも宜いのぢや」と。秀方は刀の柄に手をかけ、（寄らば切つて捨てる勢を見せて、）靜かに柵を出でて本陣に還つた。

語釋　健兒（强健な者。コンテイと讀むと兵庫、國府等を守護する兵士の意となるがこゝはケンジと讀む。）○鬼武者（オニムシヤと讀んでゐる。一說に鬼武は名で鬼武ナル者と讀むべしと。）

時天漸寒、軍士恐凍。一夜義家出令軍中曰「燒我營取煖。今夜虜柵陷矣。不復用營也。」黎明、柵中火起、家衡遁。武衡潛池水中。義家獲之、誚曰「而父屬吾父樹功。吾父請授官爵。若以怨報德何也。名簿果安在。」因執千任、拔其舌、令斬武衡。武衡乞哀於義光。義光請曰「降者宜赦。」義家作色曰「悔過來歸、如宗任者、是之謂降耳。擒而求活者、非降也。」遂斬之。家衡爲其下所殺。義家欲獻武衡・家衡以下首、奏請下官符。廷議謂其私鬪也、弗許。以故不賞將士。遂棄首于途而還。

訓讀　時に天漸く寒く、軍士、凍を恐る。一夜、義家、令を軍中に出だして曰く、「我が營を燒いて煖を取れ。今夜、虜の柵陷らん。復營を用ひざるなり」と。黎明柵中に火起り、家衡遁る。武衡は池水の中に潛む。義家之を獲、誚めて曰く、「而が父、吾が父に屬して功を樹つ。吾が父、請うて官爵を授く。若、怨を以て德に報ゆるは何ぞや。名簿果して安くに在る」と。因つて千任を執へ、其の舌を拔き、武衡を斬らしむ。武衡、哀を義光に乞ふ。義光請うて曰く、「降る者は宜しく赦すべし」と。義家、色を作して曰く、「過を悔いて來り歸する、宗任の如き者は、是を之れ降と謂ふのみ。擒へられて活を求むる者は、降に非ざるなり」と。遂に之を斬る。家衡は其の下の殺す所となる。義家、武衡、家衡以下の首を獻ぜんと欲し、奏して官符を下されんことを請ふ。廷議其れを私鬪と謂ひて許さず。故を以て、將士を賞せず。遂に首を途に棄てて還る。

通釋 その頃はもう、時候が段々寒くなつて來て、兵士共は皆凍えることを心配しだした。或る夜義家は命令を軍中に出していふに、「我が陣屋を燒いてシッカリ暖まれよ。今夜の内に屹度賊の柵は陷るのだ。もう陣屋は要らぬことになつたのぢや」と。夜明け方になると賊の柵中から火事を出して、家衡は遁走した。武衡は池の中に首だけ出して隱れてゐた。義家は武衡を捕へて、責め詰つていふには「其の方の親父の武則は、吾が父上に附き從つて、手柄を立てた。吾が父上は、お上へお願ひ申して、お前の父に官位爵祿を授け、戴くやうに盡力された。それをお前は恩を仇で返へす仕打ちをなすとは何事ぢや。(吾が父上が、お前の親父に名簿を納れたといつたが)その名簿は果してどこにあるか」と。そこで千任を執へて、その舌を拔き、武衡を斬らせることになつた。武衡はお助けを義光にお願ひした。義光は義家に賴んでいふには「降參した者は、お許しになつたらいいでせう」と。義家は顏色を變へて怒つていふには「宗任のやうに、自分の過を後悔して降參歸服したのが、これが降參といふのである。つかまへられて、助けを求める者は、降參ではないのである。」と。遂に武衡を斬つた。家衡は彼の部下の爲めに殺されて終つた。義家は武衡、家衡以下の首を朝廷へ獻上しようと思つて、朝廷へ申上げて賊徒追討の割符を下し置かれんことをお願ひ申した。朝廷では相談の結果、これは命令を承けないで、勝手にやつた、個人的鬪爭であるといつて、其の願ひをお聽き入れにならなかつた。さういふ譯で、將士にも御褒美は出なかつた。義家は遂に武衡・家衡等の首を途中へ棄てて、京都に還つた。

語釋 今夜虜柵陷矣(其の時、毎晩雪が降つて、賊は逃げる機會がなかつたのである。所が此の夜は丁度雪のない夜だつたので、義家が屹度逃げるに違ひないと見定めたのである。) ○授官爵(鎭守府將軍に任ぜられたるをいふ。) ○爲其下所殺(曉奥人縣小次郎の爲めに殺さる。) ○官符(賊徒追討の御符。これさへあれば勅令で賊を討つたことになり、御褒美が戴ける。)

義家承父祖ノ業ニ善撫將士。其征陸奥ニ前者九年、後者三年。東國ノ士民、皆服其恩信、相與共請留其子弟、擁戴之而自呼其家人、稱義家曰八幡公。當是時、八幡公ノ威名徧於朝野。白河法皇嘗患夢魘、詔義家、獻其兵器、鎭之。義家獻一玄弓、建御枕ノ上。卽無患。法皇問曰、「毋乃東征所執乎。」對曰、「臣不記也。」法皇嗟賞之。然義家官位甚卑、以正四位下右衞門尉卒。於天仁元年。年六十八。

訓讀 義家、父祖の業を承け、善く將士を撫す。其の陸奥を征すること、前なる者は九年、後なる者は三年。東國の士民、皆其の恩信に服し、相與に共に請うて、其の子弟を留め、之を擁戴して、自ら其の家人と呼び、義家を稱して八幡公と曰ふ。是の時に當り、八幡公の威名、朝野に徧し。白河法皇、嘗て夢魘を患へ、義家に詔して、其の兵器を獻じ之を鎭めしむ。義家、一玄弓を獻じて、御枕の上に建つ。卽ち患無し。法皇問うて曰く、「乃ち東征に執る所なる毋からん乎」と。對へて曰く、「臣記せざるなり」と。法皇之を嗟賞す。然れども義家、官位甚だ卑く、正四位下右衞門尉を以て、天仁元年に卒す。年六十八。

通釋 義家はよく、父祖以來の業を承け繼いで辱かしめず、又善く將士を愛撫した。彼は陸奥を征伐すること前後二度、前の安倍氏の時には九年、後の清原氏の時には三年もかかつた。東國地方の武士や人民は皆彼の惠み深いのと、信義に厚いのに心服し、義家が京へ還へるにつき、相共にお願ひして、彼の一族の子弟の者に留まつ

て貰ひ、これを守り立て戴き、自分等はその家人なりと名乗り、義家を稱して八幡公と呼んでゐた。この時に當り八幡公の武威名聲は朝廷より田舍に至るまで響き渡つてゐた。白河法皇が嘗て夢に襲はれ給ひ、御難益であつたので、義家に詔して、彼の所持する所の武器を獻上してその邪氣を拂ひ鎭めさせられた。そこで義家は黑塗りの弓一と張りを獻上して、法皇の御枕のあたりに立てた。早速其れからは夢に襲はれ給ふことは無くなつた。法皇は義家に問ひ給うて仰せらるるに「東國を征伐なせし時に、其の方手づから執り持つてゐたものではないか」と。義家對へて曰ふに「私はよく覺えて居りませぬ」と。(少しも誇る氣色もない)法皇いたく感心して賞め給うた。けれども義家の官位は甚だ低く、正四位下右衞門尉で鳥羽天皇の天仁元年に歿した。其の時、年六十八であつた。

語釋 夢魘(夢に襲はれること。)

有六子、義宗・義親・義國・義忠・義時・義隆。義忠最有名。官至檢非違使。季父義光嫉之、誘義忠臣鹿島某、使陰殺之。初義忠叔父義綱、與義家相惡、構兵。詔禁兩家兵入京師、事得寢。後義綱以陸奥守、擊平亂人平師妙于出羽、以功拜從四位上。其黨頗廣。至此朝議以義忠死爲出於義綱子義明、遣兵殺之。義綱據甲賀山。詔源爲義討之。義綱自髡降、流佐渡。義光子孫、世居甲斐、稱甲斐源氏。

訓讀 六子あり、義宗、義親、義國、義忠、義時、義隆。義忠最も名あり。官、檢非違使に至る。季父義光之を嫉み、義忠の臣鹿島某を誘うて、陰に之を殺さしむ。初め義忠の叔父義綱、義家と相惡み、兵を構ふ。詔して兩家の兵京師に入るを禁じ、事寢むを得たり。後義綱、陸奥守を以て、擊つて亂人平師妙を出羽に平げ、功を以て、從四位上に拜せらる。其の黨、頗る廣し。此に至つて朝議義忠の死を以て、義綱の子義明に出づると爲し、兵を遣はして之を殺さしむ。義綱甲賀山に據る。源爲義に詔して之を討たしむ。義綱自ら髡して降り、佐渡に流さる。義光の子孫、世々甲斐に居り、甲斐源氏と稱す。

通釋 義家には六人の子があつて義宗・義親・義國・義忠・義時・義隆といつた。そのうち義忠が、最も名高かつた。其の役は檢非違使にまで爲つた。季父の義光は、之をねたんで、義忠の家來鹿島某なるものを誘惑して、こつそり義忠を殺させた。はじめ、義忠の叔父義綱は、義家と兄弟、仲が惡く、兵を結んで戰爭しようとした。詔して、兩家の兵士が京都に入ることを禁じたので、大したことにもならずに濟んだ。その後義綱は、陸奥守となり、謀叛人平師妙を出羽で擊ち平げ、その手柄で、從四位上に叙せられた。その一味の者は頗る廣くに渡つてゐた。そこで、朝廷では、義忠が死んだのは、義綱の子義明の細工であるとなし、兵を遣はして、義明を殺させた。すると、義綱は近江の甲賀山に立て籠つて叛いた。源爲義に詔して、之を討たしめた。義綱は自分で坊主になつて降參して佐渡に流された。義光の子孫は代々甲斐に居て、甲斐源氏と稱してゐた。

語釋 季父(父の末の弟。)○鹿島某(三郎吉連。)○甲賀山(近江。)

爲義者、義親子也。義親爲對馬守、以罪被誅。爲義幼孤。義家奇之、欲以爲義忠之嗣。

甲賀之捷、拜左兵衞尉。時年十四。其明年、義家卒。爲義遂直承義家之後。居五歲、南都僧兵攻叡山。又命爲義。爲義與十七騎、逆擊于栗子山、走之。後十餘歲、累遷爲檢非違使左衞門大尉、叙從五位下。

訓讀 爲義は義親の子なり。義親、對馬守と爲り、罪を以て誅せらる。爲義、幼にして孤なり。義家之を奇とし以て義忠の嗣となさんと欲す。甲賀の捷に左兵衞尉に拜せらる。時に年十四なり。其の明年、義家卒す。爲義遂に直に義家の後を承く。居ること五歲、南都の僧兵叡山を攻む。又爲義に命ず。爲義、十七騎と、栗子山に逆へ擊ち、之を走らす。後十餘歲、累遷して檢非違使左衞門大尉と爲り、從五位下に叙せらる。

通釋 爲義は、義家の第二子義親の子である。義親は對馬守となつたが、家を嗣げないのを怒つて、亂を起し、その罪で誅せられた。それがため爲義は、幼くて、孤兒となつたのである。義家は、珍らしい兒だと思ひ、彼を義忠の跡目としようと思つた。こんどの甲賀山の勝ちいくさで左兵衞尉に拜せられた。その時、年齡十四歲であつた。其の翌年義家は死んだ。爲義は遂に孫で以て直ぐその跡目を相續した。それから五年たつて後、奈良の僧兵が、比叡山の僧と爭ひ之を攻め立てた。又爲義に命じて、之を防がせた。爲義は、十七騎を引きつれて、之を栗子山に迎へ擊つて、追つぱらつて終つた。その後、十餘年間に、役が段々進んで、檢非違使左衞門大尉となり、從五位下に叙せられた。

註釋 栗子山（山城、宇治の南。）

爲義有二十三子。長曰義朝。尤善戰。居相模鎌倉、關東家人盡附之。爲下野守。第八子曰爲朝。猿臂善射。幼凌犯諸兄。爲義患之、逐之豐後。曰鎭西八郎。自稱九國總追捕使、以妻父阿曾忠國爲鄕導、數與菊池・原田諸大姓戰、比十五歲、遂盡伏九國。九國守介交訴之。朝廷敕太宰府討之、不能克。爲義坐免官。爲朝聞而病之、與須藤家季等二十八人、俱至京師待罪。

訓讀 爲義二十三子有り。長を義朝と曰ふ。尤も善く戰ふ。相模の鎌倉に居り、關東の家人、盡く之に附く。下野守と爲る。第八子を爲朝と曰ふ。猿臂善く射る。幼にして諸兄を凌犯す。爲義之を患ひ、之を豐後に逐ふ。鎭西八郎と曰ふ。自ら九國總追捕使と稱し、妻の父阿曾忠國を以て鄕導と爲し、數〻菊池・原田の諸大姓と戰ひ、十五歲の比、遂に盡く九國を伏す。九國の守介、交〻之を訴ふ。朝廷、太宰府に勅して之を討たしむれども克つこと能はず。爲義坐して官を免ぜらる。爲朝聞いて之を病ひ、須藤家季等二十八人と俱に京師に至りて、罪を待つ。

通釋 この爲義には二十三人の子があつた。長男は義朝といつた。中でも尤も戰ひが上手であつた。相模の鎌倉に居つて、關東の家の子どもは皆之に附いてゐた。下野守となつた。又第八番目の子は爲朝といつた。臂が人並以上長くて、弓を射ることが上手であつた。幼少の頃から既に、兄さん達を侮り犯してゐた。親の爲義は之を

氣に病み、遂に爲朝を九州の豐後へ逐ひ拂つた。それから鎭西八郎と名乘つた。九州の總追捕使と勝手に自稱して、妻の父の阿曾忠國を道案内となし、度々菊池とか原田とかいふ九州の諸々の豪族と戰ひ、十五歲の頃には、とうゝ九州全部を征服して終つた。九州の國守や介が互に訴へ出た。朝廷では太宰府に詔して之を討たしめられたが、中々强くて克つことは出來なかつた。それが爲めに親の爲義は卷きぞへを喰つて、官を免ぜられた。爲朝は自分の爲めに親が迷惑したといふことを聞き、大に之を心配して、須藤家季等二十八人と一緒に、都へ行き、自首して御成敗を待つことになつた。

語釋 二十三子（義朝、義賢、義廣、頼賢、頼仲、爲宗、爲成、爲朝、爲仲、行家、爲家、頼定、正親、維義、義俊、經家、義成、僧仙覺、僧頼憲、乙若、鶴若、鶴若、天王。）○猿臂（猿のやうに腕の長いこと。腕が長いから弓を射るには便利である。）○鎭西八郎（鎭西は九州のこと。昔鎭西府が置かれてあつたから八郎といふ。八男であるから八郎といふ。）○九國總追捕使（追捕使といふ役は以前にあつたが總追捕使といふのは自分で勝手に作つた官名で、この時始めて出て來た名である。九國は九州のこと。）○阿曾忠國（阿曾三郎といふ。）○菊池（菊池隆直で、肥後にゐた。）○原田（原田種臣で、筑前にゐた。）○大姓（豪族、大家。）○太宰府（筑前三笠郡に在り、九州と三島の總鎭。太宰府が制定されて多くの職員を置かれたのは、文武天皇からである。）○須藤家季（須藤九郎）

是歲、近衞帝崩。帝爲鳥羽法皇寵姬得子所生。夙受禪于崇德上皇。及帝崩、上皇願復位。法皇與得子議、立帝兄卽位。是爲後白河帝。帝之保元元年、法皇有疾。召得子、授之一筐、戒曰「緩急啓之」。七月、法皇崩。上皇起兵據白河殿。左大臣藤原頼長爲謀主焉。四募兵京畿大擾。得子乃啓筐、則書武臣十人名矣。義朝爲之首。卽召義朝義朝乃率兵與族頼政等俱衞高松殿。頼政者頼光五世孫也。安藝守平清盛亦應召入衞。

訓讀 是の歲、近衞帝崩ず。帝は鳥羽法皇の寵姬得子の生む所たり。夙に禪を崇德上皇に受く。帝崩ずるに及び、上皇、復位を願ふ。法皇、得子と議し、帝の兄を立てて位に卽かしむ。是を後白河帝と爲す。帝の保元元年、法皇疾有り。得子を召して、之に一筐を授け、戒めて曰く「緩急あらば之を啓け」と。七月、法皇崩ず。上皇、兵を起し白河殿に據る。左大臣藤原頼長、謀主たり。四もに兵を募り、京畿大に擾る。得子乃ち筐を啓けば、則ち武臣十人の名を書せり。義朝之が首たり。卽ち義朝を召す。義朝乃ち兵を率ゐ、族頼政等と俱に高松殿を衞る。頼政は、頼光五世の孫なり。安藝守平清盛も、亦召に應じて入り衞る。

通釋 是の年卽ち久壽二年に、近衞天皇がおかくれになつた、帝は鳥羽法皇の御寵愛の深かつた宮女の得子がお產みなされたお方である。早く御三歲の時から天子の御位を崇德上皇からお禪り受けになつてゐられたのである。愈々帝がおなくなりになつたので、崇德上皇は、もう一度天子の御位に卽きたいといふ御希望であつた。所が鳥羽法皇は得子と御相談なされて、帝の御兄君の雅仁親王を立てて天子の御位にお卽かせなされた。このお方が御白河天皇と申し上げた。後白河天皇の保元元年に鳥羽法皇は御病氣に罹らせられた。そこで得子をお呼び寄せになつて、一個の箱をお授けになり、戒めて仰せらるるには、「一旦、急なことが起つた場合には、此の箱をひらいて見よ」と。同年七月に法皇は終に崩御なされた。彼は四方から兵士を募集して、其れが爲めに京畿地方は一體、大左大臣の藤原頼長が、黑幕の主謀者であつた。

に騒ぎ立てた。そこで得子は、此の時とばかり法王から戴いた箱を開いて見ると、中に武臣十人の名前が書きつらねてあつた。義朝の名が一番初めに書かれてあつた。で早速義朝を呼び寄せた。そこで義朝は兵を率ゐて、一族の頼政等と一緒に皇居の高松殿を護衛した。頼政は頼光の五代目の孫である。安藝守の平清盛もお召に應じて皇居に入りて護衛をした。

語釋 是歳（爲朝が京都で罪を待つた歳で、即ち久壽二年である。その翌年が保元元年となる。）○得子（美福門院藤原氏、中納言長實の女。）○夙受ㇾ禪（夙は早く、お禪りを受けられたは御三歳の時、崩御は御十七歳。）○帝兄（雅仁親王、崇德上皇の同母弟に當らせられる。鳥羽天皇の第四子。）○白河殿（白河院ともいひ、白河法皇の仙洞御所である。山城國愛宕郡二條通り北に在り。）○藤原頼長（宇治左大臣といひ、又惡左府ともいふ、忠實の二子で忠通の弟。）○武臣十人（下野守源義朝、兵庫頭源頼政、式部丞源重成、檢非違使源義康、源光信、源季實、平維繁、平實俊、平資經、平信兼。）○高松殿（此の時の皇居となつてゐた御殿。もと高明親王の邸宅、後數傳して鳥羽天皇改め造立せられて御所とし給うた。近衛天皇もここで崩御なされ、後白河天皇はここで踏祚し給うた。京都姉小路の北、西洞院の東。）○頼光五世孫（頼光…頼國…仲政…頼綱…頼政。）

於ㇾ是上皇使ㇾ使者召ㇾ爲ㇾ義。爲ㇾ義辭曰「臣老羸、非ㇾ復平昔。長子義朝勇而有ㇾ衆。而既赴ㇾ禁内ㇾ矣。餘子獨爲朝可ㇾ用。君請用ㇾ之。毋ㇾ以ㇾ臣爲ㇾ也。且臣夢ㇾ家所ㇾ傳八甲、爲ㇾ風所ㇾ漂。臣心惡ㇾ之。往必不ㇾ利也」。使者强ㇾ之。爲ㇾ義不ㇾ得ㇾ已、率ㇾ諸子ㇾ赴ㇾ之。上皇喜、以爲ㇾ判官代、賜ㇾ邑及寶劍、以ㇾ四子頼賢爲ㇾ藏人、因會議ㇾ戰。

訓讀 是に於て、上皇、使者をして爲義を召さしむ。爲義辭して曰く、「臣は老羸復平昔に非ず。長子義朝、勇にして衆有り。而れども既に禁内に赴けり。餘子は獨り爲朝のみ用ふ可し。君請ふ、之を用ひよ。臣を以て爲すこと勿れ。且つ臣、家に傳ふる所の八甲、風の漂はす所となると夢む。臣、心に之を惡む。往くも必ず利あらざらん」と。使者之を强ふ。爲義已むを得ず、諸子を率ゐて之に赴く。上皇喜び、以て判官代と爲し、邑及び寶劍を賜ひ、四子頼賢を以て藏人と爲し、因つて會して戰を議す。

通釋 そこで崇德上皇の方でも、使ひの者をお出しになつて、源爲義をお呼び寄せになつた。爲義は御辭退していふには「私ははやおいぼれ弱り込み、迚も以前のやうでは御座りませぬ。長男の義朝は、勇氣があり、部下の軍勢も澤山つれて居りまして、いい大將であります。併しこれは既に皇居の高松殿の方へ行つて終ひました。其の外の倅共ではただ爲朝だけがお役に立ちませう。君願はくは爲朝をお用ひあれよ。私などを目あてになされまするな。それに私は、私の家に先祖代々傳はつてゐる八領の鎧が、風に吹かれてヒーラ〳〵と漂はされた夢を見ました。まことに變な夢で私は心に厭なことに思つて居りまする。そんな譯で夢見も惡いし、しますから私が參りましても勝ち目は御座りませぬ」と。使者はそれでも强つてと勸めた。已むを得ず爲義は諸〻の子を伴れて白河殿の上皇の所へ赴いた崇德上皇は大層お悦びになつて、早速爲義を院の判官代といふ役に任ぜられ、土地と寶劍とを下し置かれ、第四番目の子の頼賢を藏人となされ、そこで皆集つて戰爭の相談を致した。

語釋 使者（參議藤原教長が使者であつた。）○八甲（薄金、膝丸、無福、慈姑、八姑、八月數、日數、源太産衣。）○諸子（頼賢、頼仲、爲宗、爲成、爲朝、爲仲の六人。）○寶劍（其の名、鵜の丸といふ。）○藏人（クラウドとよむ。又クランドともいふ。主として奏聞を掌る。其の外殿上の仕事を大概皆掌る侍臣である。嵯峨天皇の時に始めて置かれた。）

爲朝進而言曰「臣大戰二十、小戰二百、以ㇾ芟ㇾ鋤九國。以ㇾ少擊ㇾ衆、毎利夜攻。臣請今夜

襲高松殿、火其三方、而要之一面。其善戰者、獨有臣兄義朝。然臣一矢斃之。至如平清盛輩、臣鎧袖一觸、皆自倒耳。則乘輿必不得不出。臣乃加矢其從兵、從輿於此。而奉陛下於彼、易如反掌。則東方未白、大事集矣。」賴長曰、「爲朝年少負氣、所言皆鄙人私鬪之事、安可施之帝王之戰耶。兩帝爭國、當用堂堂之陣。南都僧兵應召且至。成軍以戰未爲晚也。」爲朝退竊罵曰、「唉、長袖者、惡知兵哉。家兄有謀、將出我所欲爲。僧兵寧可須也。」

訓讀 爲朝進んで言つて曰く、「臣は大戰二十、小戰二百、以て九國を芟鋤せり。少を以て衆を擊つは、毎に夜攻を利とす。臣請ふ、今夜高松殿を襲ひ、其の三方を火いて、之を一面に要せん。其の善く戰ふ者は、獨り臣の兄義朝有るのみ。然れども臣一矢にて之を斃さん。平清盛の輩の如きに至つては、臣の鎧袖一たび觸るれば、皆自ら倒れんのみ。則ち乘輿必ず出でざるを得ず。臣乃ち矢を其の從兵に加へ、輿を此に從し、而して陛下を彼に奉ずる、易きこと掌を反すが如し。則ち東方未だ白けざるに大事集らん」と。賴長曰く、「爲朝年少にして氣を負ひ、言ふ所は皆鄙人私鬪の事、安んぞ之を帝王の戰に施す可けんや。兩帝、國を爭ふ、當に堂々の陣を用ふべし。南都の僧兵、召に應じて且に至らんとす。軍を成し以て戰ふも、未だ晩しと爲さざるなり」と。爲朝退き、竊に罵つて曰く、「唉、長袖の者、惡んぞ兵を知らんや。家兄謀有り、將に我が爲さんと欲する所に出でんとす。僧兵寧に須つ可けんや」と。

通釋 そこで爲朝が乘り出していふには「私は大きな戰爭なら二十回、小さい戰爭なら二百回もやつて、九州の地を根こそぎ平定致したのです。その經驗からいふと、少數の兵で、大敵を擊つのにはいつでも夜攻めが一番有利なのであります。どうか、お願ひ致しますが、今夜高松殿を夜襲にかけ、其の三方口に火をつけて燒き、殘る一方口に敵の出て來るのを待ち伏せ致したいのであります。お許し願ひ度いものです。敵中で戰ひの上手なのは、どうせただ私の兄貴の義朝だけです。けれどもこれは私が一本の矢で斃して御覽に入れます。平清盛等の如うな者共に至つては、私の鎧の袖が一度觸れただけで、皆自然にわけなく倒れて終ひます。さうなれば天子樣はヂッとしてゐられなくなり、自然外へお出ましにならざるを得ないでせう。その時私はそのお供の兵士共を、矢を放つて射殺し、そして天子樣をばこちらの白河殿へお徙し申し、陛下をば、向ふの高松殿の方へお移し奉る、これは譯なく出來ること、そのた易いことは丁度掌を反へすがやうなものです。そのやうにすれば、東の空がまだ明けない內に、屹度大事が成就致すことでせう」と。賴長はそれを聞いていふには「爲朝はまだ若年で、無暗に血氣に逸やり、そしてその言ふ所のことは皆田舍者の私喧嘩の時に用に立つことで、どうしてく帝王と帝王との戰に施すべき戰術ではないのである。兩帝が國を爭はれるのであるから、そんな夜襲抔と卑怯なことをせず、正々堂々と立派な陣立てをなすべきである。それに今都合のよいことに、奈良の僧兵ども が上皇のお召に應じてすぐにこちらへ來る筈になつてゐる。それが來た上で軍隊の手分けを定め、而して戰爭を始めたつて、決して遲くはないのである」と。爲朝は自分の說が用ひられないので、其の席から退いて、竊に罵

つていふには「ア、ア、長袖に戰爭が分つて堪るものかい。家の兄貴は謀略に富んでゐるから、屹度私がやらうと思つた夜攻めで、やつて來るだらう。今の場合になつて僧兵なんか待つてゐられるかい。」と惡聲を放つた。

語釋 鎧袖一觸皆自倒耳（鎧の袖がさわれば、皆ひとりでに倒れて終ふ、卽なり。矣は將來の斷定の場合に用ひられる字だから、屹度といふ意味が含まれてゐる。）○兩帝（後白河、崇德兩帝。）○唉（歎息の聲。）○長袖者（堂上の公卿方は皆長い袖の禮服を着けてゐるので、それを輕蔑して長袖といつたのである。）○大事（崇德上皇が御位に復歸せられるといふ一大事。）○集矣（ナランと讀む。集は成就する）

餘論 至レ如ニ平清盛輩一、臣鎧袖一觸皆自倒耳。とあるのは、保元物語では「まして清盛などがへろへろ矢、何程のことか候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して捨てなん。」となつてゐる。これは事實を改めたのである。美濃の長瀨寬二の日本外史便蒙に曰く「余嘗て或書を見しことあり、曰く、外史の鎧袖一觸云々は原文を誤譯せりと。嗚呼思はざるの甚だしきなり、固と外史は盛衰記や太平記の直譯と云ふ者にあらず」と。

爲義又進レ策曰、「本宮垣溝單淺、無ニ地可レ據。以寡兵一保レ此、非計也。陛下宜幸ニ南都一、撤ニ宇治橋一以守。卽不レ利幸ニ于關東一。臣糾ニ合家人一、奉レ輿復レ闕。臣籌之不レ難。」賴長弗レ聽。爲義退而言曰、「吾不レ知ニ死所一矣。」與ニ其六子賴賢・賴仲・爲宗・爲成・爲朝・爲仲一分ニ八甲一擐之、送ニ一於義朝一。爲朝軀幹大、不レ可レ服。乃服ニ他甲一、獨以ニ二十八人一守ニ西門一。餘子盡從ニ父以百騎一守ニ南西門一。平忠政等諸將、以ニ兵數百一分守ニ諸門一。

訓釋 爲義、又策を進めて曰く、「本宮は垣溝單淺、地の據る可き無し。寡兵を以て此を保つは、計に非ざるなり。陛下宜しく南都に幸し、宇治橋を撤し以て守るべし。卽し利あらずんば、關東に幸したまへ。臣、家人を糾合し、輿を奉じて闕に復せん。臣之を籌るに難からず。」と。賴長聽かず。爲義退いて言つて曰く、「吾れ死所を知らず」と。其の六子賴賢・賴仲・爲宗・爲成・爲朝・爲仲と、八甲を分ちて之を擐し、一を義朝に送る。爲朝・軀幹大にして服す可からず。乃ち他甲を服し、獨り二十八人を以て西門を守る。餘子は盡く父に從ひ、百騎を以て南西の門を守る。平忠政等の諸將は、兵數百を以て、分れて諸門を守る。

通釋 爲義はそこで又一策を進めていふに「當白河殿は垣は一重、溝は淺く、どう考へても根據地となすべき場所も御座りませぬ。僅かな兵士でこの備への惡い所を守ることは得策ではありません。ここのところは、陛下は奈良へ御幸遊ばし、京都と奈良の間にある宇治橋の橋板を剝がして敵を拒ぎ守るに越したことはないと思ひます。もしそれでもうまく行かなかつた場合には、關東へ御幸したまへ。私は私の家の子郎黨どもを寄せ集め、お乘物を奉じて御所へ（元々通りにお還へりになるやうに致します。私は之を計つて見るのにさほど困難なことでもありません」と。ところが賴長はこの意見も取り上げなかつた。爲義は其處を退出して「（もう斯うなつたら敗軍に決まつた。）私は何處で死んで終ふか分かつたものでない」といつた。其の六人の倅の賴賢・賴仲・爲宗・爲成・爲朝・爲仲と、先祖傳來の八領の鎧を一着づつ分けて着ることにし、殘りの一着を義朝の方へ送つてやつた。爲朝は身體が非常に大きかつたので着ることが出來ない。そこで他の鎧を着け、部下二十八人をつれて、獨り西門の守備をした。他の子供等は殘らず父爲義に附いて百騎の兵を引きつれ、南西の門を守つた。平忠政等の諸將は兵數百人を引きつれ、別に分れて其の外の諸門を守つた。

語釋 關東（源氏に由緒深き土地にて族黨が多くゐた。）○擐（ツラヌクとよんでも宜し鎧をきること。）○軀幹大（體格の偉大なこと、爲朝身の丈七尺有餘とある。）

義朝在禁內。關白藤原忠通以下、聚議不決。義朝數趣之。有詔、召義朝於階下、問計。對曰、「取勝一舉、莫若夜攻。臣聞、南都兵千餘、應上皇徵、已次宇治矣。宜及其未至擊之。」從之。詔「戰勝聽昇殿。」義朝對曰、「武臣赴戰、不期生還。臣請拜賜而死。」攝衣而昇。藤原通憲奏曰、「彼之曾祖・祖父嘗聽昇殿。而父則未也。以子先父、若何。」詔曰、「勿問。」義朝感喜、還營、繫鞭車傍、曰、「我卽戰死、誰知我得昇殿。此識之也。」乃以選兵四百襲白河殿。平清盛亦赴之。兵凡數千人。

訓讀 義朝、禁內に在り。關白藤原忠通以下、聚り議すれども決せず。義朝數之を趣がす。詔有り、義朝を階下に召して、計を問ふ。對へて曰く、「勝を一舉に取るは、夜攻に若くは莫し。臣聞く、南都の兵千餘、上皇の徵に應じ、已に宇治に次すと。宜しく其の未だ至らざるに及んで之を擊つべし」と。之に從ふ。詔す、戰勝たば昇殿を聽さん」と。義朝對へて曰く、「武臣戰に赴くに、生還を期せず。臣請ふ、賜を拜して死せん」と。衣を攝げて昇る。藤原通憲奏して曰く、「彼の曾祖・祖父、嘗て昇殿を聽さる。而して父は則ち未だし。子を以て父に先だつは若何」と。詔して曰く、「問ふこと勿れ」と。義朝感喜し、營に還るとき、鞭を車傍に繫けて曰く、「我れ卽し戰死せば、誰か我が昇殿を得たるを知らん。此れ之を識るすなり」と。乃ち選兵四百を以て、白河殿を襲ふ。平清盛も亦之に赴く。兵凡そ數千人。

通釋 義朝は宮中にゐた。關白の藤原忠通以下のもの共、大勢聚り戰爭の評定をしたが、一向纏まらない。義朝は早く何んとか方寸を決めて頂きたいと度々催促をした。すると詔があつて、義朝を御殿の階下にお呼び出しになり、戰の計略をお尋ねになつた。そこで義朝は對へて申すに「一度に勝利を得るのには、夜討に越したものは御座いません。何んでも、南都の僧兵千餘人が、上皇樣のお召しに應じ、早や宇治まで來て、そこに宿つてゐるといふことを聞いて居りまする。（これが攻め寄するときは、一寸厄介で御座りまするによつて）其の僧兵共がまだこちらへ來ない內に、白河殿を擊つた方が宜いと思ひまする」と。朝廷では早速義朝の議に從はれた。又詔があつて、「こんどの戰に勝つたなら、其の方の昇殿を聽し遣はすぞ」との御沙汰であつた。義朝はこの恩命に對へて、「武臣が戰場へ參りまするには、生きて還らうなどと、露程もあてにはして居りませぬ。何卒この有り難い賜を、唯今直ぐに頂戴して、心殘りなく存分に立ち働き、討死仕り度う御座います」と。いふより早く、著物の裾をかかげて御殿に昇つた。その時藤原通憲が申上ぐるには「彼の曾祖父の賴義も、祖父の義家も、以前昇殿を聽されたことがありました。彼の父の爲義は、まだその儀に及びませぬ。子が親に先だつて昇殿するといふことは、如何なことに御座りませうか」と。詔して仰せらるるには、「構はぬ捨て置け〳〵」と。この有難きお言葉に義朝は感激して喜び、自分の陣營に歸るとき、鞭を車寄に掛けていふに「自分が若し討死したら、今日昇殿を聽されたことが、誰にも分らずに終ふだらう。だから鞭を掛けて置いて、證據を殘して置くのである」と。そこで義朝は選び拔いた兵四百人を引きつれて、白河殿を襲うた。平清盛も亦やつて來て一緒に白河殿を攻め

た。後白河方の兵は合計數千人と註せられた。

語釋 擊之（之は白河殿を指していふ。）○藤原通憲（少納言信西のこと。）○曾祖・祖父（曾祖は頼義。祖父は義家。爲義の實父義親は亂を起して誅せられ、爲義は實の祖父義家の後を嗣いだ。それで義朝からすれば實は曾祖父義家が祖父となり、高祖父頼義が曾祖父となるのである。）○輦車傍（車傍は車寄、昇殿を聽された人々は皆この車寄から、入つて行く。この時義朝は車には乘らぬがそこへ鞭をかけて置いて、自分もここから入つて昇殿し得る身分ちやといふ記るしにしたのである。）○兵凡數千人（義朝、清盛等の兵を合せて都合數千人といふこと。凡そはスベテといふ義。保元物語には都合一千七百餘騎とそ註したるとある。）

上皇、諜者還報。爲朝哂曰、「固當然爾。頼長恐爲朝不爲用、遽拜爲藏人。爲朝曰、「吾何用藏人爲。吾鎮西八郎可矣。」辭不拜。將戰。諸子爭先不決。爲朝曰、「臨戰何論兄弟。」然吾嚮以不遜獲罪。故欲先而不敢。唯敵勁難當處、輙命於我。」頼賢・頼仲邀擊義朝、敗退。義朝隨攻之。

訓讀 上皇の諜者還り報ず。爲朝哂つて曰く、「固より當に然るべきのみ」と。頼長、爲朝の用を爲さざるを恐れ、遽に拜して藏人と爲す。爲朝曰く、「吾れ何ぞ藏人を用ふるをなさん。吾は鎮西八郎にて可なり」と。辭して拜せず。將に戰はんとす。諸子先を爭うて決せず。爲朝曰く、「戰に臨んでは、何ぞ兄弟を論ぜん。然れども吾れ嚮きに不遜を以て罪を獲たり。故に先んぜんと欲すれども敢てせず。唯だ、敵勁くして當り難き處は、輙ち我に命ぜよ」と。頼賢・頼仲、義朝を邀へ擊つて、敗れ退く。義朝隨つて之を攻む。

通譯 崇德上皇の方で、窃かに遣つて置いた間諜が還つて來て、高松殿の方の樣子を逐一報告した。爲朝はそれを聞いてそれ見ろと言はぬ計りに微笑していふに「勿論のこと、さうあるべき筈さ」と。頼長は爲朝が自分の意見の用ひられないことを怨み、働らかないやうなことでもあつてはならぬと心配して、急に爲朝を藏人に任命した。爲朝は曰ふに「今更藏人にして頂いたつて、何んの役にも立ちはしない。私は鎮西八郎で澤山だ」と。藏人の役を辭退して、拜命しなかつた。さて合戰が愈々始まらうとした。爲義の子等が、先頭を爭つて、容易に決定しない。そこで爲朝がいふには「イザ戰爭といふ場合になつて、兄弟の順序抔爭つてゐる時ではありません。（今の場合、弟が兄の先きになつたつて構ひません）だが自分は以前、諸々の兄樣方を犯し凌いだ爲め罪を獲て九州に遣られました。だから自分は先鋒になりたいのは山々だが、ここの所は遠慮して控へることとします。が唯だ敵が強くて手に終へなかつたら、いつでも私に命けて貰ひたいものです」と。頼賢、頼仲等は義朝の軍を待ち受けて擊ち、敗れ退いた。義朝はそれにつけこんで之を攻め立てた。

語釋 不遜（不遜は謙遜ならざること。）

平清盛攻西門。其將伊藤景綱、與二子伊藤五・伊藤六先進。爲朝射之、洞五之胸、而著六之袖。清盛慴懼而退。獨其騎山田伊行返戰。爲朝又射斃之。馬逸入義朝陣鏃穿鞍、大如巨鑿。部將鎌田政家取而獻之曰、「八郎君所爲也。」義朝曰、「彼弱齡、未當至此。詐設以怖敵耳。汝嘗試之。」政家自呼而進。爲朝曰、「爾非吾家人乎。」對曰、「昔爲主君、

今爲兇徒。」射中其胄。爲朝大怒、與二十八騎、闖門突出。政家、辟易退走。

訓讀 平清盛、西門を攻む。其の將伊藤景綱、二子伊藤五、伊藤六と先んじ進む。爲朝之を射て、五の胸を洞し、而して六の袖に著く。清盛慴懼して退く。獨り其騎山田伊行返り戰ふ。爲朝又射て之を斃す。馬逸して義朝の陣に入る。鏃、鞍を穿ち、大さ巨鑿の如し。部將鎌田政家、取つて之を獻じて曰く、「八郎君の爲す所なり」と。義朝曰く、「彼は弱齡、未だ嘗に此に至るべからず。詐り設け以て敵を怖すのみ。汝之を嘗試みよ」と。政家自ら呼んで進む。爲朝曰く「爾は吾が家人に非ずや」と。對へて曰く、「昔は主君たり、今は兇徒たり」と。射て其の胄に中つ。爲朝大に怒り、二十八騎と、門を闖いて突出す。政家、辟易して退き走る。

通釋 平清盛は西門を攻めた。清盛の將の伊藤景綱は、二人の子伊藤五、伊藤六と、先きを爭うて進んで行つた。爲朝は之を射て、兄の五郎の胸板を射通して、勢餘り、弟の六郎の袖に突きたつた。清盛は其の勢の烈しいのに驚き、縮み上がつて退却した。ただ彼の部下の騎兵の山田伊行といふ者は、健氣にも引き返して戰つた。爲朝は又之を射斃して終つた。伊行の乘つてゐた馬が逃げ出して、義朝の陣へ馳け込んだ。見ると鏃が馬の鞍に射ち込んでゐたが、その鏃の大きさは大鑿のやうであつた。義朝の一方の隊將鎌田政家は、その鏃を取つて義朝に獻じていふには「これは八郎樣のお用ひ遊ばしたものに御座りまする」と。義朝は之を信用しないで「あれはまだ弱輩である。（こんな大きなものは用ひられる筈はない。）これは詐つて、こんなものを作り、相手の度膽を拔かうといふに過ぎない。お前一つ彼の腕前を試して御覽」といつた。そこで政家は自ら大音聲に名乘りをあげて、進んで行つた。爲朝は之を見ていふに、「其の方は我家の家來ではないか」と。政家は對へて曰ふのに

「成る程お前樣は昔は、私の御主君でしたが、併し今は賊徒ですから攻め擊つのであります」と。射て爲朝の胄へ中てた。爲朝は烈火のやうに怒り、二十八騎の部下のものと一緒に、門を押し開いて、突き進んだ。政家はこの勢に恐れをなして退き逃げた。

語釋 伊藤五（五は五郎の意、名は忠清といふ。）○伊藤六（名は忠直。）○著二六之袖一（保元物語には、餘る矢が伊藤五か身向けの袖に、裏返してぞ立つたりける、とある。）○弱齡（年の若いこと。この時十八の歲。）

義朝以二一百騎一馳之、呼曰、「吾奉二宣旨一來。汝盍趣降。乃彎弓於其兄乎。」爲朝曰、「判官公受二院宣一、令二爲朝等拒戰一。且彎弓於其兄、孰與推刃於其父。」因大戰。義朝立馬莊嚴院門。爲朝望見之、注箭。既而舍之曰、「父在此、兄在彼。焉知其不有所潛約、勝敗互相救護哉。」乃注二鳴鏑一顧謂家季曰、「吾且褫其魄。」家季曰、「得毋誤乎。」爲朝曰、「第觀吾所爲。」乃射穿胄臍、貫門扇。義朝大驚、乃呼曰、「八郎射未爲精。」爲朝曰、「不敢爲焉耳。」卽被許、甲之鬲、胄之題、唯阿兄所命。」乃注大箭。深巢清國進蔽義朝、應弦而倒。

訓讀 義朝、二百騎を以て之に馳せ、呼んで曰く、「吾れ、宣旨を奉じて來る。汝盍ぞ趣に降らざる。乃ち弓を其の兄に彎くか」と。爲朝曰く、「判官公、院宣を受け、爲朝等をして拒き戰はしむ。且つ弓を其の兄に彎くは、刃を其の父に推すに孰與れぞ」と。因つて大に戰ふ。義朝、馬を莊嚴院の門に立つ。爲朝之を望見して箭を注す。

既にして之を舍てて曰く、「父此に在り、兄彼に在り。焉んぞ其の潛に約する所有りて、勝敗互に相救護せざるを知らんや」と。乃ち鳴鏑を注し、顧みて家季に謂つて曰く、「吾れ、且に其の魄を褫はんとす」と。家季曰く、「誤る毋きを得んや」と。爲朝曰く、「第吾が爲す所を觀よ」と。乃ち射て胃脾を穿ち、門扇を貫く。義朝大に驚き、乃ち呼んで曰く、「八郎の射未だ精と爲さず」と。爲朝曰く、「敢て爲さざるのみ。卽し許さるれば、甲の冑、胃の題、唯だ阿兄の命ずる所のまま」と。乃ち大箭を注す。深巢清國進んで義朝を蔽ひ、弦に應じて倒る。

通釋 そこで義朝は二百騎の兵を引き連れて驅けつけ、呼ばはつていふのに、「自分は天子樣の勅旨を受けて來てゐるのだ。お前は何故早く降參しないのか。そればかりか却つて弓を兄に彎かうといふのか」と。爲朝は對へていふに「父上判官公は上皇樣の勅旨を受けて、私等をして敵を拒ぎ戰はしめられてゐるのです。(それに今兄上は弓を兄に彎くといつてお咎めですが、あなたは父上に及向つてゐらつしやる)。兄に弓を彎くのと、父に向つて及をかざすのと、どちらの罪が重いのですか」と。そこで大に合戰した。義朝は莊嚴院の門の所に馬をツッ立て采配を振つてゐた。爲朝が遙かに之を望み見て、箭を弓に注がへて射らうとした。その內にその箭を投げ捨て「いふのに「待てよ、お父上は此方にお在でになり、兄上は彼方にゐられる。今は敵味方と分れて居るけれども、これは父上と兄上との間に、內密な約束が出來てゐて、何れが勝つても貧けても、互ひに助け保護し合ふといふことになつてゐるのかも知れない」と。そこで爲朝は鳴鏑を弓に注がへ、振りかへり家季に謂つていふには「兄貴の膽玉を潰してやらうと思ふんだ」と。家季がいふのに「萬一仕損じなさるやうなことは無いでせうか」と。爲朝は曰ふに「大丈夫だから、お前は但だ、そこで私のやるのを見物して居れよ」と。そこでヒョウと矢を射て

義朝の兜の八幡座を射通し、其の餘力で矢は莊嚴院の門の扉を突き通した。義朝は大いに驚いたが、やがて大聲を出していふには「八郎の弓はまだ精妙とは申されぬぞ」と。爲朝が曰ふのに「ナアニ爲ようとしないまでです。もしお許しが出るなら、鎧の胸板だらうが、兜の額だらうが、唯だお兄さんの御所望通りに射あてて御覽に入れますぞ」と。そこで大きな矢を注がへた。深巢清國といふ者が進み出て義朝を蔽ひ庇つて、爲朝の弦音がしたと思つたらもう倒れてゐた。

語釋 乃彎弓(乃は却つて。)　○判官公(爲義をさす。判官代(家季。一郎)　○阿兄(兄を親しんでいふ時に阿の字をつける。)　○莊嚴院(寺の名。)　○鳴鏑(ナリカブラといつて、鏑に小さな孔(アナ)があつて、矢が飛ぶとき空氣が其の孔に入り、ビュウと音して行く。)　○家季(須藤家季。)

義朝、兵、死傷最衆。爲朝亦喪二十三騎、猶固守。爲義賴賢等又善拒。天漸明。義朝、馳使、奏請用火攻。聽之。乃縱火上風。煙焰蔽宮、宮中大亂。義朝等鼓譟終陷之。上皇出奔、入如意山、爲義以下悉從之。上皇親諭散遣之。皆揮泣而散。

訓讀 義朝の兵、死傷最も衆し。爲朝も亦二十三騎を喪ひ、猶ほ固く守る。爲義賴賢等又善く拒ぐ。天漸く明く。義朝、使を馳せ、奏して火攻を用ひんと請ふ。之を聽す。乃ち火を上風に縱つ。煙焰宮を蔽ひ、宮中大に亂る。義朝鼓譟して、終に之を陷る。上皇出奔し、如意山に入り、爲義以下悉く之に從ふ。上皇親ら諭して之を散遣せしめらる。皆泣を揮つて散ず。

通釋 義朝の兵に死傷者が最も多かつた。爲朝も亦二十三騎を失つたが、それでもなほ堅固に守つた。爲義、

賴賢等もまた善く敵を拒いだ。その内に夜は次第に白々と明け初めた。その時義朝は使者を立て、君に奏上して火攻めを致したいとお願ひ申した。之をお許しになつた。そこで火を風上にかけた。見る〳〵火は擴がり、煙、焔は白河殿に蔽ひかぶさつたので、御殿の中は大混亂を來した。義朝等は、すかさず太鼓を叩き喊聲を揚げて攻め寄せ、とう〳〵白河殿を陷れた。崇德上皇は奔り出で給ひ、如意山に隱れ込まれ、爲義以下の者も悉くお供をした。上皇は御自身お諭しになつて、皆の者に暇を下され、銘々思ふままに去らしめられた。皆の者は何れも淚をふるつて、散らばり去つた。

語釋 如意山（京都東山にあり。）

爲義將遁東國。病不能行。抵蓑浦。追兵來薄。諸子力戰卻之。士卒垂盡。乃削髮、欲因義朝請降。爲朝諫曰、「上皇者、帝同母兄。而左府爲關白親弟。聞上皇已遷讃岐、左府亦死。骨肉之不可恃如此。大人盍鑒焉。不若赴東國、倚其豪族。官軍卽來、兒爲竭力。力盡而後死、不亦可乎。」不聽。遂出降。

訓讀 爲義將に東國に遁れんとす。病んで行く能はず。蓑浦に抵る。追兵來り薄る。諸子力戰して之を卻け、士卒盡くるに垂んとす。乃ち髮を削り、義朝に因つて降を請はんと欲す。爲朝諫めて曰く、「上皇は帝の同母兄たり。而して左府は、關白の親弟たり。聞く、上皇、已に讃岐に遷されたまひ、左府も亦死せりと。骨肉の恃む可からざること此くの如し。大人盍ぞ鑒みざる。東國に赴いて、其の豪族に倚るに若かず。官軍卽し來らば、兒爲めに力を竭さん。力盡きて後に死す、亦可ならずや」と。聽かず。遂に出でて降る。

通釋 爲義は關東には義故のものが澤山ゐるので、そこへ遁れようとした。途中病に罹り、歩行することが出來なくなつた。それでもやつと近江の蓑浦といふ所まで來た。追手の兵が來り迫つた。多勢の子息等は懸命に戰つて、追兵を卻けたが、手下の士卒は大抵討死して殘り少くなつて終つた。そこで爲義は髮を剃つて坊主になり、それで義朝に賴つて降參をお願ひしようと思つた。爲朝は諫めていふに「上皇は今上の御同腹の兄君に渡らせられます。左大臣賴長公は、關白忠通公と親身の御兄弟であります。然るに聞く所によると、上皇は早や既に讃岐に島流しにされ給ひ、賴長公も亦戰死されたといふことです。兄弟親身も賴みにならぬことは、このやうであります。御父上には何故篤と御勘考なさりませぬぞ。それよりは、これから關東へ行つて、其處の勢力家に賴つた方が餘ッ程利です。官軍が、もし後から攻めて來たら、私が御父上の爲めに、有らん限りの力を出して立ち働きませう。それで、どうにも出來ず、力盡き果てて、討死しましたとて、本望ではありませんか」と。けれども爲義はこの意見を聽き入れない。とう〳〵出でて降參した。

語釋 蓑浦（近江國天野川の別名。）○削髮（爲義剃髮して法名を義法房と附けた。）○帝同母兄（帝は後白河天皇、上皇と帝とは待賢門院藤原璋子がお生みになつた。）○大人（子は親を稱して大人といふ。母を呼ぶ場合でも大人といふ。）

初、清盛奉勅索爲義不得。會平忠政出降。其叔父也。素與有隙。則斬而獻之。以搖義

朝。有詔、令義朝斬爲義。義朝數請以己戰功贖其命。帝怒曰「清盛能誅叔父。義朝獨不能誅父乎。果不能將命清盛斬之」。義朝憂懼、不知所出。謀之鎌田政家。政家對曰「此非臣所敢議也。然既爲國讐矣。竟不免於誅。與其死於人、寧死於子」。義朝意決、使政家誘殺之、自奉其首詣闕。

訓讀 初め清盛、敕を奉じて爲朝を索むれども得ず。會〻平忠政出で降る。其の叔父なり。素より與に隙有り。則ち斬つて之を獻じ、以て義朝を搖かす。詔有り、義朝をして爲義を斬らしむ。義朝、數〻己が戰功を以て其の命を贖はんと請ふ。帝怒つて曰く、「清盛能く叔父を誅す。義朝獨り父を誅する能はざるか。果して能はずんば、將に清盛に命じて之を斬らしめんとす」と。義朝憂懼し、出づる所を知らず。之を鎌田政家に謀る。政家對へて曰く、「此れ臣の敢て議する所に非ざるなり。然れども既に國讐たり。竟に誅を免かれず。其の人に死せんよりは、寧ろ子に死せんか」と。義朝意決し、政家をして誘つて之を殺さしめ、自ら其の首を奉じて闕に詣る。

通釋 はじめ、清盛は、詔を受けて爲義をさがしたが見つからなかつたのである。其の時平忠政が出て來て降參した。忠政は、清盛の叔父である。併し平素から清盛とは仲が惡かつた。清盛はそんな譯で忠政を斬つて其の首を獻上し、義朝の心を動かし、義朝に爲義を斬らせる樣に仕向けた。案の定、詔があつて、義朝に命じて、爲義を斬らせることとなつた。義朝は、度々自分の樹てた功で父爲義の命を贖ひ度いとお願ひ申した。すると、後白河天皇は怒つて仰せられるには「清盛は能く叔父を誅した。義朝だけが父を殺せないといふのか。出來

ないといふなら、清盛に言ひつけて、之を斬らせよう」と。義朝は心配し恐れて、どうして宜いか處置に當惑した。そこで之を家來の鎌田政家に相談した。政家は對へていふのに「こんな事は、私が彼れ是れ申し上げる所ではありません。しかし何んと申すも爲義公は、朝敵となられたのであります。結局誅戮を免れない所で御座いませう。他人の手で殺さるよりか、一層の事に子の手で死なれた方が宜いやうに思ひます」と。義朝は決心して政家をして、爲義をおびき出して殺させ、自分で其の首を持つて御所へ罷り出た。

賴賢以下五人皆伏誅。猶有四弟、曰乙若・龜若・鶴若・天王。皆幼。義朝以詔、遣人殺之。鶴若謂使者曰「抗鬪者當死。吾儕何同科。恐女謬聞」。龜若曰「家兄誤矣。使吾輩存在、多於數百士卒也」。乙若諭諸弟曰「汝輩勿復言。下野守既忍於父矣。何有於弟哉。是無他。陷清盛計中、自鍛其羽翼耳。事已至此。生猶蒙辱、不若速死以從父於地下也」。駢首受刃。

訓讀 賴賢以下五人皆誅に伏す。猶ほ四弟あり、曰く乙若、龜若、鶴若、天王と。皆幼なり。義朝詔を以て人を遣はし之を殺さしむ。鶴若使者に謂つて曰く、「抗鬪する者は死に當らん。吾が輩をして存在せしめば、數百の士卒よりも多からん」と。龜若曰く、「家兄誤れり。吾が輩、何ぞ科を同じうせん。恐らくは女謬り聞くならん」と。乙若、諸弟を諭して曰く、「汝が輩復言ふこと勿れ。下野守既に父に忍べり。何ぞ弟に有らんや。是れ他な

し。清盛の計中に陷り、自ら其の羽翼を鍛するのみ。事已に此に至る。生くるも猶ほ辱を蒙る、速に死して以て父に地下に從ふに若かざるなり」と。首を刎べて刃を受く。

通釋 爲義の諸子は、賴賢以下、五人共、皆誅せられた。此の外に義朝には四人の弟があつて、乙若、龜若、鶴若、天王といつた。皆また幼かつた。義朝はこれも勅命で人を遣つて殺させた。鶴若はその使者に向つて曰ふには「朝命に反抗して戰つたものは勿論死罪に相當する。併し吾等は、何にもした譯ではないし、どうして反抗した者と罪を同じくしようぞ。そなたは何か聞き間違ひでもして來たのではないか」と。龜若が曰ふには「兄上の義朝殿が間違つてゐるのだ。自分等を生かして置けば、何んと云つても兄弟であるから、それこそ數百人の士卒よりも助けになるんだが」と。乙若は弟等を諭して曰ふには「お前達はもう何も云ふな。下野守殿義朝は父上をさへ殺されたのである。弟など、何とも思つてゐられないのだ。これも外ではない。清盛の計略にかかつて、自分の羽翼となる兄弟を自分でそいで殺すのである。萬事こういふ風になつて終つたのである。生きて居たとても辱を蒙るのである。それよりも、一層のこと早く死んで、地下の亡き父上の處へ行つた方がましだ。」と。兄弟四人、首をならべて殺された。

爲朝匿于輪田、將奔鎭西。聞平氏、將平家貞要之也、不果。適有疾、浴於民家。或視其身材、魁偉、告之於官。官遣兵圍之。爲朝裸體、抉柱、擊殺數人、而就縛、至闕庭。特減死一等、拔其臂筋、流于大島。爲朝筋力雖減、用箭加長。曰、「天子賜我大島」。遂幷有傍五島。舊臣稍稍來附。後數年、赦狩野介攻之。爲朝射沒其一艦、而自逃入琉球云。

訓讀 爲朝輪田に匿れ、將に鎭西に奔らんとす。平氏の將平家貞之を要すと聞きて、果さず。適〻疾有り、民家に浴す。或ひと其の身材の魁偉なるを視て、之を官に告ぐ。官、兵を遣はして之を圍む。爲朝、裸體にて柱を抉し、數人を擊殺して縛に就き、闕庭に至る。特に死一等を減じ、其の臂筋を拔き、大島に流す。爲朝筋力減ずと雖も、箭を用ふる、長きを加ふ。曰く、「天子我に大島を賜ふ」と。遂に傍の五島を幷有す。舊臣稍稍來り附く。後數年、狩野介に敕して之を攻めしむ。爲朝射て其の一艦を沒して、自ら逃れて琉球に入ると云ふ。

通釋 爲朝は近江の輪田といふ所に隱れて、隙を見て九州へ出奔しようとしてゐた。所が平氏の大將平家貞が道を遮ぎり、待ち伏せしてゐると聞いて、行くことを果さず。(そのまゝ隱れてゐた)。折惡しく病氣に罹り、百姓家で湯に入つてゐた。所が或る者が彼の身體骨骼の衆にすぐれて偉大なのを視て、これは爲朝であるかも知れないと怪しんでお上へ訴へに及んだ。お上ではソレ逃がすなと、早速兵を遣はして、その百姓家を取り圍んだ。爲朝は素ッ裸で柱を引きぬき、これを振り廻して數人の官兵を擊ち殺したが、結局縛られて御所の廣庭に引かれた。元來死罪申付くる所であつたが、特に死一等を減じて、彼の腕の筋を拔き、伊豆の大島へ流された。爲朝は筋を拔かれて弓を引く力こそ減つたけれども、箭は前より長いのを使ふことが出來るやうになつた。彼はいふのに「天子樣は己れに大島を下されたのである」と。とうゝ彼は近傍の五つの島を自分の手に入れた。舊臣ども、之を聞いて、段々やつて來て、部下となつた。其の後數年して、狩野介茂光に詔して、爲朝を攻めさせられた。爲朝は射て、其の軍艦一隻を沈沒せしめ、自分は逃げて琉球に入つたといふことである。

語釋 輪田（近江。）○大島（伊豆半島の南方に位す。）○用レ箭加レ長（初めは腕の筋力にて弓を引いたのが、こんどは肩の筋を使ふやうになつたので延びが增した譯である。腕の筋を取り去ると、臂の所の關節は屈曲しなくなり、右手全體が眞直ぐに延びた樣になるものである。もと關節を曲げて引いたのが、こんどは曲げずに眞直ぐに引くから延びる譯である。）○五島（大島、三宅島、八丈島、美計島、澳島。）○狩野介（工藤茂光。大島の領主である。爲朝に奪はれたので、上へ訴へて、勅を奉じて討つたのである。この時高倉天皇の嘉應二年であつた。）○入二琉球一云（鎮西八郎爲朝なりと傳へ言つてゐる。琉球王舜天は姓源、尊敦と號し、父は時高倉天皇の嘉應二年であつた。）

義朝之捷也、賞爲二右馬權頭一。義朝奏曰「是先臣滿仲所レ拜。然彼左、此右、且曰レ權焉。臣未知其榮也。」於是、陞爲二左馬頭一。而資望終不レ及二平氏一也。平氏素與二少納言藤原通憲一善。通憲以二帝乳母子、貴幸用レ事。義朝欲以女爲二其婦一。通憲鄙二義朝一、卻之曰「我子學生、子女非偶也。」乃與清盛婚。帝既禪位於二條帝一、而猶聽レ政。嬖人藤原信頼與通憲惡。則寖引二義朝一自援、說以甘言。義朝深結之。

訓讀 義朝の捷つや、賞して右馬權頭と爲す。義朝奏して曰く、「是れ先臣滿仲の拜する所。然れども彼は左、此は右、且つ權と曰ふ。臣未だ其の榮たるを知らざるなり」と。是に於て、陞せて左馬頭と爲す。而れども資望終に平氏に及ばず。平氏素より少納言藤原通憲と善し。通憲は帝の乳母の子なるを以て、貴幸せられて事を用ふ。義朝、女を以て其の婦と爲さんと欲す。通憲、義朝を鄙しみ、之を卻けて曰く、「我が子は學生、子の女は偶に非ざるなり」と。乃ち清盛と婚す。帝既に位を二條帝に禪り、而して猶ほ政を聽く。嬖人藤原信頼、通憲と惡し、則ち寖く義朝を引いて自ら援け、說くに甘言を以てす。義朝深く之に結ぶ。

通釋 義朝が崇德上皇方に打ち勝つたので、朝廷では、其の功を賞して、右馬權頭となした。義朝奏上して曰ふには「これは先祖の滿仲が拜命した官職で御座います。しかし、滿仲のは左で、私のは右、而も權と云ふ字が附いて居ります。私はあまり名譽とも思ひませぬ次第です」と。そこで、更に進めて、左馬頭となした。しかしその門地聲望は到底平家には及ばなかつた。平家はもともと少納言藤原通憲と仲が善かつた。通憲は、後白河天皇の乳母の子であつたので大層可愛がられ、官位も貴く、政事を切り盛りしてゐた。義朝は自分の娘を通憲の息子の嫁にやらうと思つた。通憲は、義朝を賤しんで之を拒絕して曰ふには「自分の倅は學生であるから、君の娘ではとても釣り合はない」と。さう曰つた口の下から清盛の娘を貰つて婚姻を通じた。後白河天皇はすでに位を二條天皇に禪られたが、依然として政治を聽かれて居た。その御氣に入りの藤原信頼は、通憲と仲が惡かつた。そんな譯でいつとはなく、義朝を自分の方へ引き込んで援となし、甘い言葉で說きつけてゐた。義朝は深く信頼と結托した。

語釋 右馬權頭（右馬頭の次官。）

平治元年十二月、清盛如二熊野一。信頼乃謂二義朝一曰「通憲恃レ寵自專、陰與清盛一謀レ剪二除子家一。彼之專横、雖二上皇一亦厭レ之矣。吾欲レ發レ事誅二夷讒人一。子何不二相助一。」義朝曰「吾建二殊功一、而不レ能レ贖二父命一。親屬摧頽。清盛欲レ乘二此時一、以陷擠我。我非不レ知レ之。公有二此舉一、敢不レ效レ力。」信頼大喜、贈以二鎧仗名馬一。義朝又敎之招二頼政一。於是、義朝以二五百騎一、夜圍二三條

殿、焚之、又焚通憲第、所殺傷甚衆。通憲遁逃。追獲斬之。信頼挾帝及上皇據大内。

訓讀 平治元年十二月、清盛、熊野に如く。信頼乃ち義朝に謂つて曰く、「通憲、寵を恃んで自ら專にし、陰に清盛と子の家を剪除せんと謀る。彼の專横は、上皇と雖も、亦之を厭ふ。吾れ、事を發して讒人を誅夷せんと欲す。子何ぞ相助けざる」と。義朝曰く、「吾れ殊功を建てたれども、而も父の命を贖ふ能はず。親屬摧頽す。清盛此の時に乘じ、以て我を陷擠せんと欲す。我れ、之を知らざるに非ず。公此の擧有り、敢て力を致さざらんや」と。信頼大に喜び、贈るに鎧仗名馬を以てす。義朝、又之をして頼政を招かしむ。是に於て、義朝五百騎を以て、夜、三條殿を圍んで之を焚き、又通憲の第を焚いて、殺傷する所甚衆し。通憲遁逃す、追ひ獲て之を斬る。信頼帝及び上皇を挾んで大内に據る。

通釋 二條天皇の平治元年十二月。清盛は熊野神社に參詣に出かけた。そこで信頼は時機至れりと思ひ、義朝に謂つていふには「通憲は上皇の御寵愛をいいことにして、勝手な振舞ばかり致し、内々清盛と相談して、君の家を滅ぼし除かうと企んでゐる。彼れ通憲の專横なのには、いかな上皇様でもお厭ひになつてゐる。今は丁度よい時機だから、事を起して通憲の如き、人を讒言する者共を、誅戮しようと思ふ。君、一はだ脱いで貰ひ度いものだ」と。義朝は、一議に及ばず、請け合つて言ふには「私は保元の亂の時に、勝れた手柄を建てたのであるが、それでゐて、親の生命を贖ひ助けることも出來なかつた。又親族の者共も衰へ滅んで、我が一門は全く酷い目に遭遇してゐる。清盛は此の機會に附け込んで、我を陷れ、おし除けようと思つてゐるのである。私だつてその事は知らないでは無かつたのである。所が今度貴殿が愈々旗上げをなされることになつたが、もつけの幸ひ、どうして貴殿の爲めに力を盡さないで置かれませうぞ。」と。信頼はこの返事を得て大に喜び、甲冑や兵器、それから名馬迄も義朝に贈つた。義朝は又信頼をして頼政を招かしめた。そこで義朝は五百騎を引きつれ、夜皇居を取り圍んで火をかけ、又一方通憲の屋敷へも火をかけ、隨分多く殺したり、傷つけたりした。通憲は驚いて遁げ出した。追手の者が追つかけ捕へて斬り殺して終つた。信頼は二條帝と後白河上皇とを、抱へ込んで御所に立て籠つた。

語釋 上皇（後白河上皇。）○招頼政（頼政の外に、源光基、源季實等も招いた。）○三條殿（皇居。）

義朝、第三子曰頼朝。稱鬼武者。時年十三、爲右兵衛佐。進謂義朝曰、「聞清盛等將還。盍逆擊。乃坐待之乎。」頼朝長兄義平在鎌倉。嘗與其叔父義賢有隙、戰于大藏、斬之。人呼曰惡源太。於是聞變、晨夜馳至。信頼欲授之以官。義平辭曰、「嚮叔父八郎辭藏人不拜。知緩急也。吾亦姑用惡源太之號可矣。如聞、平氏將還。願假吾一隊兵。吾要之阿部野、梟清盛以下首、然後拜命耳。」信頼弗聽。

訓讀 義朝の第三子を頼朝と曰ふ。鬼武者と稱す。時に年十三、右兵佐たり。進んで義朝に謂つて曰く、「聞く清盛等將に還らんとすと。盍ぞ逆へ擊たざる。乃ち坐ながら之を待つか」と。頼朝の長兄義平、鎌倉に在り。嘗て其の叔父義賢と隙有り、大藏に戰ひて之を斬る。人呼んで惡源太と曰ふ。是に於て、變を聞き、晨夜馳せ至

る。信頼之に授くるに官を以てせんと欲す。義平辭して曰く、「嚮きに叔父八郎藏人を辭して拜せず。緩急を知れるなり。吾も亦姑く惡源太の號を用ひて可なり。聞くが如くんば、平氏將に還らんとすと。願はくば吾に一隊の兵を假せ。吾れ之を阿部野に要し、清盛以下の首を梟して、然る後に命を拜せんのみ」と。信頼聽かず。

通釋 義朝の第三男は頼朝といつた。鬼武者と稱してゐた。この時年僅かに十三歳であつたが、右兵佐といふ官に就いてゐた。この頼朝が進み出て、親の義朝に向つていふには「聞く所によりますると、清盛等は、今度の一件で引き返して、都へ還へらうとしてゐるそうです。なぜ彼等を或る所まで出掛けて行つて迎へ擊つといふことをしないのですか。却て都にヂッとしてゐて彼等の還つて來るのを待つてゐるのですか」と。頼朝の一番の兄の義平、つまり義朝の長男であるが、この者は鎌倉にゐた。嘗て自分の叔父の義賢と仲違ひをして、武藏の大藏谷といふ所で戰ひ、遂に叔父を斬つて終つた。それで人は義平を惡源太と呼んでゐた。この義平が親父の義朝が兵を擧げたことを聞きつけ、夜を日に繼いで都へ馳せ參じた。信頼は義平に官を授けようと思つた。義平が辭退していふには「以前、保元の亂の時に、私の叔父の鎭西八郎爲朝が、藏人の官にしてやるといはれたのを辭退して、拜命しませんでした。これは時と場合で緩にすべきこともあるし、急にすべきこともある。その時態をよく心得てゐられたから辭退されたので、あの場合他に急な問題があつたので、藏人になる抔のことは全く不急の問題だつたのです。私も今官を戴いたりする場合ではありませんから、御辭退致します。叔父のやうに私も亦惡源太の稱號を用ひてゐれば、それで澤山です。聞く所によると、平氏が紀州から將に引き返さうとしてゐるといふことです。どうか願はくは私に一隊の兵士を御貸し下さいませ。さすれば私は彼等を阿部野で遮ぎ

り待ち受けて、清盛以下の首を上げ、之を獄門に曝らして御覽に入れる。その後初めて官職を拜命致しませう」と。併し信頼は此の意見を聽き入れなかつた。

語釋 第三子（長男は義平、次男は朝長、三男が頼朝。）○年十三（一説に十一。）○義賢（爲義の第二子、即ち義朝の弟。）○大藏（武藏國大藏谷。）○惡源太（叔父殺しの惡、源氏の長男なれば太郎の太を取つて惡源太といつた。）○阿部野（攝津の住吉と天王寺との間。）

已而清盛入二京師一。帝・上皇皆乘レ夜逃出入二平氏第一。信頼旦起乃覺レ之、意大沮喪。義朝檢二其兵一、稍稍散亡、所レ餘有二二千騎一。乃分守二諸宮門一、授二頼朝一以二傳家寶刀截鬚一、攜以臨レ軍。信頼不レ習レ騎。騎而墜。左右扶レ之、守二待賢門一。平重盛來攻。信頼舍レ守走。重盛以二五百騎一破レ門而入。義朝望見、咄嗟曰、「豎子敗吾事矣」。呼二義平一拒鬪。

訓讀 已にして清盛京師に入る。帝、上皇、夜に乘じて逃れ出で、平氏の第に入る。信頼旦に起き、乃ち之を覺り、意大に沮喪す。義朝其の兵を檢するに、稍稍散亡して、餘す所二千騎有り。乃ち分つて諸宮門を守らしめ、頼朝に授くるに傳家の寶刀截鬚を以てし、攜へて軍に臨ましむ。信頼、騎に習はず、騎して墜つ。左右之を扶けて、待賢門を守る。平重盛來り攻む。信頼、守を舍てて走る。重盛、五百騎を以て門を破つて入る。義朝望み見て、咄嗟して曰く、「豎子吾が事を敗れり」と。義平を呼んで拒ぎ鬪はしむ。

通釋 其の中に清盛は、京都へ歸つて來た。天皇も上皇も皆夜にまぎれて、宮中トり逃れ出でられ、平氏の邸内へ入らせられた。信頼は朝起きて其のことを知り、非常に間誤ついた。義朝は部下の兵士を檢べたところ、だ

んだん、逃げ出して、餘すところは二千騎だけであつた。そこで、人數を分けて諸所の門を守らせ、賴朝に家に傳はる寶刀鬚切を授け與へ、伴れて戰場に出かけた。信賴は馬に乘つたことがない。乘つて見たが落ちて終つた。左右の家來が之を扶けて、待賢門を守つた。その內に平重盛が待賢門へ攻めて來た。信賴は吃驚して守りを棄てて逃げ出した。重盛は五百騎を率ゐ、門を破つて御所の中へ入つて來た。義朝ははるかに之を見て、舌打ちし乍ら曰ふのに「信賴の小僧めが俺れの大事を敗つた」と。義平を呼んで、平氏を拒き戰はしめた。

語釋 咄嗟(怒り罵る聲。)

義平乃與鎌田政家・三浦義澄・平廣常・平山季重・熊谷直實等十六騎躍馬而出。指視其騎曰「赤甲而黃馬者、重盛也。宜生擒之」。進戰于大庭。騎皆注目重盛追之七匝。重盛走出、以生兵入。義平復擊走之。義朝馳使、讓義平曰「若何不善拒、而使敵數入也」。義平乃出至大宮巷、直衝平氏陣。陣潰亂、重盛與兩騎走。義平追之。垂及而馬跌。重盛踰塹。政家射之。甲堅不入。義平曰「射馬」。射馬。重盛墜。追及之。其兩騎遮鬪死。重盛僅以身免。義平慮義朝、還而援之。則義朝方與平賴盛、戰于郁芳門、大破之。賴朝射斃二人、傷一人。義平至、代父進戰。平氏軍悉敗走、退保六波羅第。我軍追北。信賴

從出、半途逃走。平氏兵乘虛入大內。

訓讀 義平乃ち鎌田政家、三浦義澄、平廣常、平山季重、熊谷直實等十六騎と、馬を躍らせて出づ。其の騎に指し視して曰く、「赤甲にして黃馬の者は、重盛なり。宜しく之を生擒すべし」と。進んで大庭に戰ふ。騎皆目を重盛に注ぎ、之を追うて七匝す。重盛走り出で、生兵を以て入る。義平復た擊つて之を走らす。義朝使を馳せ、義平を讓めて曰く、「若何ぞ善く拒がずして、敵をして數〻入らしむるや」と。義平乃ち出でて、大宮の巷に至り直に平氏の陣を衝く。陣潰亂して、重盛、兩騎と走る。義平之を追ふ。及ぶに垂んとして馬跌づく。重盛塹を踰ゆ。政家之を射る。甲堅くして入らず。義平曰く、「馬を射よ」と。馬を射る。重盛墜つ。追うて之に及ぶ。其の兩騎遮り鬪つて死す。重盛僅に身を以て免る。義平、義朝を慮り、還つて之を援く。則ち義朝方に平賴盛と郁芳門に戰ひ大に之を破る。賴朝射て二人を斃し、一人を傷つく。義平至り、父に代つて進み戰ふ。平氏の軍悉く敗走し、退いて六波羅の第を保つ。我が軍北ぐるを追ふ。信賴從ひ出で、半途にて逃走す。平氏の兵、虛に乘じて大內に入る。

通釋 そこで義平は、鎌田政家、三浦義澄、平廣常、平山季重、熊谷直實などの猛者十六騎と共に馬を躍らして出かけた。その部下に指し示して曰ふには「赤い鎧を着て黃色の馬に乘つて居るのは重盛だ。あれを生捕つたが宜いぞ」と。進んで紫宸殿の前の廣庭で戰つた。十六騎の者が皆重盛を目がけて、追つかけ廻し、櫻橘樹の周圍を七遍も廻つた。重盛は御所から走り出たが、又新手の兵をつれて、入つて來た。そこで義平は復た擊つて之を追拂つた。義朝は使をやつて、義平を責めて曰ふには「お前は何故よく拒がないで、敵を度々御所の內へ入

らせるんだ」と。そこで義平は御所から出で、大宮の巷に行き、いきなり平家の陣を目がけて突進した。平家の陣は潰え亂れ、重盛は部下の二騎と一緒に逃げ出した。義平は之を追つかけた。もう追ひ付いたかと思つた時、馬がつまづいた。その間に、重盛は堀を飛び越えて逃げた。鎌田政家は、之を弓で射つた。中つたが、鎧が堅くて突きささなかつた。義平が曰ふには「馬を射ろ」と。政家は馬を射た。重盛は馬からころげ落ちた。義平は追つかけて追ひ附いた。重盛の二騎が邪魔立てして討死した。重盛は、やつと命からがらで免れることが出來た。義平は、義朝の方を心配して、再び、御所へ還つて、之を援けることにした。この時、義朝は、平賴經と郁芳門で戰ひ、大に之を破つた。賴朝は(十三歳)射て敵の二人を斃し、一人に傷つけた。義平が其處へ歸つて來て、父義朝に代つて進み戰つた。平家の軍は皆敗れて退却し、六波羅の屋敷に立て籠つた。源氏の軍は、その逃げるのを追つかけて行つた。信賴も、これについて御所から出たが、途中から逃げて終つた。源氏が御所を虛にして出たので、平氏の兵は、其の虛につけ込んで御所へ入り込んだ。

語釋 兩騎(景安、家安。)

義朝直進、攻二六波羅一。賴政獨陣二于六條磧一。義平察二其有一貳心一、以二五十騎一突之。賴政走、歸二於清盛一。清盛聞二我軍至一、大怖失措、倒蒙冑。從者言之。清盛曰、「帝在二於後一、不レ可レ背也。」乃關二門固守一。義平力戰、排二門而入一。敵分兵更戰。我兵自レ旦至レ晡十餘合、刀折矢盡、人馬皆傷。義朝欲二親決一戰。政家扣レ馬諫曰、「衆寡勞逸、不レ較明矣。且走二東國一、以爲二後圖一。執

興殞二身徒卒一、以辱二家聲一。義朝乃收レ兵退至二三條磧一。敵兵來薄。平賀義信、佐佐木秀義、首藤俊通等救戰、俊通死レ之。義信者義光孫也。

訓讀 義朝直に進んで六波羅を攻む。賴政獨り六條磧に陣す。義平其の貳心あるを察し、五十騎を以て、之を突く。賴政走り清盛に歸す。清盛、我が軍至ると聞き、大に怖れて措を失ひ、倒に冑を蒙る。從者之を言ふ。清盛曰く、「帝後に在ます。背く可からざるなり」と。乃ち門を關ち固く守る。義平力戰し、門を排して入る。敵、兵を分ち更に戰ふ。我が兵、旦より晡に至るまで十餘合し、刀折れ、矢盡き、人馬皆傷つく。義朝親ら決戰せんと欲す。政家、馬を控へて諫めて曰く、「衆寡勞逸、較せざる明かなり。且く東國に走り、以て後圖を爲せよ。身を徒卒に殞し、以て家聲を辱しむるに孰與れぞ」と。義朝乃ち兵を收め、退いて三條磧に至る。敵兵來り薄る。平賀義信、佐佐木秀義、首藤俊通等救ひ戰ひ、俊通之に死す。義信は、義光の孫なり。

通釋 義朝は、直に進んで六波羅を攻め立てた。源賴政だけは、六條河原に陣取つて居た。義平は、彼が二心を持つてゐると見拔いて、五十騎をつれて、其の陣を衝いた。賴政は走つて清盛方へついて終つた。清盛は、源氏の兵士の攻め來たと聞いて、非常に怖れて慌てふためき、冑を後ろ向に被つた。供の者が之を注意した。清盛が曰ふのに「天子樣が後の方にお出でになる。其の方へ後ろを向ける譯に行かない。だから倒に被つたのである」と。そこで門を閉めて堅固に守つた。義平は力の限り戰ひ、その門を押し開いて中へ入り込んだ。敵は兵士を分けて、更代に戰つた。源氏の兵は朝から暮に至るまで、十餘度も戰ひ、刀は折れ矢はなくなり、人も馬も皆傷ついた。義朝は親ら進んで最後の勝負を決めようと思つた。鎌田政家が、馬をおさへとめて、諫めて曰ふには

「敵は多勢我は無勢、敵は疲れないのに、こちらは疲れてをり、比べものにならぬことは明かなことです。決戰するよりも、しばらく關東へ逃げて、後日の旗上げの仕度をなさいませ。大切な軀を名もない木ッ葉武者の手に落し、由緒ある家名を汚すのよりは其の方が餘程ましではありませんか」と。そこで義朝は兵士を引きまとめ、退いて三條河原まで行つた。平氏の兵は、跡から追つかけ迫つて來た。平賀義信、佐々木秀義、首藤俊通などは、義朝を救ひ戰つたが、俊通は討死した。平賀義信といふのは新羅三郎義光の孫である。

註釋 脯（甲の刻、午後四時。）

義朝得ㇾ間、與ㇾ三十騎東走。山門僧徒聞ㇾ其敗ㇾ也、以ㇾ三百人ㇾ要ㇾ於路ㇾ。義朝患之。武藏人齋藤實盛免ㇾ冑、謂ㇾ僧徒ㇾ曰、「左馬既死矣。我輩新募之兵、將ㇾ歸ㇾ鄕耳。公等欲ㇾ覘ㇾ我鎧仗、所ㇾ不ㇾ敢ㇾ愛。顧子衆我寡、不ㇾ能ㇾ周給。請拋ㇾ擲之。」公等自取焉。」乃投ㇾ其冑。僧相蹂踐爭ㇾ之。三十騎因驅突而過。至ㇾ八瀨。顧見信賴來。呼ㇾ義朝ㇾ曰、「子何棄ㇾ我。」義朝罵曰、「豎子首謀乃先走。何面來見ㇾ我乎。」舉ㇾ鞭拄ㇾ其面、棄ㇾ之而去。

訓讀 義朝、間を得て、三十騎と東に走る。山門の僧徒、其の敗を聞くや、三百人を以て路に要す。義朝之を患ふ。武藏の人齋藤實盛、冑を免ぎ、僧徒に謂つて曰く、「左馬既に死せり。我が輩は新募の兵、將に鄕に歸らんとするのみ。公等、我が鎧仗を覘はんと欲せば、敢て愛しまざる所なり。顧ふに、子は衆、我は寡、周く給する能はず。請ふ、之を拋擲せん。公等自ら取れ」と。乃ち其の冑を投ぐ。僧相蹂踐して之を爭ふ。三十騎因つて驅突して過ぎ、八瀨に至る。顧みて信賴の來るを見る。義朝を呼んで曰く、「子、何ぞ我を棄つる」と。義朝罵つて曰く、「豎子首謀にして乃ち先づ走る。何の面あつて來つて我を見るか」と。鞭を擧げて其の面を拄ち、之を棄てて走る。

通釋 義朝は、隙間を得たので、三十騎と共に東の方へ向つて走つた。所が比叡山の僧兵が、義朝が敗けたと聞いて、三百人の人數で、路に待ち受けて居た。義朝は之には困つた。武藏の人齋藤實盛は突差の考へで冑をぬいで、僧侶どもに向ひ曰ふのには「實は左馬頭は死んだのである。我等は新たに募集されて來た兵士で、今國へ歸らうと思つてゐるのだ。君等が鎧や武器を追ひ剝がうといふならば、別に惜しみはせぬ、進上してもよい。しかし君達の方は人數が多くて我等は人數が少く、とても皆に差上る譯には行かない。だからこれは投げ出すことしよう。君達は誰でもいいから欲しい者は自分で取れよ」と。そこで其の冑を投げ出した。僧侶どもは爭ひ踏み合ひ奪ひ合ひをした。三十騎はその間に馬を早めて、そこをつきぬけて通り、八瀨まで來た後を見ると、信賴がやつて來た。信賴は、義朝を呼んで曰ふのに「そなたは何故私を棄てて行くのですか」と。義朝は罵つて曰ふのに「小僧は發頭人でありながら、却つて先きに立つて逃げ出したらう。どの面さげて我に會ひに來たんだ」と。鞭を擧げて、其の顏を打つて、之を見棄てて立ち去つた。

註釋 山門（叡山。當時山といへば叡山寺といへば圓城寺。）○左馬頭（義朝。）○周給（支給する。）○八瀨（山城。）

至ㇾ龍華、又遇ㇾ僧徒要路。皆下ㇾ馬破ㇾ柵而過。叔祖義隆中ㇾ矢死、子朝長被ㇾ射ㇾ股、拔ㇾ箭復

戰。義朝怒、力戰走之。至堅田、見義隆首、泣語其騎曰、「八幡公遺體、獨見此人。而至於此、沈首湖水、將渡。會風濤起、取路於勢多。乃諭實盛等二十餘人、令散去。獨義平・朝長・賴朝・義信・政家及源重成・豎金王、從之。

訓讀 龍華に至り、又僧徒の路を要するに遇ふ。皆馬を下り柵を破つて過ぐ。叔祖義隆、矢に中つて死す。子朝長股を射られ、箭を拔いて復た戰ふ。義朝怒り、力戰して之を走らす。堅田に至り、義隆の首を見て、泣いて其の騎に語つて曰く、「八幡公の遺體、獨り此の人を見るのみ。而して此に至る」と。首を湖水に沈め、將に渡らんとす。會〻風濤起り、路を勢多に取る。乃ち實盛等二十餘人を諭し散去せしむ。獨り義平、朝長、賴朝、義信、政家及び源重成、豎金王之に從ふ。

通釋 龍華まで來ると、またまた僧兵が路で待ち受けして居るのに出會した。皆は馬から下り、柵を押し破つて通過した。この時、大叔父の義隆は、矢に中つて死んだ。第二子の朝長は、股を射られたが、矢を、拔いて復た戰つた。義朝は怒つて、力を盡して戰ひ僧兵を追ひ拂つた。堅田へ來て、義隆の首を見て、泣いて部下の騎に向つて曰ふには「八幡公の忘れ形身で殘つてゐるのは此の方ばかりであつた。而るに今こんなことになつて終つた。悲しいことだ」と。其の首を琵琶湖に沈めて置いて、舟で湖水を渡らうとした。丁度風がはげしく、波は高かつたので、路を勢多に取つた。そこで實盛等二十餘人を諭して、銘々散り散りに去らせた。ただ義平、朝長、賴朝、義信、政家及び源重成、小姓の金王丸だけが、義朝に從つて行つた。

語釋 龍華（近江）○僧徒（横川の僧。）○叔祖（祖父の兄弟。）○義隆（陸奥六郎、義家の第六子。）○堅田（近江。）○勢多（近江。）○金王（詳氏。）

賴朝騎睡而後、夜過森山驛。士兵聚、且捕之。賴朝乃覺拔刀斬二人。義朝怪賴朝不在、使政家返索、獲之。至鏡驛。聞平氏拒不破關、乃由間道東出。會大雪、馬不能前。皆釋甲步行、復與賴朝相失。至青墓驛。義朝嘗嬖驛長女延壽、生一女。於是投其家。乃分遣義平・朝長・募兵於信濃・飛驒。朝長創劇、途還。義朝曰、「賴朝雖幼、不如汝怯。」欲留之而去。朝長請父殺己、勿爲追兵所獲。義朝乃刃之。士兵聞義朝在焉、群聚圍之。重成詐稱義朝、射殺十餘人、剝面自殺。

訓讀 賴朝騎し、睡つて後れ、夜、森山驛を過ぐ。士兵聚り、且に之を捕へんとす。賴朝乃ち覺めて、刀を拔いて二人を斬る。義朝、賴朝の在らざるを怪しみ、政家をして返り索めしめて、之を獲たり。鏡驛に至る。平氏、不破關を拒ぐと聞き、乃ち間道より東に出づ。大雪に會ひ、馬前む能はず。皆甲を釋いて步行し、復賴朝と相失ふ。青墓驛に至る。義朝、嘗て驛長の女、延壽を嬖し、一女を生めり。是に於て、其の家に投ず。乃ち義平、朝長を分遣し、兵を信濃、飛驒に募らしむ。朝長創劇しく途より還る。義朝曰く、「賴朝は幼なりと雖も、汝の怯なるが如くならず」と。之を留めて、去らんと欲す。朝長、父に請ひ己を殺して、追兵の獲る所と爲らしむる勿れと。義朝乃ち之を刃す。士兵、義朝在りと聞き、群聚して之を圍む。重成詐つて義朝と稱し、十餘人を射殺して

面を剝ぎて自殺す。

通釈 頼朝は馬に乗つたまま、居眠りしたので皆に後れ、夜になつて、森山驛を通つた。土地の農兵どもが寄つてたかつて彼を捕へようとした。頼朝はそこで目がさめ刀を拔いて、二人を斬つた。義朝は、頼朝が居ないのを怪しんで、政家をして、引き返し之をさがさせ、つれて來た。かくて、鏡驛まで來た。平氏が不破の關所で喰ひ止めてゐると聞いたので、そこで裏道から東の方へ出て行つた。丁度大雪で馬を進めることも出來ない。皆は鎧をぬぎすてて、歩き出したが、又頼朝にはぐれて終つた。青墓驛に到着した。義朝は、かつて、其の驛の頭の娘延壽といふものを寵愛し、一女を生ませた。そんな譯でその家へとめて貰らつた。そこで義平と朝長を別々に派遣し、信濃飛驒へ行つて、兵士を募集させた。朝長は、股の創が烈しく痛んで堪まらず、途中から引きかへした。義朝は曰ふのは「頼朝は、まだ年は行かぬが、お前の樣に臆病ではない」と。(朝長は頼朝の兄。)彼を其の儘青墓驛に留めて、立ち去らうと思つた。朝長は、父にお願ひして追兵の爲めに生捕られないように、自分を殺して貰ひ度いと申出た。そこで義朝は自ら手を下して之を殺した。土地の農兵どもは、義朝が、驛長の家にかくれて居ると聞いて、大勢で之を取り圍んだ。源重成は、詐つて、義朝と名乘り、十餘人を射殺し、人に知れぬやうに吾れと吾が面の皮を剝いで自殺した。

語釈 森山(近江。)○鏡驛(近江。)○不破關(美濃。)○青墓(美濃。)○驛長(大炊と稱す。)○一女(名は夜叉御前。)

義朝乃走。又遣二義信一募レ兵。義信曰「公欲二安適一。」曰「欲レ適二内海一。」依二長田忠致一。忠致者、政家ノ妻、父也。義信曰「不可。彼性趨レ勢。恐不レ利二於公一。」弗レ聽而訣。道塞不レ達。聞大俠玄光者、延壽母兄也。遣二金王一就レ謀。玄光乃航載二義朝一。政家柴覆之。由二株瀨河一如二内海一。津吏覺呵止之。玄光爲不レ聞而過。吏追射レ之。玄光回レ舟至レ岸。吏入レ舟、發レ柴索之。玄光曰「義朝雖レ敗、亦從二二三十騎一也。安依二吾儕一求レ活乎。假使在焉、必自殺耳。安落二子等手一。」義朝耳語政家曰「玄光諷二我自殺一也。如何。」政家曰「且待レ之。」吏亦不レ究而去。明日、達二内海一。忠致厚待レ之。

訓釈 義朝乃走る。又義信を遣はし兵を募らしむ。義信曰く、「公安くに適かんと欲する」と。曰く、「内海に適き長田忠致に依らんと欲す」と。忠致は、政家の妻の父なり。義信曰く、「不可なり。彼れ性、勢に趨る。恐らくは公に利あらざらん」と。聽かずして訣る。道塞がりて達せず。大俠玄光なる者は、延壽の母の兄なりと聞くや、金王を遣はし就いて謀らしむ。玄光乃ち航して、義朝、政家を載せ、柴にて之を覆ひ、株瀨河より内海に如かんとす。津吏覺つて、之を呵止す。玄光聞かざるまねして過ぐ。吏追うて之を射る。玄光、舟を回へして岸に至る。吏、舟に入り柴を發して之を索む。玄光曰く、「義朝敗ると雖も、亦二三十騎を從へん。安んぞ吾が儕に依つて活を求めんや。假使在るも、必ず自殺せんのみ。安んぞ子等の手に落ちんや」と。義朝、政家に耳語して曰く、「玄光我に自殺を諷するなり。如何んせん」と。政家曰く、「且く之を待て」と。吏も亦究めずして去る。

明日、内海に達す。忠致厚く之を待つ。

通釈 その間に義朝は、そこを逃げた。一方又平賀義信を遣つて、兵士を募集させた。義信は曰ふのに「公は一體、何處へ行かれますか」と。義朝は答へて曰ふに「内海へ往つて、長田忠致にたよらうと思ふ」と。忠致とは、鎌田政家の妻の父である。義信は曰ふのに「いけません。あの男は勢の宜い方へ附きたがる男です。多分御爲めにならないと思ひます」と。義朝は聽き入れないで別れた。しかし平氏の兵で路が塞がつてゐて行くことが出來ない。大親分の玄光といふ男伊達は延壽の母の兄だといふことを聞いたので、金王を遣つて玄光に就いて相談させた。そこで玄光は舟を出して義朝、政家を載せ、其の上へ柴をかけて匿し、株瀦河から、内海の方へ往かうとした。渡場の役人が感附いて之を咎め止めた。玄光は聞えぬ樣な風をして、そこを漕いで通つた。役人は追つかけて來て之を射つた。そこで玄光は、舟を返して岸につけた。役人は、舟に乘り込み、積んである柴をめくつて搜し索めた。玄光が曰ふのに「義朝はいくら戰爭に敗けたとは云へ、源氏の大將であるから、まだ二三十騎は從へて居るだらう。吾々のやうなものにたよつて生き延びようとする氣遣ひはない。よし此の中に居たとしても、屹度自殺するだらう。如何でか君等の手に捕らへられやうや」と。義朝は、これを聞いて政家に耳うちして曰ふに「玄光は我々に自殺するように、それとなく申してゐるのである。如何致したものだらう」と。政家が曰ふのに「まあまあ、しばらくお待ちなさい」と。幸に役人も底まで檢べないで立ち去つた。その翌日、内海に到着した。忠致は之を手厚く待遇した。

語釋 内海（尾張。）○玄光（醫律玄光。）○株瀦河（美濃、呂久川のこと。）

義朝欲二亟東去一。時屬二除夜一。忠致固止之。止三日、忠致子景致、密勸二其父殺一義朝一。忠致從之、乃伏二力士三人于浴室一、而進二浴。金王操一刀侍一浴。力士不二敢發一。義朝求二浴衣一。不二至一。金王自出取之。力士乃入。義朝赤手搏二仆一人一。其二人偶刺殺之。金王聞二浴室譁一、則返、輒斬二三人一。政家方與二忠致一飲。聞二變一且起。行酒者拔二刀一。政家奪二其刀一斬之。景致自後斬二政家一。忠致女嫁二政家一者、伏二政家之刀一而死。金王・玄光、欲二報一忠致父子一不二獲一。殺二數十人一、取二馬一逃去。忠致乃獻二義朝及政家首于平氏一。義朝與二政家一、年並三十八。信賴以下皆伏誅。

訓讀 義朝亟に東に去らんと欲す。時、除夜に屬す。忠致固く之を止む。止まること三日、忠致の子景致、密に其の父に義朝を殺さんことを勸む。忠致之に從ひ、乃ち力士三人を浴室に伏せ、而して浴を進む。金王、刀を操りて浴に侍す。力士敢て發せず。義朝、浴衣を求む。至らず。金王自ら出でて之を取る。力士乃ち入る。義朝赤手にて一人を搏仆す。其の二人偶刺して之を殺す。金王、浴室の譁しきを聞き則ち返り、輒ち三人を斬る。政家、方に忠致と飲む。變を聞き且に起たんとす。酒を行ふ者刀を拔く。政家、其の刀を奪ひて之を斬る。景致、後より政家を斬る。忠致の女、政家に嫁せる者、政家の刀に伏して死す。金王、玄光、忠致父子に報いんと欲す

れども、獲ず。數十人を殺し、馬を取つて逃れ去る。忠致乃ち義朝及び政家の首を平氏に獻ず。義朝、政家と年並に三十八。信頼以下、皆誅に伏す。

通釋 義朝は急に關東へ去らうと思つた。併し丁度其の日は大晦日であつた。忠致はあすはお正月だからといふので、固く之を止めた。それで逗留して三日目のこと、忠致の子の景致は、こつそり義朝を殺すように父に勸めた。忠致、之に從ひ、そこで力士三人を湯殿に匿して置いて、入浴をすすめた。金王は刀を執つて、義朝の入浴に附き添つて居た。力士も手出しは出來得なかつた。義朝は浴衣を持つて來いと命じた。併し誰れも持つて來ない。そこで金王自ら出て之を取りに行つた。この間に力士は、湯殿へ這入り込んだ。義朝は、から手で一人を擊ち仆した。併し他の二人が兩方から突き刺し、義朝を殺して終つた。金王は湯殿の物音を聞きつけ、急に立ち返り樣その力士三人を斬り殺した。政家は、丁度忠致と酒を飲んで居た。騷動を聞いて、座より起ち上らうとした。すると酌をしてゐた者は、刀を拔いた。政家はその刀を奪ひ取つて其の男を斬り棄てた。併し景致はその後から政家を斬つて終つた。忠致の娘で政家に嫁いてゐた者が、政家の刀を取つてつッ伏し、自害をして果てた。金王と玄光の兩人は、忠致親子を殺して仕返ししようと思つたが見つからなかつた。そこで數十人を殺し、馬を奪ひ、それに乘つて逃げ去つた。そこで忠致は、義朝及政家の首を平氏に獻じた。義朝は、政家と同じ年の三十八であつた。信頼以下のものも皆誅に伏した。

語釋 伏=政家之刀=（刀を下に立てゝ置いて、その上へうつ伏して貫通自害すること。）

義平在=飛驒=、來屬者甚多。聞=義朝死=、皆散。義平欲=自盡=。念當=報=父仇=而死=、乃變服入=京師=。適値=舊臣志内景澄=。因僞爲=其僕=、出=入平氏第=。舍=于三條烏丸=。舍主人視=僕=、舉止非=凡=。又怪=主僕每食=於隱處=也、竊=窺=之=、則易=饌而食=。乃走告=平氏=。平氏使=難波經房=以=三百騎=圍=之=。義平拔=刀出=、斬=數人=、躍升=屋=、不=知所=往。經房乃執=景澄=去。

訓讀 義平、飛驒に在り、來り屬する者甚だ多し。義朝死せりと聞き皆散ず。義平自盡せんと欲す。念ふに、當に父の仇を報いて死すべしと。乃ち服を變じて京師に入る。適〻舊臣志内景澄に値ふ。因つて僞つて其の僕と爲り、平氏の第に出入し、三條烏丸に舍す。舍の主人、僕の擧止凡に非ざるを視、又主僕每に隱處に食するを怪しみ、竊に之を窺へば、則ち饌を易へて食へり。乃ち走つて平氏に告ぐ。平氏、難波經房をして三百騎を以て之を圍ましむ。義平、刀を拔いて出で、數人を斬り、躍つて屋に升り、往く所を知らず。經房乃ち景澄を執へて去る。

通釋 義平は、飛驒に居つたが、來つて屬くものが甚だ多かつた。義朝が死んだと聞いて、皆解散して終つた。義平も自殺しようとした。併し父の讐を報いて後、死ぬべきだと思ひ直ほした。そこで變裝して京都に入り込んだ。ところが偶然にももとの家來志内景澄に遇つた。そこで僞つてその僕となつて、平家の屋敷に出入し、三條烏丸に宿を取つて居た。宿の主人が、その僕の立居振舞が並々でないと見て取り、又この主從はいつも人の見ない處で飯を食ふのを訝かしいと思ひ、こつそりのぞいて見ると、膳を取りかへて食つて居た。そこで主人は走つて之を平家に密告した。平家は難波經房をして、三百騎を引きつれてその宿所を取り圍ませた。義平は刀を拔い

て、跳り出で數人を斬り、躍り上つて屋根に升り、何處へ往つたか分らなくなつた。それで經房は景澄だけを捕へて立ち去つた。

義平晝伏夜行、以伺平氏。欲倚東近江舊人、行至逢阪。經房詣關神祠、途見義平、困臥、以五十騎圍之。義平蹶起。箭中其臂、不能揮刀。終被縛、至六波羅。坐之堂緣。怒曰、「吾何坐此。」自起入堂。清盛出見、謂之曰、「脫於三百騎獲於五十騎。何嚮勇後怯也。」義平笑曰、「命焉耳。子之命窮、亦至於此。吾爲子之大患。宜速見殺。」乃斬于六條磧。義平臨刑、仰首、睨平氏、第曰、「保元之亂、處斬者以夜。今乃白日斬我。平賊何無狀乎。嚮使我言行、奴輩無遺類矣。」遂被斬。時年二十。

訓讀 義平、晝は伏し夜は行き、平氏を伺ふ。東近江の舊人に倚らんと欲し、行いて逢坂に至る。經房、關神の祠に詣で、途に義平の困臥せるを見、五十騎を以て之を圍む。義平蹶起す。箭其の臂に中りて、刀を揮ふこと能はず。終に縛せられて六波羅に至る。之を堂緣に坐せしむ。怒つて曰く、「吾れ何ぞ此に坐せん」と。自ら起つて堂に入る。清盛出で見て、之に謂つて曰く、「三百騎に脫して、五十騎に獲らる。何ぞ嚮きには勇にして後には怯なる」と。義平笑つて曰く、「命なるのみ。子の命も窮まらば、亦此に至らん。吾は子の大患たり。宜しく速に殺さるべし」と。乃ち六條磧に斬る。義平、刑に臨み、首を仰げ平氏の第を睨んで曰く、「保元の亂に、斬に處する者は夜を以てせり。今乃ち白日に我を斬る。平賊何ぞ無狀なる。嚮きに我が言をして行はしめば、奴輩遺類無かりしならん」と。遂に斬らる。時に年二十。

語釋 義平は晝は匿れて夜歩き、そして平家の隙を伺つてゐた。東近江の古馴染の人にたよらうと思つて、逢坂の關まで來た。雞波經房が、關の明神に參詣し、途中で義平が弱つて寢て居るのを見、五十騎を率ゐて之を圍んだ。義平は跳ね起きた。併し矢が其の臂に中つたので、刀を揮り廻はすことが出來なかつた。たうとう縛られて、六波羅の清盛の屋敷へ入れられた。清盛は彼を座敷の緣側に坐らせた。義平は怒つて曰ふには「乃公はこんな所に何んで坐られようか」と。自ら起つて座敷の中へ入つて行つた。清盛は出で來て、これに會ひ、義平に向つて曰ふには「前に三百騎で圍まれた時にはぬけ出し、今五十騎の爲めに捕へられた。何ぜ前には勇氣があつて後には臆病となつたのだ」と。義平笑つて曰ふには「天命である。そなただつて命數が盡きたなら、矢張りこのやうになるであらう。私はそなたの心配の種である。早く殺されたら宜からう」と。そこで六條河原で斬ることとなつた。義平は刑せらるるに臨み、首を擧げて平氏の屋敷の方を、はつたと睨んで曰ふには「保元の亂の時には、お仕置きをするには夜であつた。然るに、今眞ッ晝間に俺を斬る。平氏の賊どもは、何んといふ無禮な奴等だ。さきに私の言ふことが行はれてゐたら、奴等は一人殘らず殺されてゐたのだが、殘念なことであつた」と。遂に斬られた。その時、年は二十歲であつた。

語釋 逢坂（近江。）○關神祠（逢坂にある。）○使我言行（平治の亂の時、平氏が熊野から還つた時、阿部野に要して擊たんと進言して用ひられなかつたことをいふ。）○無遺類（殘る者なくの意。）

賴朝之與父兄相失也、夜迷失路、出於小平山。有漁人、知其非常人、舍之、裝爲女子、

而薦包其刀、自肩之、送至青墓驛、延壽家。頼朝託截鬚刀於延壽、而去之關東。遇平氏將平宗清、被虜、還過延壽門、義朝所生女、年十二、聞之泣曰、「我他日受辱。寧今從阿兄死。」將走出。衆止之。後獨赴水死也。

訓讀 頼朝の父兄と相失ふや、夜迷うて路を失ひ、小平山に出づ。漁人有り、其の常人に非ざるを知り、之を舍し、裝ひて女子と爲し、薦にて其の刀を包み、自ら之を肩にし、送つて青墓驛の延壽の家に至る。頼朝、截鬚の刀を延壽に託し、而して去つて關東に之く。平氏の將平宗清に遇うて虜へられ、還つて延壽の門を過ぐ。義朝生む所の女、年十二、之を聞き泣いて曰く、「我れ他日辱を受けん。寧ろ今阿兄に從つて死せん」と。將に走り出でんとす。衆之を止む。後獨り水に赴いて死せり。

通釋 頼朝は、父兄とはぐれてから後、夜路に迷うて小平山に出た。所が一人の漁夫が頼朝の尋常でないことを知り自分の家へ止め女に變裝させて、薦で刀を包み、自分でそれを肩に背負ひ、青墓驛なる延壽の家まで送り届けた。義朝は既に出發した後であつたので、頼朝は截鬚の刀を延壽に預けて、そこを立ちのいて、關東へ行つた。途中で平家の大將平宗清に出會ひ捕へられて京へ引き返し、延壽の門前を通つた。義朝が延壽に生ませた娘、夜叉御前は、其の時年十二であつたが之を聞いて泣いて曰ふのに「妾も後日かかる辱を受けることであらう。一層のこと今の内に兄さんについて死んで終うた方がよい」と。夜叉御前は家をかけ出さうとした。皆は之を引き止めた。しかし、その後、獨りで入水して死んで終つた。

語釋 小平山（美濃。）

頼朝既至六波羅。就斬有日。宗清謂之曰、「欲活邪。」曰、「然。父兄皆亡。非吾誰祈其冥福。」宗清詣清盛、後母池尼。尼從容問曰、「頼朝如何。」對曰、「肖右馬君。」右馬、蓋尼之子、蚤死者。尼悲之、爲請清盛再三。乃得宥死、流于蛭島。道傍觀者、見其有威容、相語曰、「是猶放虎於野耳。」舊臣皆勸其削髮。獨秩父盛安附其耳、語曰、「郎君、宜存髮以待前途。」頼朝首肯而去。

訓讀 頼朝既に六波羅に至る。斬に就く日有り。宗清之に謂つて曰く、「活きんと欲するか」と。曰く、「然り。父兄皆亡ぶ。吾に非ざれば誰か其の冥福を祈らん」と。宗清、清盛の後母池尼に詣る。尼、從容として問うて曰く、「頼朝は如何ん」と。對へて曰く、「右馬君に肖たり」と。右馬とは蓋し尼の子、蚤く死せし者なり。尼之を悲しみ、爲めに清盛に請ふこと再三なり。乃ち死を宥さるるを得て、蛭島に流さる。道傍に觀る者、其の威容有るを見相語つて曰く、「是れ猶ほ虎を野に放つが如きのみ」と。舊臣皆其の髮を削るを勸む。獨り秩父盛安、其の耳に附き、語つて曰く、「郎君宜しく髮を存し、以て前途を待つべし」と。頼朝首肯して去る。

通釋 頼朝はすでに六波羅の清盛の屋敷へ引かれた。斬られる日も定まつた。宗清は頼朝に向つて曰ふには「どうだ、生きて居たいか」と。頼朝は曰ふに「そりや活きたい。父も兄も皆死んで終つた。私がその供養をして

死後の幸福を祈つてやらねば、他に祈る人はないのである」と。宗清は清盛の繼母池尼の處を訪ねた。尼は落着いた樣子で之に問うて曰ふのに「頼朝はどんな兒だ」と。宗清對へて曰ふのに「その容貌は、右馬助家盛殿によく似て居ります」と。右馬助といふのは、池尼の子で、若死した兒のことである。池尼は可哀相に思ひ頼朝の爲めに清盛に再三死を赦されんことを請うた。それで死を赦されて、伊豆の蛭が島に流された。道ばたに立つて頼朝の流されるのを觀たものは、頼朝の威嚴のある樣子を見て、互に相語つて曰ふには「これは恰も虎を野に放つやうなものだ」と。舊臣等は皆髪を剃つて坊主になるように勸めた。ただ秩父盛安が、その耳に口をあてて語つて曰ふのに「若君髪を殘して置いて、行く末武運の開けるのをお待ちなされよ」と。頼朝はうなづいて立ち去つた。

語釋 蚤死（年十二で死んだ。）○蛭島（伊豆。）

頼朝有二六弟一。曰ク義門、蚤死。曰ク希義居二駿河一、被レ虜、流二土佐一。曰ク範頼、爲二藤原範秀一所養、稱二蒲冠者一。平氏不レ問也。曰ク今若、曰ク乙若、曰ク牛若。三兒皆婢常盤ノ出也。並從レ母匿二於龍門里一。平氏索レ之不レ獲。因捕二常盤之母一。常盤乃自至。清盛悅二其色一、密挑レ之。不レ肯。其母涕泣、說以禍福。不レ得レ已從レ之。清盛乃釋二三兒一、盡爲レ僧。今若改二名全成一、居二醍醐一。乙若更二名義圓一、事二圓慧法親王一。牛若甫二歲一、居二鞍馬山寺一。稱二遮那王一。未レ削レ髪也。

訓讀 頼朝六弟有り。曰く義門、蚤く死す。曰く希義、駿河に居り、虜にせられて土佐に流さる。曰く範頼、藤原範秀の養ふ所と爲り、蒲冠者と稱す。平氏問はざるなり。曰く今若、曰く乙若、曰く牛若。三兒は皆婢常盤の出なり。並に母に從つて龍門里に匿る。平氏之を索むれども獲ず。因つて常盤の母を捕ふ。常盤乃ち自ら至る。清盛其の色を悅び、密に之を挑む。肯んぜず。其の母涕泣し、說くに禍福を以てす。已むを得ずして之に從ふ。清盛乃ち三兒を釋し、盡く僧と爲す。今若は名を全成と改めて、醍醐に居る。乙若は名を義圓と更めて、圓慧法親王に事ふ。牛若は甫めて二歲、鞍馬山寺に居る。遮那王と稱し、未だ髪を削らざるなり。

通釋 頼朝には、六人の弟があつた。義門といふのは早く死んだ。希義といふのは駿河に居たが、虜にせられて、土佐に流された。範頼といふのは藤原範秀に養はれて、蒲冠者と稱して居た。平氏では、これを別に問題にもしなかつた。其の外は今若といひ、乙若といひ、牛若といつた。この三人の兒は皆下婢の常盤の腹に出來た兒であつた。皆母に從つて、龍門の里にかくれて居た。平家では、隨分さがしたが、見つからなかつた。それで常盤の母を捕へた。母が捕へられたので常盤は自ら名乘つて出た。清盛はその容色に見惚れ、人知れず、口說いた。常盤はなかなか承知しなかつた。しかし常盤の母が泣いて禍と幸福との道理を說いて、身を委せるように勸めた。常盤は已むを得ず母の言葉通り、清盛の意に從つた。清盛はそこで、三兒を赦し、皆坊主にした。今若は名を全成と改めて醍醐に居つた。乙若は名を義圓と改めて、大津の圓慧法親王に事へた。牛若は、やつと二歲で、鞍馬の山寺に居つた。遮那王といつて小さいので、まだ髪を剃らなかつた。

語釋 龍門里（大和。）○醍醐（京都の東。）○圓慧（三井寺圓滿院に住す。）○鞍馬（京都の北。）

平氏ノ勢威、歲熾月盛。頼朝在ニ配所一。以ニ其乳母比企ノ禪尼常餽遺之一纔得レ不レ乏。伊豆ノ人伊東祐親・北條時政、奉ニ平氏ノ令一、監視之。關東ノ舊臣齋藤實盛・大庭景親・畠山重能以下、皆叛事ニ平氏一。其屬ニ意頼朝一者、亦弗ニ敢來通一。獨佐佐木秀義、自ニ近江一來、寓ニ相模一、倚ニ澁谷重國一、使ニ其子定綱等數問ニ頼朝一。安達盛長・加藤景廉等數人、亦往來給仕焉。頼朝深沈有ニ大略一、性堅忍、喜怒不レ形ニ於色一、爲ニ衆所一レ畏愛一。中宮屬三善康信、其ノ故人也。一月三使ニ使以報ニ京師ノ動靜一。清盛累遷至ニ太政大臣一。其ノ妻姉幸ニ於法皇一、生ニ皇子一、遂受レ禪。是爲ニ高倉帝一。清盛納レ女、立爲ニ中宮一。

訓讀 平氏の勢威、歲に熾に月に盛なり。頼朝配所に在り。其の乳母比企禪尼、常に之に餽遺するを以て、纔に乏しからざるを得たり。伊豆の人伊東祐親、北條時政、平氏の令を奉じて之を監視す。關東の舊臣齋藤實盛、大庭景親、畠山重能、以下皆叛いて平氏に事ふ。其の意を頼朝に屬する者も、亦敢て來り通ぜず。獨り佐々木秀義、近江より來り相模に寓し、澁谷重國に倚り、其の子定綱等をして、數〻頼朝を問はしむ。安達盛長、加藤景廉等の數人も、亦往來給仕す。頼朝、深沈にして大略有り。性堅忍、喜怒、色に形はさず。衆の畏愛する所となる。中宮屬三善康信は、其の故人なり。一月に三たび使をして以て京師の動靜を報ぜしむ。清盛、累遷して太政大臣に至る。其の妻の姉法皇に幸せられて、皇子を生み、遂に禪を受く。是を高倉帝を爲す。清盛、女を納れ、立てて中宮と爲す。

通釋 平氏の威勢は歲に月に盛んとなつた。頼朝は蛭島に居た。その乳母の比企禪尼が、常に仕送りをして呉れたので、やつと事缺かないで濟んだ。伊豆の人で伊藤祐親、北條時政は、平氏の命を受けて、之を監督してゐた。關東の舊い家來の齋藤實盛、大庭景親、畠山重能以下、皆源氏に叛いて平家に事へた。又頼朝に心を寄せてゐた者も、平氏を恐れて亦頼朝の所へ往來しようともしなかつた。ただ佐々木秀義が近江からやつて來て、相模に逗留し、澁谷重國の所に世話になつてゐたが、度々その子定綱をやつて頼朝を見舞はしめた。安達盛長、加藤景廉など數人の者も、亦往き來して、頼朝の御用をして居た。頼朝は生れつき落ち着いた男で、大きな考を持つてゐて、その性質は辛抱づよく、喜しい事も、腹立ちも決して顏色に出さず、多くの人々に畏れられ、且つ大切にされて居た。中宮屬三善康信といふ人は、頼朝の知合であつた。月に三度使を寄越して、京都の樣子を知らせて呉れた。この頃清盛はづんづん官位が進んで、太政大臣にまでなつた。その妻の姉は法皇に寵愛せられ、皇子をも生み、たうとう其の皇子は禪を受けられることとなつた。これが高倉天皇と申す。清盛は自分の娘を納れ、立てて中宮とした。

語釋 餽遺（衣食を送ること。）○中宮屬（中宮は皇后と相並んだもの。屬は小進の次ぎの官。）○故人（康信は比企禪尼の妹の子。）○妻姉（一說に姉は妹の誤。）

先レ是、常盤寵衰、出嫁ニ於人一。牛若年已十一。嘗見ニ諸家ノ系譜一、自知ニ其先世一、悵恨久レ之。於

是、書讀書、夜學劍搏、爲人短小精悍、面白齒出。甚趨捷、爲衆僧所患苦。師勸其削髮。對曰「二兄爲僧、吾已恥之。可復傚乎」。强之。竟弗聽。時藤原清衡孫秀衡、爲鎭守府將軍。牛若欲往倚之。適有鐵賈吉次、往來陸奥。會其詣山。牛若乃陰語之以情。吉次曰、「事甚易。然取子而去、恐遭僧徒怒」。牛若笑曰、「彼輩苦我。我去、其所欲已」。又會下總人深棲賴重詣山。牛若與之狎。於是、三人與偕東、至鏡驛。牛若乃自加冠、名曰義經、稱九郎。

訓讀 是より先き、常盤寵衰へ、出でて人に嫁す。牛若年已に十一なり。嘗て諸家の系譜を見て、自ら其の先世を知り、悵恨すること之を久しうす。是に於て、書は書を讀み、夜は劍搏を學ぶ。人と爲り、短小にして精悍面白く、齒出づ。甚だ趨捷にして、衆僧の患苦する所と爲る。師、其の髮を削らんことを勸む。對へて曰く、「二兄、僧と爲る、吾れ已に之を恥づ。復傚ふ可けんや」と。之を强ふ。竟に聽かず。時に藤原清衡の孫秀衡、鎭守府將軍と爲る。牛若往いて之に倚らんと欲す。適〻鐵賈吉次なる有り、陸奥に往來す。其の山に詣るに會ふ。牛若乃ち陰に之に語るに情を以てす。吉次曰く、「事甚だ易し。然れども子を取つて去らば、恐らくは僧徒の怒に遭はん」と。牛若笑つて曰く、「彼が輩我を苦しむ。我れ去るは、其の欲する所のみ」と。又下總の人深棲賴重の山に詣るに會ふ。牛若之と狎る。是に於て、三人與に偕に東し、鏡驛に至る。牛若乃ち自ら冠を加へ、名づけて義

經と曰ひ、九郎と稱す。

通釋 これより先き、常盤は、清盛の寵愛が衰へ、屋敷から出て他家へ緣附いた。牛若は、其のうちに十一歲となつた。ある時、諸家の系圖を見て、自分の家の先祖を知り、現在自分の落魄してゐるのを隨分殘念に思つた。それからといふものは書は書物を讀み、夜は劍術、體術を學んだ。その人柄は丈低く、氣象は鋭く、顏は白いが出齒であつた。非常にすばやくて手に終へず、多くの僧侶に隨分厄介に思はれてゐた。その師匠は髮を剃れよと勸めた。牛若は對へて曰ふのに「二人の兄が僧になつてゐます。私はこれまでそれを耻として居ります。それを復た私が倣へるものですか」と。師匠は之を强ひた。けれどもとうとう承知しなかつた。當時藤原清衡の孫の秀衡が鎭守府將軍となつて居た。牛若はその人の所へたよつて行かうと思つた。たまく鐵商人の吉次といふ男があつて、陸奥へ往き來してゐた。この男が丁度鞍馬山へやつて來た。そこで牛若はこつそり此の男に內情を話してつれて行つて呉れと賴み込んだ。吉次が曰ふのに「それは何んでもないことです。併しあなたを連れ去つたら、坊主どもに怒られますといけませんから」と。牛若は笑つて曰ふのに「彼等は私に手を燒いてゐる。私が此處を去ることは、彼等には願つたり叶つたりなのだ」と。又其の頃丁度下總國の人深棲賴重が山に來てゐた。牛若は之と相親しんでゐた。そこで牛若、吉次、重賴の三人は一緒になつて東へ行き、美濃國鏡驛まで來た。そこで牛若は自ら元服して、義經と名乘り、九郎と稱した。

語釋 嫁ニ於人（大藏卿藤原長成に嫁す。）○師（僧覺日。）○二兄（今若、乙若、後の全成、義圓。）○吉次（後に義經に事へて堀彌太郎といふ。）

遂至下總。居數月、適有一强盜、盜馬。衆追之。盜負樹。衆不敢迫。義經徒手捕之。又有